

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第139集

藤 守 遺 跡 II

平成14年度 (主) 焼津榛原線緊急地方道道路改築
(A) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第139集
藤守遺跡 II

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願い致します。

頁	誤	正
7・8頁 左下	平成12年度調査区	今回調査区
7・8頁 左下	今回調査区	平成12年度調査区
10頁 第5図基本土層図 上に追加		A～Eは東西のグリッドライン上の東壁土層
61頁 下から13行	渋谷	瀧谷
82頁 下から14行	比較すると坏の	比較すると遠隔地での東駿河地域産の坏の
85頁 左下に追加		写真是70頁の胎土分析試料一覧に対応する

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第139集

藤 守 遺 跡 II

平成14年度 (主) 焼津榛原線緊急地方道道路改築
(A) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回の藤守遺跡の調査区は、平成12年度に実施した地点に隣接する北側である。前回の調査では7世紀後半から8世紀にかけての集落と12世紀後半から13世紀中頃とされる集落跡が発見された。今回は後者の中世初頭前後の集落跡の続きが調査され、屋敷地を囲むと考えられる区画溝やそれに囲まれた比較的大型の縦柱建物跡などが発見されている。

前回の調査では青白磁の合子（1点）などの輸入陶磁器も出土したが、量的には微量であり在地土豪や御家人といった有力者の屋敷を想定することはできなかったが、今回の大型掘立柱建物跡の発見や渥美・知多地域からの甕などの大型陶器の出土例の多量さからすると有力者の存在も再度検討すべきであろう。

本遺跡は、駿河湾から約1kmの扇状地の末端部に所在しており、立地としては太平洋沿岸の海上交易の拠点となることも可能な場所に位置している。

古墳時代末期から奈良時代にかけて使用された土師器の駿東型甕と遠江型甕が同一遺構内から混在して出土しており、これは、古代の駿河国と遠江国の境界を示すと共に活発な東西交流の一例といえるものであろう。

中世初頭前後には渥美・湖西産の山茶碗や渥美・知多産の鉢や甕なども出土しており、遠隔地との直接的、間接的な経済交流が非常に活発であったことを示している。また、出土遺物からみて今回の調査区内の集落跡は比較的短期間に生成消滅した集落と考えられ、当該期に限定できる例が県内では少ないだけに非常に貴重な調査例である。

本遺跡は、東西約2km、南北約1.5kmと広大な範囲に存在しており、大井川下流域の主要な遺跡として過去にも何度もかの発掘調査が実施されてきたが、未だにその全体像が掌握されていないのが実状である。断片的な資料からではあるが、おそらく古墳時代以降、居住地を少しづつ移動させながら集落を維持管理し、平安時代以降には広範囲に人々が暮らすようになり、輪中集落も形成されるまでになったと考えられる。

本遺跡の研究は、途についたばかりであり、今後の新たな発見により、より一層その重要度が増すことは確実である。

現地調査および本書の作成にあたっては、静岡県島田土木事務所並びに静岡県教育委員会・大井川町教育委員会をはじめとする関係機関各位の御理解と御協力に厚くお礼を申し上げたい。御指導・御助言をいただいた地元の方々や寒風の吹く中でも辛抱強く作業にあたられた現地作業員の方々、短期間の内に要領よく報告書をまとめられた整理作業員の方々にこの場を借りて深く感謝する次第である。

平成15年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　言

- 1 本書は、静岡県志太郡大井川町に所在する藤守遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成14年3月に刊行した報告書（平成12年度現地調査）に続くものであるため、「藤守遺跡II」とした。
- 3 調査は、（主）焼津棟原線緊急地方道路改築（A）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県島田土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 4 調査期間は、平成14年10月25日から平成15年3月14日（現地調査は10～12月、資料整理は1～3月）である。
- 5 調査体制は以下のとおりである。

平成14年度

所長：斎藤 忠 副所長：飯田英夫 常務理事：条田徳幸

総務課長：本杉昭一 会計係長：大橋 薫

調査研究部長：山本界平 調査研究部次長兼資料課長：栗野 克巳

調査研究部次長兼調査研究二課長：佐野五十三 主任調査研究員：柴田 瞳

- 6 本書の執筆は、付編1・2を除き柴田が担当した。遺物写真は、当研究所職員が撮影した。
- 7 プラントオパール・花粉分析と土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を付編1・2に掲載した。
- 8 遺構図の作成は、写真測量による図化を株式会社フジヤマに委託した。
- 9 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 10 本調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　例

- 1 調査区の座標軸は、旧日本測地系の第VII系を用いた。
- 2 国土座標を利用して、一辺10mのグリッド（方眼）を調査区内に設定し、東西列をアルファベットで、南北列をアラビア数字で表記し、北西隅の交点をもってその区（グリッド）の名称とした。
- 3 遺構の略号は、S H（掘立柱建物跡）、S R（旧路）、S D（溝状遺構）、S F（土坑）、S E（井戸跡）、P（小穴）、S X（性格不明遺構）を用いた。掘立柱建物跡の柱穴は番号のみを図に付した。
- 4 本稿では、大アラコ窯（12世紀中葉）以降の灰釉陶器の系譜に連なる土器の器種の総称として、「山茶碗」という通称を用いている。
- 5 本稿では、古墳時代と平安時代について「末期」を設定している。この時期は次の時代への大きな転換期を示し、考古学的に様々な変化が顕著な時期である。
- 6 掘出中の出土遺物の表記は、「●」の多くが土器を示すが、その他の場合は注記した。また、土器は「P」と略称している場合もある。「S」は礫または石製品を示している。
- 7 土器実測図で、口径が不明瞭であるものは中心線を外し、ある程度根拠のあるものは中心線を一点破線とした。

目 次

序
例言
凡例

第Ⅰ章 調査概要.....	1
第1節 調査経過.....	1
第2節 調査方法.....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	4
第1節 地理的・歴史的環境.....	4
第2節 基本土層.....	9
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物.....	13
第1節 古墳時代末期の遺構と遺物.....	13
第2節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構と遺物.....	14
1 挖立柱建物跡と出土遺物.....	14
2 溝状遺構と出土遺物.....	24
3 井戸跡と出土遺物.....	34
4 土坑・性格不明遺構と出土遺物.....	34
5 その他の遺構と出土遺物.....	51
第Ⅳ章 まとめ.....	52
第1節 平安時代末期から鎌倉時代の集落について.....	52
第2節 平安時代末期から鎌倉時代の土器について.....	57
付 編	
1 藤守遺跡の古植生について (パリノ・サーヴェイ株式会社)	63
2 藤守遺跡および関連遺跡出土土師器壺の胎土分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	70
3 西遠江型壺と駿東型壺について (柴田)	81

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図（番号は表2に対応）	3
第2図	調査区位置図（調査区は図の中央部）	5
第3図	グリッド配置図	6
第4図	平成12・14年度調査区位置図（静浜村土地宝典を基に作成）	7
第5図	基本土層図	10
第6図	全体図	11
第7図	S X11 実測図	13
第8図	S H2・3 実測図	15
第9図	S H12・13 実測図	16
第10図	S H14・15・22・29 実測図	17
第11図	S H16～21 実測図（1）	19
第12図	S H16～21 実測図（2）	21
第13図	S H16～21 実測図（3）、P125、S F21 実測図	22
第14図	S H23・24 実測図	23
第15図	S H25～28 実測図	25
第16図	S H30～33 実測図	26
第17図	S E 3～5 実測図	35
第18図	S F16～18 実測図	37
第19図	S F20、S X12・14 実測図	38
第20図	S R1、SD1・7・24、噴砂 実測図	39
第21図	出土遺物実測図（1）	40
第22図	出土遺物実測図（2）	41
第23図	出土遺物実測図（3）	42
第24図	出土遺物実測図（4）	43
第25図	出土遺物実測図（5）	44
第26図	掘立柱建物跡の棟方位（北を基準とする）	53
第27図	藤守期の集落変遷図（1）	54
第28図	藤守期の集落変遷図（2）	55
第29図	平成12年度出土土器追加実測図	57
第30図	藤守遺跡周辺の山茶碗窯	58

挿表目次

表1	新旧遺構名対照表	2
表2	周辺関連遺跡一覧（番号は第1図に対応）	2
表3	掘立柱建物跡一覧（1）	27
表4	掘立柱建物跡一覧（2）	28
表5	掘立柱建物跡一覧（3）	29

表6	掘立柱建物跡一覧（4）	30
表7	掘立柱建物跡一覧（5）	31
表8	小穴一覧（1）	32
表9	小穴一覧（2）	33
表10	溝一覧	36
表11	井戸跡・土坑・性格不明遺構一覧	36
表12	土器一覧	45
表13	鉄滓・土・石製品一覧	51
表14	藤守遺跡出土山茶碗產地別数量一覧（溝口彰啓作成）	60
表15	東遠江系山茶碗底部圧痕計数一覧（溝口彰啓作成）	60

図版目次

図版1	平成12年度調査区と今回の調査区との合成写真	
図版2	S H16（南西より）	
図版3	1. 調査区周辺の景観（北西より）	2. 調査区全景（北より）
図版4	1. 調査区全景（南より）	2. S H13、S X12・14（西より）
図版5	1. S H19～21（北西より）	2. S H23・24（東より）
図版6	1. S H23～25（南西より）	2. S H25～28（北東より）
図版7	1. S R 1、S D 24（南東より）	2. S D 1（北より）
図版8	1. S H33（北より）	2. S H13-2、S H16-13、S X12（北東より）
図版9	1. S H16-10（北より）	2. S H16-11上層（南東より）
	3. S H16-14（北東より）	4. S H16-11下層（北より）
	5. S H16-20（北より）	
図版10	1. S H16-16（東より）	2. S H16-18（西より）
	3. S H16-19（南東より）	4. S H16-23（東より）
	5. S H16-24、P 125（西より）	6. S H26-4（北西より）
	7. S H28-5（南西より）	8. S F21（南東より）
図版11	1. P 150・151（北東より）	2. S X11（北より）
図版12	1. S X12（北西より）	2. S F18（北西より）
図版13	1. S E 3（南東より）	2. S E 3土層（南東より）
	3. S F16、S D 7（東より）	4. S E 5（南西より）
	5. B 7区噴砂（西より）	
図版14	1. S E 4（北東より）	2. S E 5（南西より）
図版15	出土遺物（1）	
図版16	出土遺物（2）	
図版17	出土遺物（3）	
図版18	出土遺物（4）	
図版19	出土遺物（5）	
図版20	出土遺物（6）	
図版21	出土遺物（7）	

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査経過

御静岡県埋蔵文化財調査研究所は、平成12年度に当遺跡の発掘調査を実施した。その調査では、遺跡がより広い範囲に存在する可能性が高くなり、焼津桟原線の道路工事予定範囲内での確認調査を本調査に並行して実施し、その結果、北側の650mに遺構が連続している可能性が指摘された。

この調査所見を受けて、静岡県教育委員会文化課と島田土木事務所の協議により、当研究所を調査機関とする現地調査が実施されることとなった。

調査区の周囲は現在水田であり、米の収穫に影響のないよう稲刈りが完了した時点で調査を開始することになった。また、調査地点は現道の交差点にあたり、通行止めをしての調査となった。現道の復旧は平成14年12月後半とされたため、それまでに調査を完了せざるをえない状況であった。

調査にあたっては、現道部の盛土を重機により除去する必要性があったが、北西から南西にかけての現道下には電話線が埋設されており、盛土と表土の除去作業には慎重さが要求された。遺構は埋設時の掘削により破壊されていたが、幸い電話線は遺構確認面よりも深く埋められていたため、人手による作業には支障はなかった。

平成14年10月後半より発掘調査の準備と重機による表土除去を行い、11月には人力による包含層の除去と遺構の確認と掘削作業を行い、本格的な発掘調査を開始した。

12月前半には発掘し、ラジコンヘリコプターによる景観写真撮影と写真測量（委託）を実施した。

12月後半には現地の撤収作業と基礎整理作業を並行して行い、平成15年1月から3月は本格的な資料整理作業を行った。

第2節 調査方法

基準点とグリッド杭の設置は旧日本測地系の第VII系を用い、水準点の移設に際しても前回の測定値との整合性をとっている（委託）。

遺物の出土状況図や断面図の作成（1/10縮小図）に際しては、トータルステーションを利用した取り方測量に依った。

遺構図の作成（1/20縮小図）はラジコンヘリコプターを利用して写真測量に依った（委託）。

現地での写真撮影は6×7判モノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルム、35mm判カラーネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを主に使用した。資料整理では遺物の撮影に4×5判モノクロネガフィルム、6×7判モノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを主に使用した。

今回の調査では、平成12年度の調査方法を極力踏襲している。遺構名は平成12年度のものに追加している。ただし、今回の調査区に隣接した平成12年度調査区のなかで、今回の調査結果により遺構名が新たに変更になっているものがある点は注意していただきたい（表1参照）。

前回は現地調査の遺構番号は報告書作成時に全て新しい遺構名に変更したが、今回は小穴を除く溝や井戸跡など遺物が出土した遺構番号はできるだけ変更しないで掲載し、小穴と遺物の出土しなかった遺構の番号は、報告書作成時に新たに追加もしくは変更した（表3～9参照）。

小穴は掘立柱建物跡の柱穴と認定したものは、個別遺構図面に柱穴番号を付した。柱穴番号は南西の柱穴から算用数字で時計回りに付した。柱穴と確定できなかった小穴は、算用数字の前にPを付し、全

体図（第6図）に全て掲載した。

出土遺物は包含層出土遺物でも、口縁部もしくは底部が1/2以上残存するものは実測図を掲載した。その他、遺構内出土遺物と特徴的な遺物に関しては、破片でも掲載に努めた。

注記はSFMII-番号とした。

表1 新旧遺構名対照表

新遺構名	既報告遺構名	調査時の遺構名	新遺構名	既報告遺構名	調査時の遺構名
S HI2-1	S H4-1		S HI5-5	P 18	
S HI2-2	S H4-2	S P23	S HI5-6	S F2中央部	S P9中央部
S HI2-3	S H4-3	S P24	S H32-1	P 24	
S HI2-4	S H4-6		S H32-3	P 26	
S HI4-1	P 11		P 90	S H4-5	
S HI4-4	P 14		P 91	S H4-4	
S HI5-1	P 9				

*既報告遺構名とは、平成12年度に発掘調査し、平成14年に刊行した報告書に記載した遺構名のことである。

新遺構名とは、今回の報告で使用した遺構名（正式名称）のことである。

小穴の発掘調査時の遺構名は、表3～9を参照していただきたい。

表2 周辺関連遺跡一覧（番号は第1図に対応）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	藤守遺跡	26	宮上遺跡	51	莊館山古墳群
2	小山城跡	27	敬満神社経塚	52	白砂ヶ谷古墳群
3	塙谷古窯跡	28	谷口原古墳群	53	経塚山古墳群
4	蛭ヶ谷古窯跡	29	愛宕塚古墳	54	助宗古窯跡群
5	西側古窯跡	30	白山神社経塚	55	時ヶ谷・五鬼兔古墳群
6	倉見原古墳群	31	きつね沢古窯跡群	56	若王子古墳群
7	大ヶ谷横穴群	32	ほろん沢古窯跡群	57	釣瓶落古墳群
8	土器谷古窯跡	33	すやん沢古窯跡群	58	郡遺跡
9	勝間田城跡	34	釜谷西古窯跡	59	女池ヶ谷古墳群
10	御小屋原古墳群	35	駿河山遺跡	60	兎沢古墳群
11	丸山古窯跡群	36	神座古窯跡	61	高崎古墳群
12	向山古窯跡群	37	相賀古窯跡	62	笛吹段古墳群
13	水掛渡古墳群C群	38	旗指古窯跡群	63	塙津古墳群
14	水掛渡古墳群B群	39	菅ヶ谷古窯跡群	64	道下遺跡
15	水掛渡古墳群A群	40	鳥羽美古墳	65	道添遺跡
16	庚申塚古墳	41	居倉遺跡	66	宮之腰遺跡
17	9 TEE古墳	42	瀬戸古墳群	67	小深田西遺跡
18	宮裏中原古墳群	43	竈ヶ谷古窯跡	68	小深田遺跡
19	竹林寺廐寺跡	44	南新屋瓦窯跡	69	道場田遺跡
20	六千ヶ谷古窯跡群	45	秋合古墳群	70	小川城跡
21	南原古窯跡	46	山廻遺跡	71	落合遺跡
22	南原瓦窯跡群	47	秋合遺跡	72	矢崎遺跡
23	高根森古墳群	48	御子ヶ谷遺跡	73	石成遺跡
24	中原遺跡	49	内瀬戸墓群		
25	青木原遺跡	50	谷稻葉・高草古墳群		



第1図 周辺遺跡分布図（番号は表2に対応）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

藤守遺跡は大井川により形成された扇状地の末端の自然堤防微高地に位置している（加藤2002）が、広い後背湿地を有しているのではなく、東へ800mほど進むと駿河湾に面した砂堤列に行きあたる。

今回の調査区の標高は約2mであり、大井川の本・支流の影響を常に受けている、もしくは、常時洪水の対策を考えていた地域であろう。

更新世の大井川は、経塚山から西に折れ、小笠山付近に河口が広がり扇状地が形成され、遠州灘へと注いでいたとされる。後に徐々に東へと流れを変え、牧之原台地の厚い疊層を堆積させた。更新世末期には隆起した牧之原台地が形成され、大井川の流れは大きく東へと向かい、志太平野を形成し現在に至っている（浅井1972）。

現在の大井川は南西の牧之原台地沿いに流れる湯日川に平行して南東方向へ流れているが、過去には島田市道悦島付近から焼津市田尻にかけて東へと流れていた時期があったようである。その名残として柄山川が現在も流れ、その西岸の境川が遠江と駿河の国境付近に位置していたため、その名称が残ったとされている。現在の境川は当遺跡のすぐ西側を流れおり、当遺跡はある時期駿河国に属していた可能性もある。

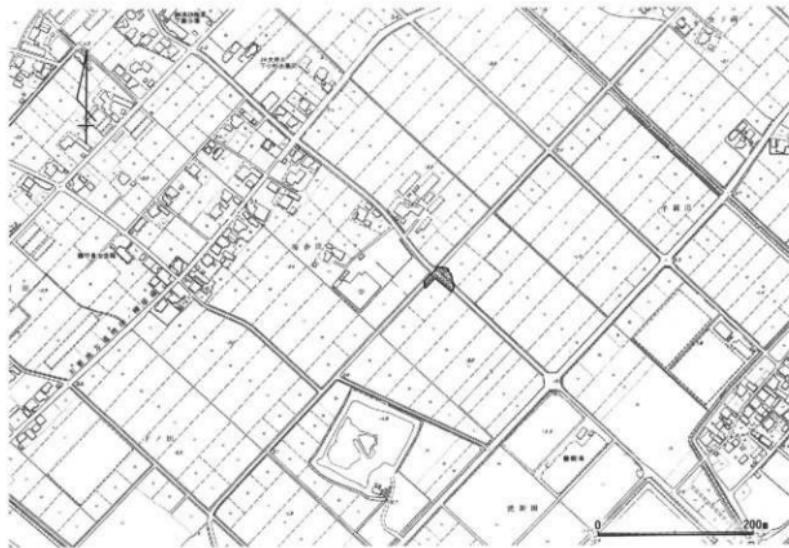
志太平野では網状に流れた旧流路が地形図により復原され、大井川の本・支流は古代以来激しく流路を変えていたことが容易に推察される。そのため、ある時代の固定した流路を推定することはかなり困難なことであるが、当遺跡が古代律令期に遠江と駿河のどちらの国に属していたかについては、重要な問題であるので、ここで簡単に紹介しておきたい。

『大井川町史』（山下1984）によると「古流大井川も大井川の氾濫源一帯に流れていて、奈良・平安時代の主流は木屋川・柄山川・境川一帯で、当時の湯日川は湯日谷を出て間もなく大井川の分流の一つへと注いでいたと考えられる。その後貞觀年間の大氾濫によって大井川主流は以後中世を通じ現在の湯日川筋へとかわった」とされており、古代の藤原郷が湯日川から古流大井川右岸の間に存在する可能性が指摘されている。

万葉集にある「斯太能宇良乎 阿佐許求布祢波 与志奈之爾 許求良米可母与 余志許佐流良米」（駿河国歌）の志太の浦は都衙関連の御子ヶ谷遺跡（48）周辺の内陸部の湖沼群を指すという説（八木・磯部1981）と大井川町の海岸沿いを示すというものがある。この歌は駿河国の出来事であるので、大井川町近辺に志太の浦が存在したならば、藤守遺跡は駿河国に属していた可能性も出てくる。

『大井川町史』にあるように、近世の向棟原という地名からも遠江国藤原郡藤原郷を藤守遺跡を含む大井川町周辺にあてる説は有力であるが、志太郡藤原郷を当遺跡周辺とすることや『和名類聚抄』に記載されていない郷名の検討も今後すべきかもしれない。

当遺跡の7世紀末から8世紀にかけての土師器の甕には、西遠江系と東駿河系の異系統の2種類が存在する。これらは、およそ半々の割合で出土しているが、牧之原台地上の遠江の同時期の中原遺跡（24）、宮裏遺跡、青木原遺跡（25）、宮上遺跡（26）といった集落跡では、東駿河系の甕は比較的少ない。西遠江系の甕は、駿河国への西からの人的的波及に伴い、静岡市川合志保田遺跡のように多数出土する。これに対して、東駿河系の甕は古代遠江国での出土比率は低い。藤守遺跡を遠江国に属していたものとすると、東駿河系の甕の出土量の多さが他の遠江国のお跡例とは異なる。現状では、藤守遺跡がどちらの国に属していたのか不明であるが、駿河国の人々との交流が盛んであったことは出土した土器が示



第2図 調査区位置図（調査区は図の中央部）

しているのであろう。

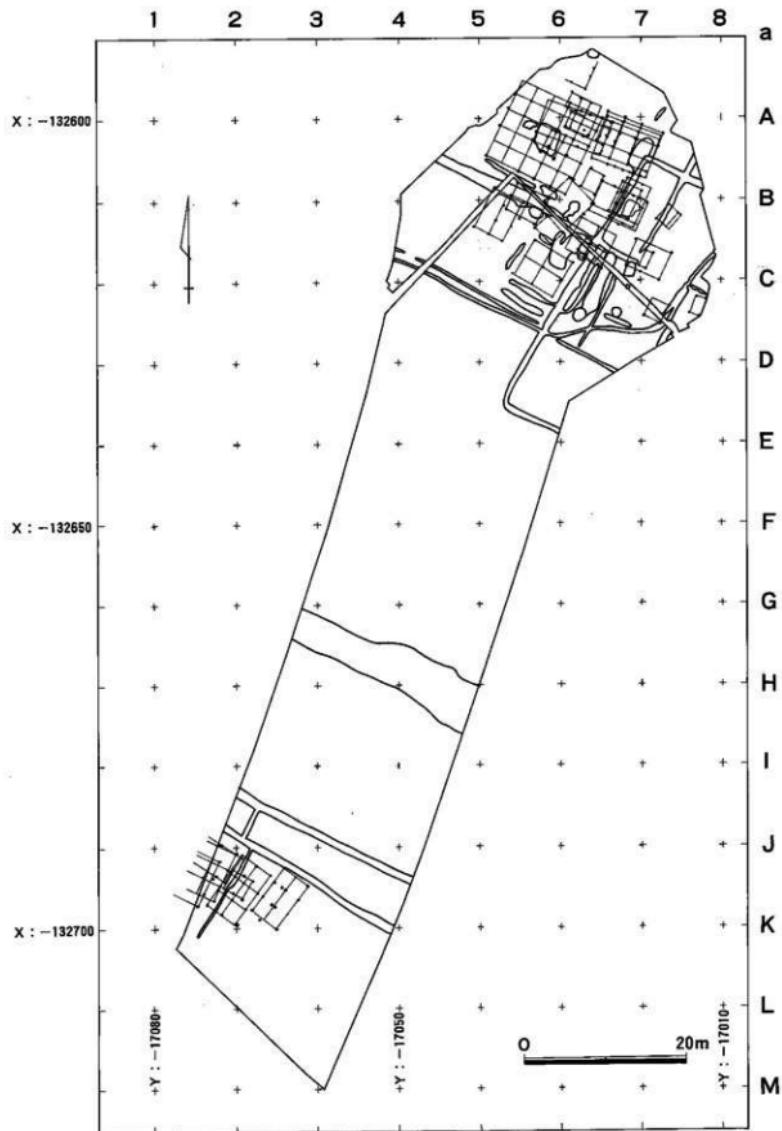
平成12年度と今回の発掘調査により発見されたものは、古墳時代末期から奈良時代にかけてと平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺構と遺物が主である。とくに、12世紀後半から13世紀中頃とされる集落は時期が限定されるだけに非常に重要な史料となるであろう。この頃の藤守遺跡周辺は、初倉荘（初倉の通称は、明治22年に初倉村として統合された大井川の右岸の吉田町の北に接した地域に残っているが、中世の初倉荘とは範囲も位置も異なっている。近世の村名が現在の字名として残っており、その初倉村は旧初と呼ばれている）に属しており、中央の有力な本家へと寄進されていたことが文献に残されている。その変遷を簡単に以下に示しておきたい。

保延元（1135）年皇后が宝莊嚴院に初倉荘を寄進して以降、美福門院（鳥羽上皇の皇后）、暲子内親王（鳥羽上皇の子で後の八条院）、春華門院（八条院の養女）、順徳天皇へと相続され、承久3（1221）年の承久の乱により、一旦は幕府に没収された。その後、幕府から守貞法親王、安嘉門院、龜山天皇へと受け継がれているようである。

『南禪寺文書』によると永仁7（1299）年、龜山法皇が大井川以東の鮎川、江富、吉永、藤守の4郷を禪林寺（後の南禪寺）に寄進した記録がある。その後、それらの郷は元徳2（1330）年に後醍醐天皇により東寺に寄進され、東寺領初倉荘となった。これにより、初倉荘は大井川以西の南禪寺領と東寺領に二分され、室町時代になると、棟原町の勝間田城（9）に本拠を構えた地頭の勝田（勝間田）氏により次第に横領されていったとされる。

周辺に平安時代末期から鎌倉時代の遺跡は多数存在しているが、窯跡や経塚を除くと時期や性格などが明瞭な遺跡はまだ少ない。ただし、徐々にではあるが地道な発掘調査により内容が判明しつつある遺跡は多い。

最近報告された中原遺跡（24）と青木原遺跡（25）では、屋敷地を囲む連結した区画溝が復原されて



第3図 グリッド配置図



第4図 平成12・14年度 調査区位置図 (静浜村土地宝典を基に作成)

いるが（勝又2002）、藤守遺跡の単独的な区画溝の在り方とは異なっている。同じ賀佐莊の静岡空港関連のミョウガ原遺跡でも区画溝を伴う集落が発見されている。

伊勢神宮領の大津御厨とされている落合遺跡（71）、矢崎遺跡（72）、石成遺跡（73）でも当該期の遺構が調査され、石成遺跡では比較的規模の大きい区画溝が存在する。溝間の距離は推定で約35mである。落合遺跡や矢崎遺跡で発見された溝の一部も、区画溝になる可能性が指摘されている。矢崎遺跡では、溝内に崩れ落ちたかのような人頭大の礫や強固な井戸側が設置された井戸跡など有力者の存在を物語る遺構も存在する。いずれにしても、溝自体の規模は藤守遺跡例より大きい。これは、居住者の階層や経済力による差であるのか、立地環境による差であるのかは今後の検討課題である。

*第1図は、平成元年に修正された国土地理院発行の1/50,000地形図を基に作成したものである。同様の周辺遺跡分布図を平成14年刊行の報告書にも掲載したが、原図は明治22年陸地測量部作成の1/50,000地形図である。

*第4図は、平成12年度と今回の発掘区を地籍図上に示したものである。区画溝S R 1は、小字の上ノ内籠と下ノ松本の境界にある畦畔の位置と一致する。

第2節 基本土層

平成12年度の基本土層の位置に今回の調査区は近く、また、土質も前回の状態と大きく異なっていたいなかったため、前回の基本土層をそのまま応用した（第5図）。

今回の調査区の多くが現道下にあったため還元状態となり、土色は全体に青味がかっていた。ただし、遺構のプラン確認は比較的容易であった。

当遺跡の特徴の一つに、駿河湾沿いの志太平野としては土壤の堆積量が非常に少ない点が挙げられる。中世以降に輪中集落が形成されたこともその要因の一つかもしれないが、輪中集落形成以前の7世紀末から13世紀にかけても、土壤の堆積量は同様に少ない。7世紀末以降の土壤の堆積厚は30~50cmほどである。洪水などによる侵食や土地改良などによる人為的な削平も考慮すべきかもしれないが、志太平野のなかでは比較的安定した土地環境にあったものと理解される。鎌倉時代以降の4・5層土のプラントオパール分析（付録1）では、水田耕作の可能性が指摘されている。安定した土地環境下にありながら居住域から生産域へと転換しているのには、何らかの政治的な要因が背景にあるかもしれない。

今回の調査区は、北側の現地表面の標高が低く、下層の遺構確認面（7層上面）の標高は逆に高い。このため、層厚の比較的薄い北側は水田耕作などにより攪拌されているようである。

1層土は、近現代の水田耕作土であろう。層厚は約16cmである。

2層土は、縦まりに欠けるシルトである。

3層土は、前回の調査区内の北側に存在していた水田耕作土である。今回の調査区内では南側の一部のみに存在する。

4層土と5層土は、現道下では明瞭に分層することができたが、6層土の標高が高い地点での分層はできなかった。これは、プラントオパール分析の結果が示すように、水田の耕作による攪拌の影響が大きいものと考えられる。

6層土は、遺物包含層であり、7世紀末と12世紀後半~13世紀中頃の土器などが多数出土している。

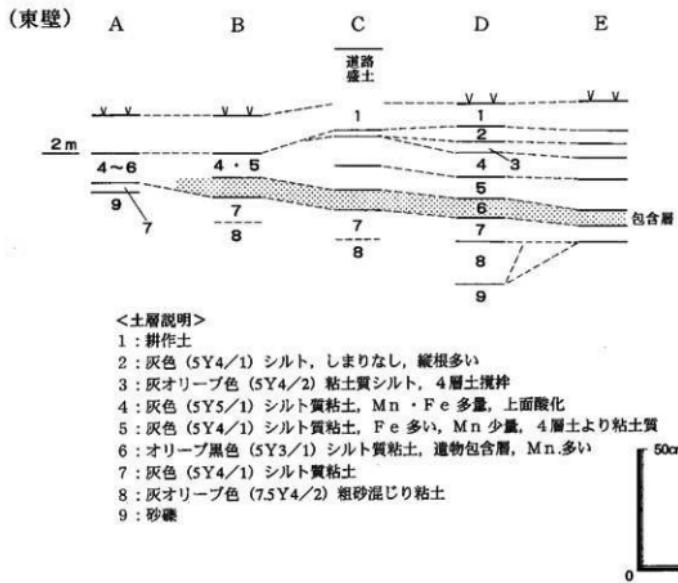
6層下面で遺構のプラン確認をしたが、この面は北側ほど高く（標高約2m）、掘立柱建物跡が集中して発見された理由がよく理解できる。

7層土は、下層に8層土が存在する場合は層厚が厚く、存在しない場合は層厚が薄いかほとんど存在

しない。

8層土は、粗砂混じりの粘土としているが、今回の調査区内は砂質が強い。

9層土には、拳大の円礫も含まれており、上面はかなりレベル差がある。



第5図 基本土層図



第6図 全体図

第III章 発見された遺構と遺物

第1節 古墳時代末期の遺構と遺物

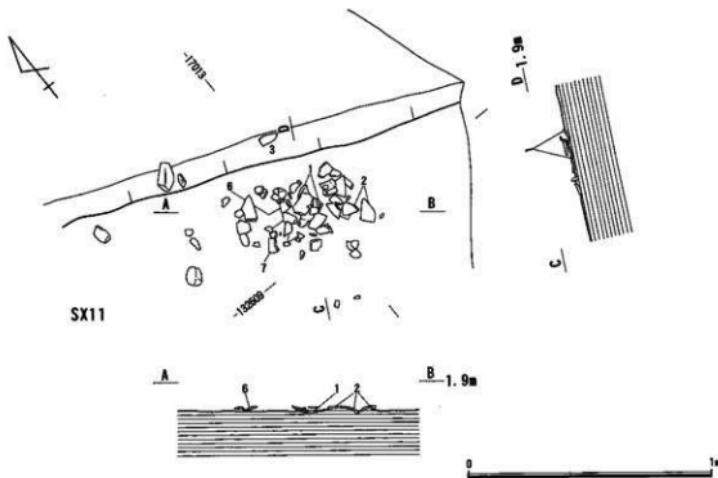
平成12年度の調査区では竪穴住居跡を含む居住域が発見された。西側に約1km離れた航空自衛隊静浜基地整備に伴った調査でも7・8世紀代の遺物が出土しており、古墳時代の集落域は広域に展開していた可能性がある。

今回の調査区からはSXIIとした土器集積遺構が1基確認されたに過ぎないが、6・7層土からは当該期の土器片が散在して出土しており、周辺には遺構が多数存在している可能性がある。調査区の中央部は西から東にかけて旧河道（7層土は埋積土最上層）が流れおり、この河道が埋没した後に集落が形成されたものと考えられる。

SXII（第7・21図） A7区南東に位置し、一部SD1に切られている。周辺からは比較的多くの同時期の土器片が出土しており、当初は集積されていたものが、後の攪乱などにより散乱したものと推測される。周辺から出土した遺物もこの遺構に関連するものとして掲載した。

遺物は7層上面に張り付くように出土しており、土器を主として少數の礫が伴う。7世紀末葉の須恵器壺蓋と壺身や土師器の壺や甕（西遠江型の小型品を含む）が少數出土している。土師器の甕は、口縁部のみを復原できない状態に細片化したものであったが、壺には完形に近い状態で発見されたものもある。須恵器はかえり付きの壺蓋が完形に近く復原されている。

平成12年度に調査したSX3やSF7の在り方と部分的にはあるが共通点もあり、祭祀に用いた土器の廃棄場所もしくは祭祀関連遺構と推測される。SX3とSF7は便宜的に別遺構名にしているが、同じ目的に利用された遺構・遺物と考えている。SX3とSF7からは様々な器種や器形の須恵器と土



第7図 SXII 実測図

器が出土していることが特徴である。また、須恵器と土師器の構成比は、おおよそ須恵器が8・9割（大井川町教育委員会にも多数の土器が保管されている）と圧倒的に多い点も特徴であろう。

S XII出土土器は、少ない出土量にしては器形のバラエティがある。しかし、須恵器と土師器の構成比は若干須恵器の方が少なく、その点で S X 3・S F 7と異なる。

第2節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構と遺物

時期の確定できる遺物が出土していない遺構も多いが、包含層出土遺物には7世紀代を除くと12・13世紀の土器以外は無く、土器の出土量からしてもほとんどの遺構はこの時期のものと考えられる。ただし、地震痕跡はもう少し新しい時期のものと思われる。

1 摂立柱建物跡と出土遺物

摂立柱建物跡は前回の調査区と跨って確認されているものが多く存在する（SH 2・3・14・15・32）ため、それらの遺構については、前回調査分も含めて極力掲載に努めた。また、前回報告した SH 4は、今回修正の必要性が確認されたため欠番とした。

調査区内の小穴のプラン確認は比較的容易であり、形状から判断して、それらが柱穴になる確率は高いものと認識している。ただし、調査区の北側だけは遺構確認面が砂礫層となっており、プラン確認は非常に困難であった。

今回は柱穴数が不足していても摂立柱建物跡として報告しているものが多いが、櫛列や壇などの施設になる可能性も十分にある。

大きさや棟方位などの計測値は、一覧表にまとめたので、そちらを参照していただきたい。

出土した山茶碗頬のなかで底および口縁部が半分以上残存しているものは、包含層遺物も含めて実測図を掲載した。その他、特徴的なものは破片でも掲載に努めた。

SH 2（第8図） B 5 区北西に位置している。今回北側の隅柱穴が新たに発見され、柱穴番号 9 を追加した。今回の調査により 3 間 × 2 間が確定した。

SH 3（第8図） B 5 区北東に位置している。北東部の柱穴 2 基が新たに発見され、柱穴番号 8・9 を追加した。2 間 × 2 間の総柱建物跡になるが、柱穴 8・9 はやや東にずれている。

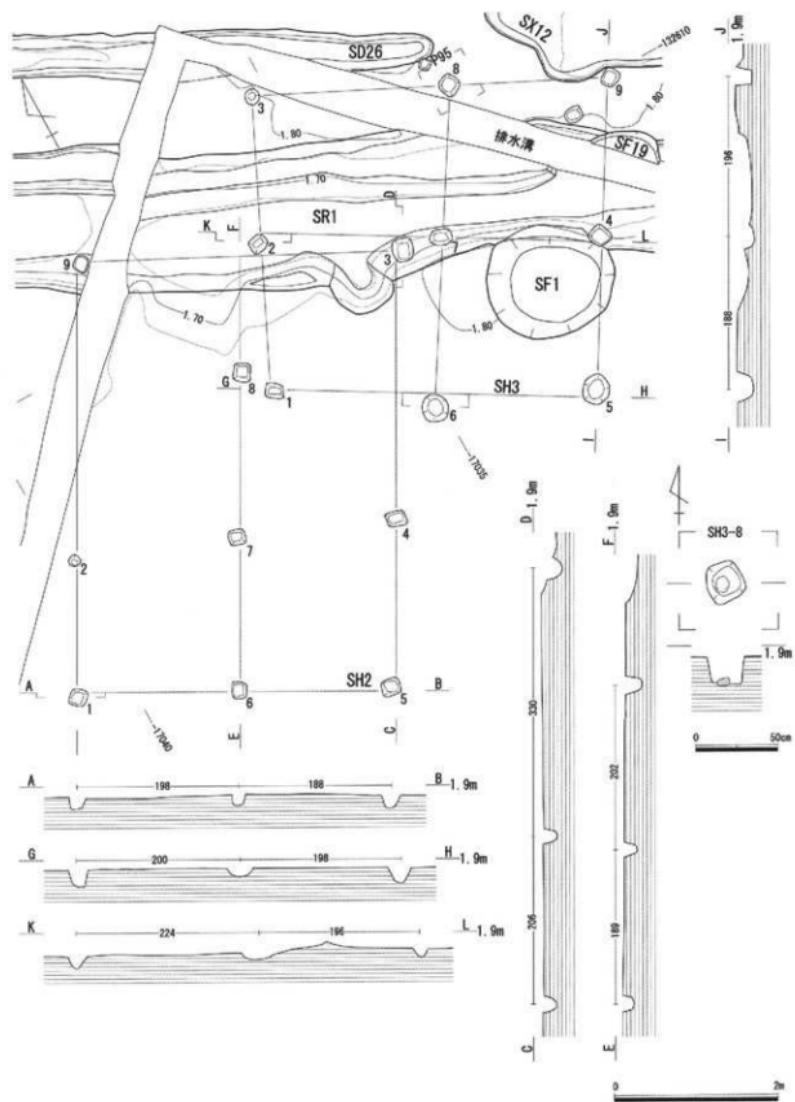
SH 12（第9図） B 5 区北東部に位置している。前回の報告のなかで SH 4 として報告していたもの一部である。内部には P 4・5 が並んでおり、これらも何らかの施設になる可能性もある。

SH 13（第9・21図） B 6 区北西に位置し、棟方位は SH 4 に平行する。柱穴 1・2・3 の配列状況から推定した建物跡であるが、南西側と北西側の側柱穴が確認されていない点で確実性に欠ける。

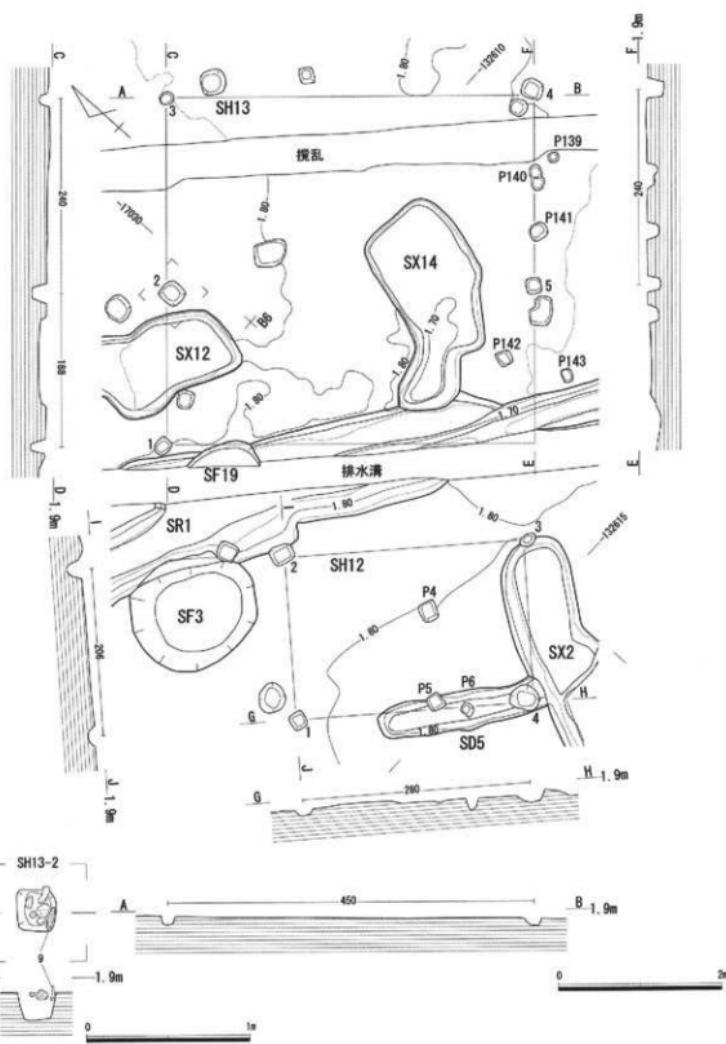
SH 14（第10図） B 6 区南西に位置している。形態は隣接する SH 12 に類似する。南隅柱穴 4 の周辺には多数の小穴が存在し、それらのどれかが柱穴 4 になる可能性もある。

SH 15（第10図） B 6 区中央部にあり、2 条の区画溝と重複しており、建物跡の変遷を考える上で重要な位置にある。2 間 × 2 間の総柱建物であるが、南西側の柱間がやや狭く、構造的には SH 1 に類似している。屋内の南北の柱筋は、SH 28 の北西桁側の柱筋によおそ一致している。

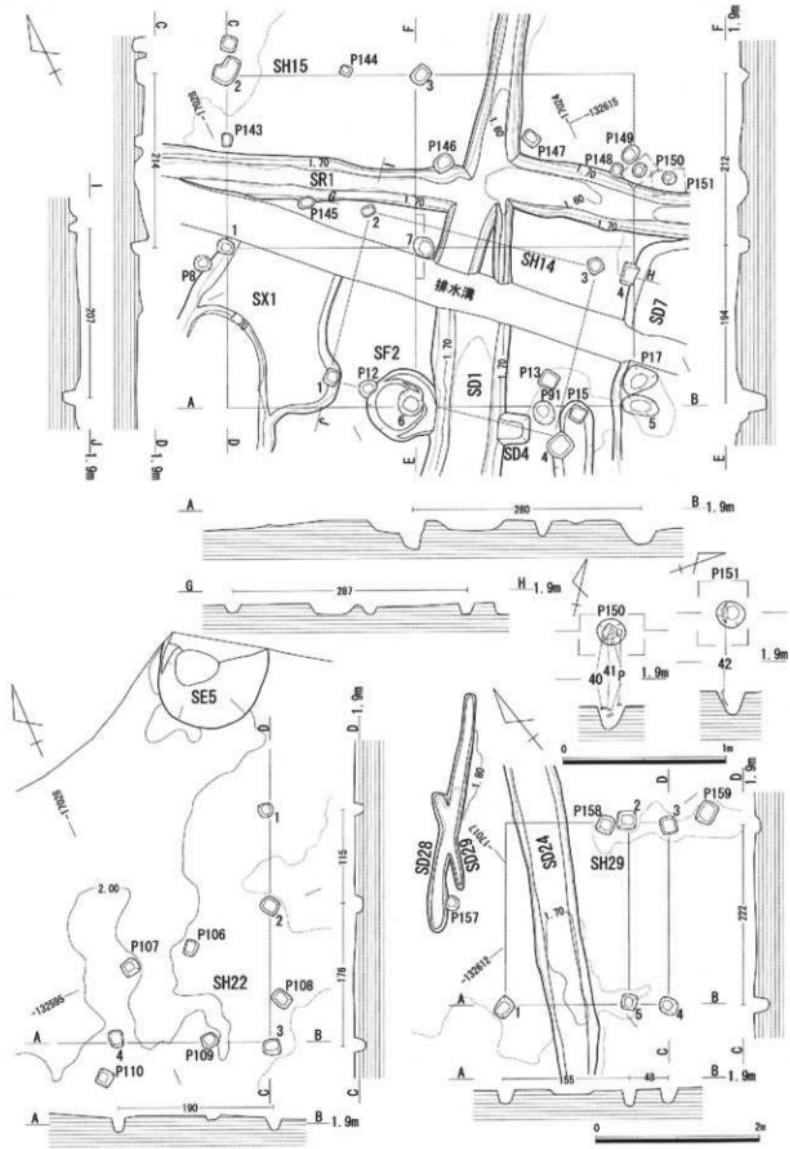
SH 16（第11～13・21・25図） A 5 区北東に中心が位置し、S F 18 より新しい。南西側には雨落ち溝状の SD 26 が存在し、その東側には S X 12・14 といった関連性の高い土坑状の遺構も存在する。おそらく、それらの南側に平行した SR 1 も同時期に存在していたものと思われる。SE 4 との同時性については不明である。



第8図 SH2・3 実測図



第9図 SH12・13 実測図



第10図 SH14・15・22・29 実測図

当遺構は見かけ上5間×5間の1棟であるが、北西部と南西部のほとんどは攪乱されており、確実性に欠けている。また、南東・北東・北西側の柱間は比較的狭く、身舎に付属する庇や縁などの施設を考慮すべきであろう。これらの側柱穴は内部の柱穴より細い傾向があり、付属施設であることを裏付けられるかもしれない（註1）。身舎部分が4間×3間とすると、S D26などとの位置関係から寄棟を想定する必要性があるが、S D26は柱穴1まで伸びており、付属施設まで取り込んだ寄棟の大屋根とするとかなり大規模かつ技術的にも高度な建築物になってしまう。中央部の3間×3間が身舎で、周囲の施設には別に庇が付いたものとすべきであろうか。

柱穴内からは、他の掘立建物跡と比較して遺物の出土する例が多い。比較的大型の礫を根巻石として利用している例（柱穴12・19・23・24）や根巻石であったものが柱の消失により礫が密集して難認されるもの（柱穴11・14）がある。これらの礫の出土レベルは中層から上層に多い。柱穴25のように大型礫が平坦面を上に向けて下層から出土している場合（基礎石）は、柱の高さ調節に利用されていたかも知れない。土器も出土例が多い（第21図）が、柱穴20からは、完形の小皿2点と壺片1点が鉄滓1点（第25図）と共に出土しており、柱穴23からは完形の小皿が1点出土している。これらは、地鎮祭などの祭祀的行為が行われていたことを推測させるが、その他の破片を同列に扱って良いかどうかは検討の余地がある。ただし、島田市ミヨウガ原遺跡（福垣1999）の大型掘立建物跡からは、基礎石の下から山茶碗や壺などの破片が埋納されて出土しており、この時期の特別な建物には土器片を埋納する意図が働いていた可能性もある。

S H17（第11・12図） A 5区北東に位置し、S F18より新しい。桁側の柱間は約3mとかなり広い。

S H18（第11・12・22図） A 7区北西に位置し、S F18より古い可能性が高い。北側コーナー部は大きく攪乱されている。東側のS H24の身舎部分とこの建物跡の桁側の柱筋がほぼ一致する。この建物跡の柱穴1～8までが身舎で、東側部分を建て替えのある付属屋と考えた。付属屋の梁側の柱間は約3mと広く、北側のP 122・123が柱穴になる可能性もある。ちなみに、P 122はS H24より古い。南の梁側は遺構確認面が礫層で不明瞭である。身舎内のP 124が柱穴になるかどうかは不明である。柱穴4・13からは山茶碗が出土している。

S H19（第11・12図） A 6区北西に位置している。かなり東西に細長いため、もう少し北側に広がっていた可能性も残る。

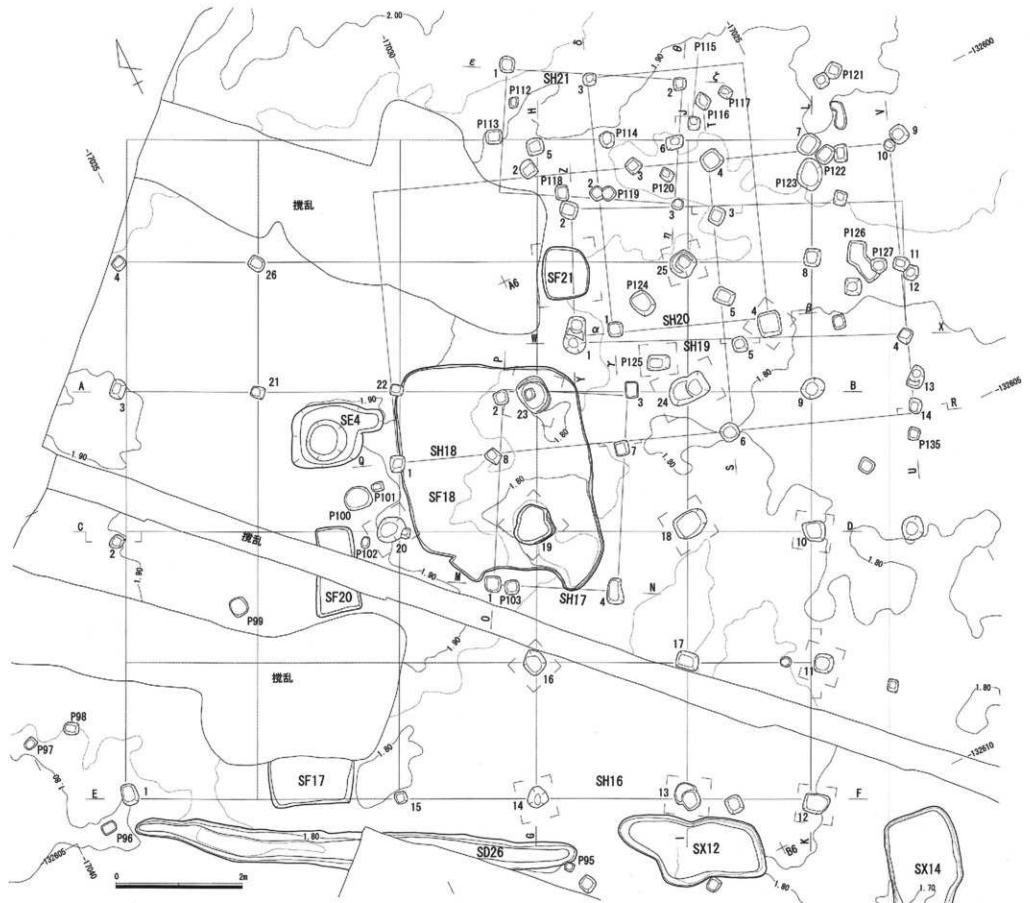
S H20（第11～13図） A 6区北東に位置している。北東部の柱穴が発見されていないため、不明な点も多いが、この建物跡の梁側の柱筋とS H23の桁側の柱筋が一致していることから建物跡である確率は高い。

S H21（第11・12・22図） a 6区南西に位置している。周辺部は礫層であるため不明な点も多い。周辺の建物跡と比較すると、棟方位が若干異なっている。

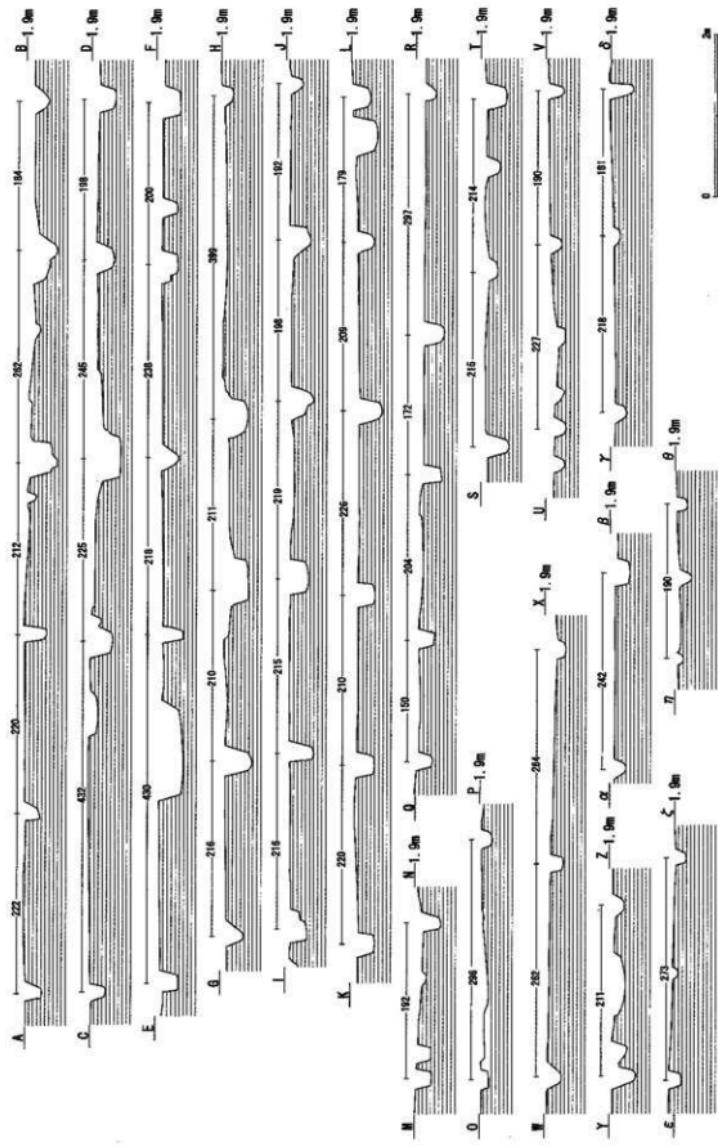
S H22（第10・22図） a 6区北西に位置している。周辺部は礫層で、遺構のプラン確認はかなり難しい状態であった。

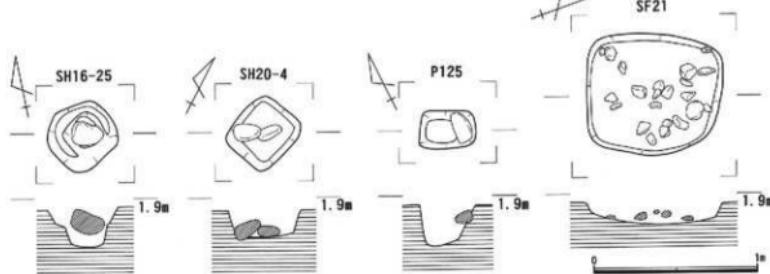
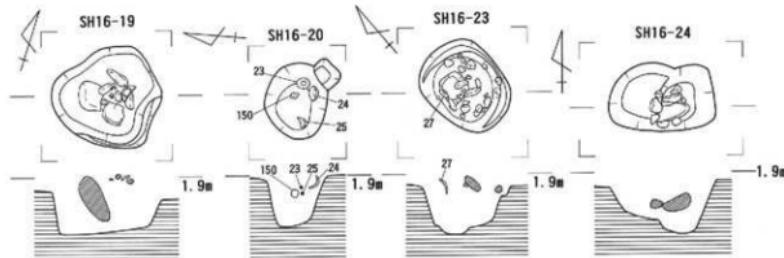
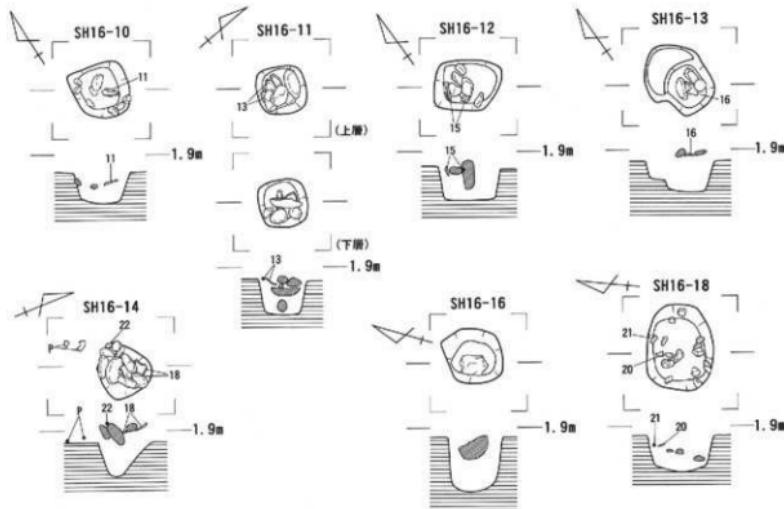
S H23（第14図） A 6区北東に位置し、棟方位を同じくするS H24と重複している。この建物跡は東側1間分が約3mと広く、庇などは付属していないが、S H24も東側が若干広く構造的にも類似している。

S H24（第14・22図） A 6区北東に位置し、西隣のS H18の棟方位に近い。S H18の付属屋を壊して当建物を建築したものと考えられる。当建物跡とS H18の柱筋の一一致は両者が同時に存在していた証拠であろう。東側の1間分は約2.5mと比較的広く、南・北側に付属施設が設けられている。付属施設の身舎からの距離は60～70cmと狭く、南側の柱穴12～19は不等間隔で直線的に配置しており、目隠し塀のような施設も想定したが、とりあえず両面庇と考えておきたい。柱穴19・24・25からは山茶碗や小皿の

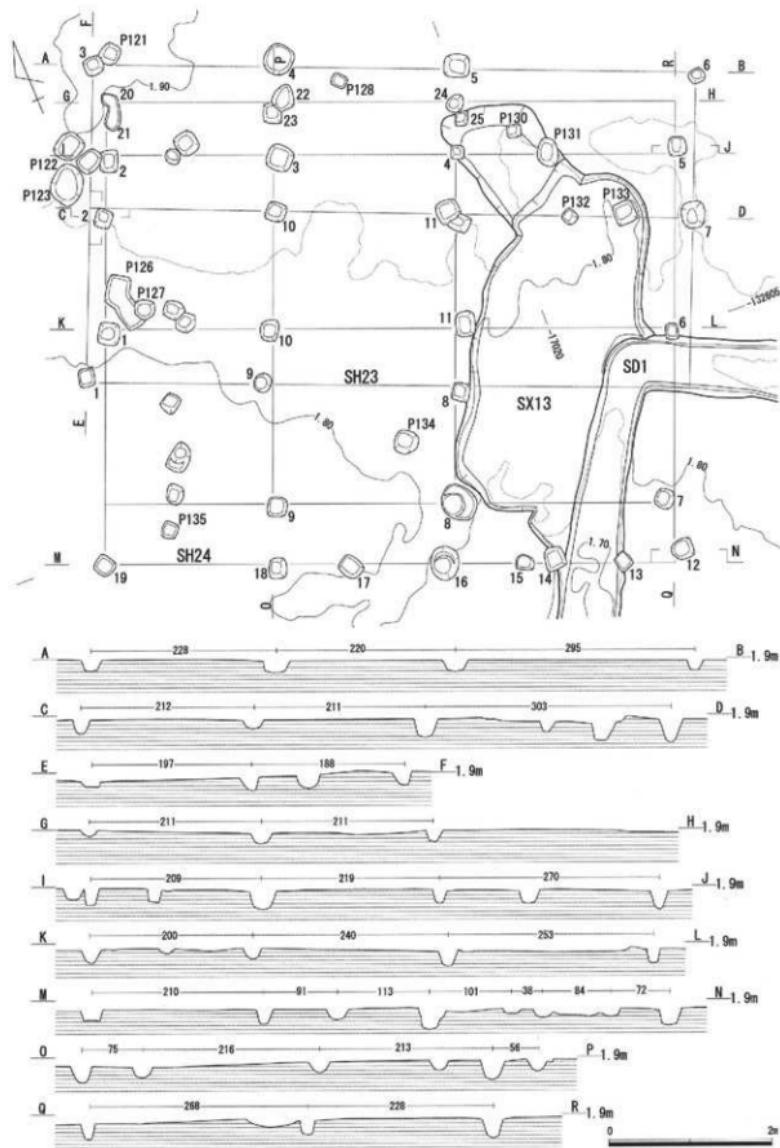


第11図 SH16~21 実測図(1)





第13図 SH16~21 実測図 (3)、P125、SF21 実測図



第14図 SH23・24 実測図

破片が出土している。

S H25 (第15図) A 6 区南西に位置している。小型の建物跡で、棟方位が若干東に振れている。

S H26 (第15図) B 6 区北東に位置している。南側に庇などの施設が付くものと推定した。身舎の梁側の柱間は約3mと広いが、他の事例 (S H17・23など) との共通した間隔である点は注目される。柱穴2・3の柱は抜かれている可能性があり、柱穴4には根巻石が確認されている。S E3は内部にすっぽりと配置されているように見えるが、S H16とS H28との関係から屋内の井戸跡とは考えていない。身舎の南西側の柱筋はS H16の柱筋とおよそ一致し、S H28の南西梁側とも一致する。このことから互いに近い時期に影響を及ぼしながら構築されたものと推測される。当遺構がその配置からS R1とS D24に囲まれていた可能性は高く、その時期は、出土土器から比較的新しいものと理解される。建物跡の存続期間を考慮し、南北棟のS H27・28の建て替えを考えるとS H28の方が当遺構より古いものと思われる。S H28ではS E3が東側にはみ出しており、井戸が伴う建物の可能性は低い。S E3はS D1と関連するかのような配置であり、S D1がS R1より古いこともその根拠の一つである。

S H27 (第15図) B 6 区北東に位置している。S D1に棟方位が平行している。梁側の柱穴5と柱穴8(浅い)はやや東側に寄っており、おそらくS D1を意識したものと考えている。S D1が同時もしくは近い時期に存在したと仮定すると、屋内に位置するS E3が同時に存在した可能性は高い。

S H28 (第15・22図) B 6 区北東に位置し、S H27と大きく重複している。柱穴6・7はS D1より新しく、隅柱穴5には基礎石が置かれている。

S H29 (第10図) B 7 区北西に位置している。棟方位がやや東に振れている小型の建物跡で、南東側の柱間は約50cmと狭く、庇とするより建て替えを考慮すべきかもしれない。北西側のS D28・29は非常に浅く幅が狭い溝で、当遺構との関連性は薄いと考えている。

S H30 (第16図) B 7 区南西に位置している。屋内中央部に位置しているS H31との関連性も考えられるが、ここでは別の建物跡として報告する。現地でのプラン確認状況から、深い柱穴が他に存在した形跡は薄く、浅い柱穴や基礎石などが置かれた柱穴の存在を推定すべきかもしれない。

S H31 (第16・22図) B 7 区南西にあり、区画溝のコーナー部に位置し、S R1とS D24の隙間を埋めるかのように位置している。単純に考えて、門のような施設を想定した。

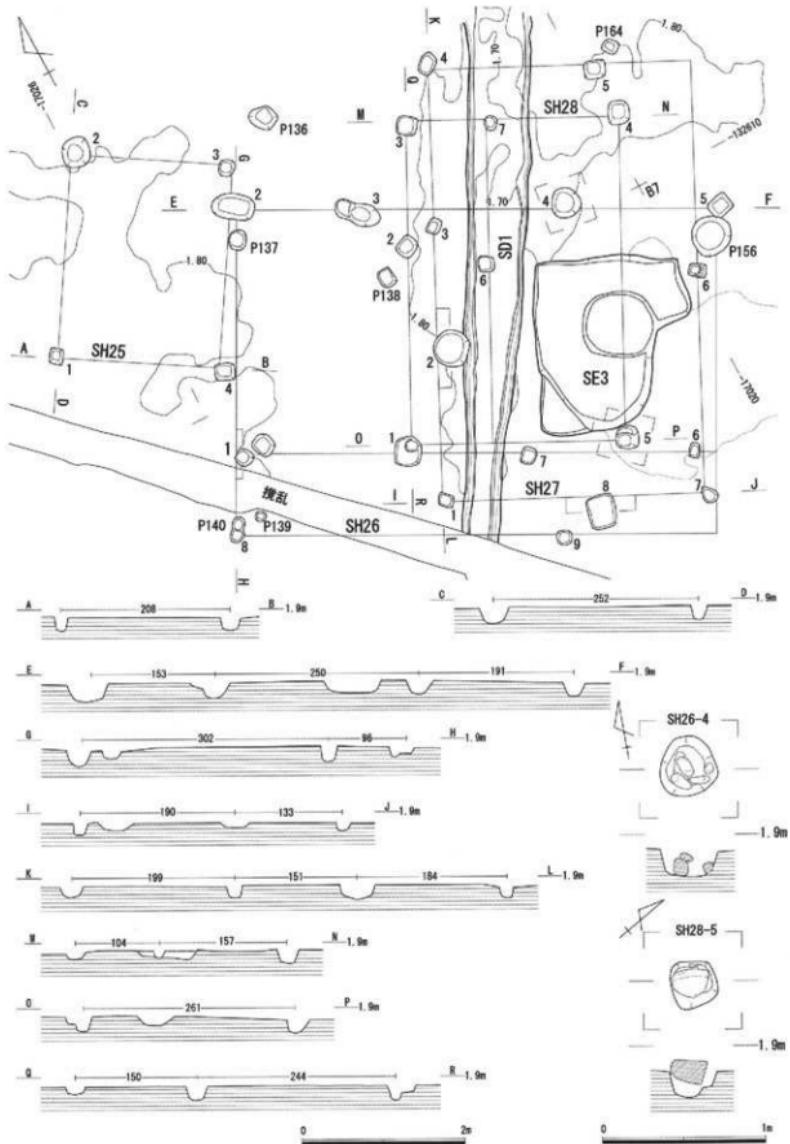
S H32 (第16図) C 7 区北西に位置している。隅柱穴が確認されていないが、小型の方形の建物跡と推定した。区画溝内に位置しているが、周辺には比較的小穴が少ない点も特徴であろう。

S H33 (第16図) C 7 区北東に位置している。北西側にあるS D9やS D25に囲まれているかのような配置である。建物跡の構造は東側が調査区外のため、不明な点が多い。

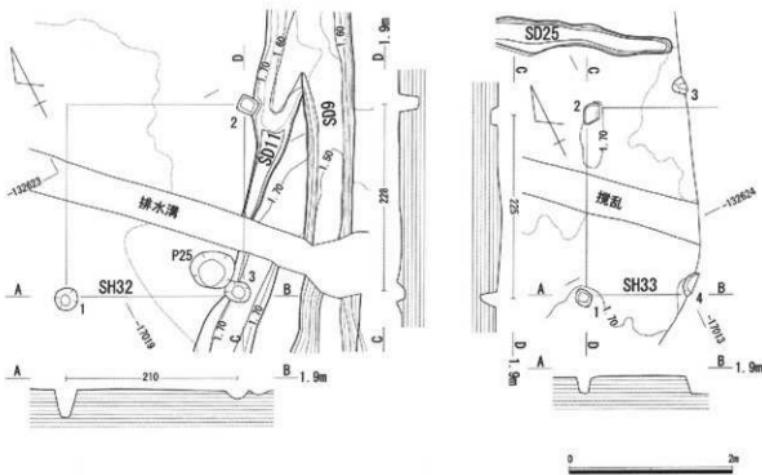
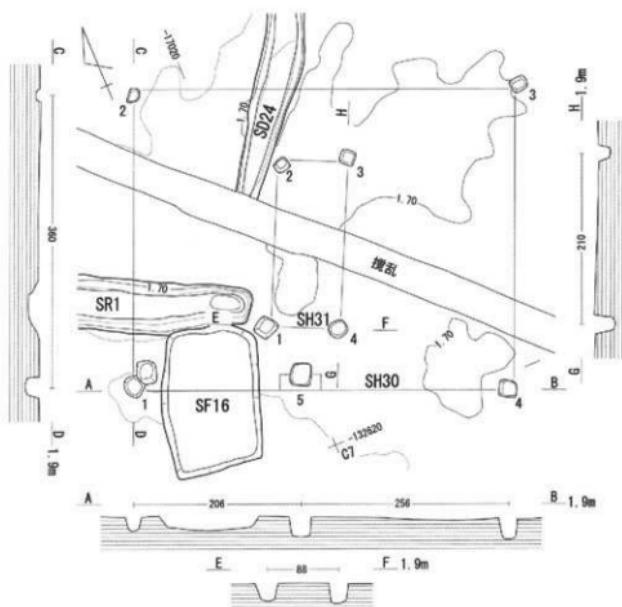
2 溝状遺構と出土遺物

S R1 (第6・20・22図) 平成12年度の調査の折りに自然流路と捉え、S Rとしたが人工的な溝とした方が良いであろう。S D1よりも新しい。S H16に面した部分のみがテラス状に張り出しており、有機的な関係が推察される。樹列状の小穴は確認されていないため、強固な囲郭施設の存在は考えられないが、S H31を門と仮定すると、区画溝の周辺に生け垣などの簡単な囲いは推測される。幅は狭いところで約60cmで、簡単に渡ることが可能である。地籍図に残る大畦畔とほぼ位置と方向が一致している(第4図)ことから、調査区から約12m北西のところで、北東方向へ折れている可能性もある。この推定が正しければ、区画の一辺は約40mになる。出土遺物には、平成12年度に発見された壺と壙に類似した破片があり、おそらく同一個体であろう。46の壺は、S XI3出土例と接合した。

S D1 (第6・20・22図) おそらくS R1より古い方形区画の溝になると思われる。北西辺の長さは約35mで、幅や深さの規模は小さいため、防衛的な性格は想定できない。排水を兼ねた屋敷地の区画溝



第15図 SH25~28 実測図



第16図 SH30~33 実測図

表3 捜査柱建物跡一覧（1）

検査番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高 (cm)	備考
					長径	短径		
第8回	SH2	—	N-29°-E	側柱	536	386	—	
〃	1	—	—	方形	21	21	163	
〃	2	—	—	方形	14	13	170	
〃	3	—	—	方形	27	26	154	SR1と重複
〃	4	—	—	長方形	25	19	160	
〃	5	—	—	方形	22	21	161	
〃	6	—	—	長方形	21	18	166	
〃	7	—	—	長方形	21	18	162	
〃	8	—	—	方形	22	21	156	
〃	9	—	—	長方形	21	18	167	SR1と重複
第8回	SH3	—	N-27°-E	總柱	420	384	—	
〃	1	—	—	長方形	24	19	157	
〃	2	—	—	長方形	22	20	147	SR1と重複
〃	3	—	—	円形	20	19	163	
〃	4	—	—	方形	24	23	158	SR1・SF1と重複
〃	5	SP22	—	橢円形	39	32	159	
〃	6	—	—	円形	33	33	159	
〃	7	—	—	長方形	27	19	157	SR1と重複
〃	8	SPイ	—	方形	24	24	166	礫出土
〃	9	—	—	長方形	23	20	161	SX12と重複
第9回	SH12	SH4	N-44°-E	側柱	280	206	—	
〃	1	SH4-1	—	方形	20	18	161	
〃	2	SH4-2	—	長方形	29	23	162	
〃	3	SH4-3	—	橢円形	22	15	167	SX2と重複
〃	4	SH4-6	—	不整形	35	31	166	SD5と重複
第9回	SHI3	—	N-48°-E	側柱	450	428	—	
〃	1	—	—	長方形	22	18	162	SR1と重複
〃	2	SPD	—	長方形	29	26	164	陶器甕・礫出土
〃	3	—	—	円形	18	17	173	
〃	4	SPタ	—	長方形	27	24	159	山茶碗出土
〃	5	—	—	方形	20	20	163	
第10回	SH14	—	N-40°-E	側柱	287	207	—	
〃	1	P11	—	長方形	20	17	156	SX1と重複
〃	2	—	—	長方形	17	13	164	
〃	3	—	—	方形	20	19	161	
〃	4	P14	—	方形	29	27	166	SD3と重複
第10回	SH15	—	N-26°-E	總柱	500	406	—	
〃	1	P9	—	長方形	21	19	162	SX1と重複
〃	2	—	—	不整形	36	29	166	
〃	3	—	—	長方形	25	20	162	
〃	4	—	—	—	27	—	160	SD7と重複
〃	5	P18	—	橢円形	46	24	147	SD7と重複
〃	6	SP2	—	円形	87	86	160	段あり、柱痕径30
〃	7	—	—	橢円形	28	23	161	
第11~13回	SH16	—	N-26°-E	總柱	1100	1044	—	大きさは付属施設含む
〃	1	—	—	長方形	35	26	162	

表4 挖立柱建物跡一覧（2）

挿図番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
					長径	短径		
第11~13回	2	—	—	長方形	22	19	171	
〃	3	—	—	長方形	31	23	169	
〃	4	—	—	長方形	22	20	184	
〃	5	—	—	方形	27	27	175	
〃	6	—	—	長方形	28	21	169	
〃	7	—	—	長方形	36	31	167	
〃	8	—	—	長方形	28	26	162	
〃	9	—	—	橢円形	38	32	152	
〃	10	SPM	—	方形	34	33	160	山茶碗・礫出土
〃	11	SP 1	—	方形	31	31	161	陶器甕・山茶碗・礫出土
〃	12	SPC	—	不整形	39	32	160	陶器甕・礫出土
〃	13	SPE	—	長方形	32	29	164	張り出し・山茶碗・礫出土
〃	14	SPF	—	不整形	34	34	162	山茶碗・礫出土
〃	15	—	—	方形	19	19	156	
〃	16	SPG	—	五角形	39	33	151	山茶碗・礫出土
〃	17	—	—	長方形	36	27	155	
〃	18	SPL	—	不整形	53	41	162	山茶碗・礫出土
〃	19	SPH	—	不整形	65	64	157	段あり・山茶碗・礫出土
〃	20	SPK	—	鍵穴形	52	40	163	小皿・塙・鉄滓出土
〃	21	—	—	長方形	22	18	173	
〃	22	SPU・SPツ	—	長方形	21	18	164	SF18と重複・塙出土
〃	23	SPJ	—	橢円形	58	24	153	段あり・柱痕方形18×17 山茶碗・小皿・礫出土
〃	24	SPN	—	不整形	63	42	152	段あり・鉢・礫出土
〃	25	SPQ	—	不整形	40	40	160	段あり・礫出土
〃	26	—	—	長方形	26	22	174	
第11~13回	SH17	—	N-30°-E	側柱	296	192	—	
〃	1	—	—	方形	26	25	169	
〃	2	SPソ	—	方形	22	22	175	SF18と重複・山茶碗出土
〃	3	—	—	長方形	26	22	173	
〃	4	—	—	長方形	41	26	158	
第11~13回	SH18	—	N-21°-E	側柱	823	429	—	
〃	1	—	—	長方形	27	23	169	SF18と重複
〃	2	—	—	不整形	28	25	171	
〃	3	—	—	方形	22	22	163	
〃	4	SPナ	—	方形	33	31	158	山茶碗出土
〃	5	—	—	長方形	33	24	167	
〃	6	—	—	方形	29	29	155	
〃	7	SPV	—	方形	24	23	159	須恵器・土御器出土
〃	8	—	—	長方形	24	20	167	SF18と重複
〃	9	—	—	方形	29	27	149	柱穴10と隣接
〃	10	—	—	円形	20	19	168	柱穴9と隣接
〃	11	—	—	五角形?	25	22	170	柱穴12と重複
〃	12	—	—	六角形?	24	22	168	柱穴11と重複
〃	13	SPル	—	不整形	36	25	157	段あり・山茶碗出土
〃	14	—	—	長方形	26	21	165	

表5 据立柱建物跡一覧（3）

押図番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高 (cm)	備考
					長径	短径		
第11~13図	SH19	—	N-25°-E	側柱	526	211	—	
〃	1	—	—	不整形	60	36	159	段あり、柱穴2基
〃	2	—	—	方形	28	27	172	P118と隣接
〃	3	—	—	長方形	27	24	166	
〃	4	—	—	方形	23	21	164	
〃	5	—	—	方形	25	23	167	
第11~13図	SH20	—	N-20°-E	側柱	399	242	—	
〃	1	—	—	方形	24	24	170	
〃	2	—	—	方形	23	21	179	P119と重複
〃	3	—	—	方形	21	20	172	
〃	4	SPR	—	方形	40	36	166	礫出土
第11~13図	SH21	—	N-30°-E	側柱	273	190	—	
〃	1	SPラ	—	方形	26	24	181	山茶碗・小皿出土
〃	2	—	—	方形	20	20	175	
〃	3	—	—	円形	19	18	180	
第10図	SH22	—	N-23°-E	—	—	—	—	
〃	1	—	—	円形	18	17	184	
〃	2	—	—	長方形	24	20	185	
〃	3	—	—	長方形	22	20	180	
〃	4	SPウ	—	長方形	22	17	180	山茶碗出土
第14図	SH23	—	N-22°-E	総柱	743	385	—	
〃	1	—	—	長方形	23	20	174	
〃	2	—	—	長方形	23	20	168	
〃	3	—	—	方形	24	23	175	P121と重複
〃	4	—	—	円形	38	36	170	
〃	5	—	—	長方形	32	29	173	
〃	6	—	—	方形	19	18	174	
〃	7	—	—	長方形	33	28	156	
〃	8	—	—	方形	23	22	169	SX13と重複
〃	9	—	—	円形	23	21	170	
〃	10	—	—	方形	24	23	174	
〃	11	—	—	不整形	29	26	162	大きさ計測は北側部分
第14図	SH24	—	N-21°-E	総柱	709	560	—	大きさは付属施設含む
〃	1	SPヌ	—	方形	27	26	165	土師器出土
〃	2	—	—	長方形	28	21	167	P122と重複
〃	3	—	—	方形	32	31	162	
〃	4	—	—	方形	17	16	169	SX13と重複
〃	5	—	—	方形	24	22	161	
〃	6	—	—	長方形	20	17	165	SD1と重複
〃	7	—	—	方形	24	23	159	
〃	8	—	—	梢円形	42	39	155	段あり、柱痕径24
〃	9	—	—	方形	24	24	166	
〃	10	—	—	長方形	26	23	171	
〃	11	—	—	長方形	31	24	161	SX13と重複
〃	12	—	—	不整形	26	25	158	
〃	13	—	—	長方形	22	20	169	SD1と重複
〃	14	—	—	長方形	29	25	168	SX13と重複

表6 挖立柱建物跡一覧(4)

押図番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
					長径	短径		
第14図	15	—	—	長方形	23	18	173	
〃	16	—	—	橢円形	42	35	154	段あり
〃	17	—	—	長方形	28	24	166	
〃	18	—	—	長方形	26	22	159	
〃	19	SPW	—	方形	24	22	166	小皿出土
〃	20	—	—	長方形	(21)	16	182	柱穴21と重複
〃	21	—	—	橢円形	(28)	19	184	柱穴20と重複
〃	22	—	—	不整形	33	27	173	柱穴23と重複
〃	23	—	—	長方形	26	22	173	柱穴22と重複
〃	24	SPヘ	—	橢円形	24	20	175	柱穴25と隣接、山茶碗出土
〃	25	SPホ	—	方形	18	16	177	柱穴24と隣接、山茶碗出土
第15図	SH25	—	N-32°-E	側柱	252	208	—	
〃	1	—	—	長方形	20	17	164	
〃	2	—	—	方形	37	34	162	
〃	3	—	—	長方形	24	18	167	
〃	4	—	—	長方形	25	21	164	
第15図	SH26	—	N-28°-E	側柱	594	398	—	大きさは付属施設含む
〃	1	—	—	五角形	22	19	162	
〃	2	SPヲ	—	長方形	52	32	156	山茶碗出土
〃	3	—	—	鍵穴形	58	28	160	段あり
〃	4	SPS	—	円形	37	36	164	礎出土
〃	5	—	—	長方形	26	22	161	P156と重複
〃	6	—	—	長方形	18	13	165	
〃	7	—	—	長方形	21	18	165	
〃	8	—	—	橢円形	16	14	171	P140と重複
〃	9	—	—	方形	19	18	160	
第15図	SH27	—	N-26°-E	側柱	534	323	—	
〃	1	—	—	方形	19	18	163	
〃	2	—	—	円形	44	44	162	SD I と重複
〃	3	—	—	長方形	22	16	165	
〃	4	—	—	長方形	28	20	166	
〃	5	—	—	長方形	26	23	164	
〃	6	—	—	長方形	22	16	157	段あり
〃	7	—	—	不整形	24	17	167	
〃	8	—	—	長方形	42	35	172	浅い
第15図	SH28	—	N-27°-E	側柱	394	261	—	
〃	1	—	—	五角形	37	33	161	段あり、柱痕19×18
〃	2	—	—	長方形	24	22	163	
〃	3	SPト	—	方形	25	24	170	山茶碗出土
〃	4	—	—	五角形	29	27	164	
〃	5	SPT	—	方形	29	28	158	段、礎出土、柱痕23×20
〃	6	SPリ	—	方形	20	20	160	SD I と重複、土師器出土
〃	7	SPチ	—	橢円形	18	16	170	SD I と重複、山茶碗出土
第10図	SH29	—	N-38°-E	側柱	222	203	—	建て替え?
〃	1	—	—	長方形	25	20	158	
〃	2	—	—	方形	23	22	160	
〃	3	—	—	方形	22	20	168	

表7 挖立柱建物跡一覧（5）

探査番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
					長径	短径		
〃	4	—	—	長方形	23	20	158	
〃	5	—	—	方形	19	19	155	
第16図	SH30	—	N-23°-E	側柱	462	360	—	
〃	1	—	—	不整形	28	22	157	P152と重複
〃	2	—	—	長方形	17	14	171	
〃	3	SPハ	—	長方形	20	17	157	山茶碗出土
〃	4	—	—	方形	22	21	146	
〃	5	—	—	方形	28	26	150	
第16図	SH31	—	N-25°-E	側柱	210	88	—	
〃	1	—	—	方形	25	24	151	
〃	2	—	—	長方形	18	14	153	
〃	3	—	—	方形	18	18	155	
〃	4	SPロ	—	円形	23	21	148	山茶碗出土
第16図	SH32	—	N-28°-E	側柱	228	210	—	
〃	1	P24	—	円形	28	28	142	
〃	2	—	—	長方形	24	20	145	SD11と重複
〃	3	P26	—	橢円形	32	26	165	P25・SD11と重複
第16図	SH33	—	N-27°-E	—	225	—	—	
〃	1	—	—	長方形	21	19	148	
〃	2	—	—	長方形	22	20	160	
〃	3	—	—	—	—	—	165	調査区境界線上
〃	4	—	—	—	—	—	166	調査区境界線上
第6図	SH1	—	N-31°-E	総柱	538	486	—	参考(前回報告分)
〃	1	—	—	長方形	20	15	160	
〃	2	—	—	方形	18	17	158	
〃	3	—	—	長方形	20	18	164	
〃	4	—	—	方形	17	17	169	
〃	5	—	—	方形	18	16	158	
〃	6	—	—	長方形	21	16	159	
〃	7	—	—	長方形	19	14	157	
〃	8	—	—	方形	14	14	158	
〃	9	—	—	方形	20	19	160	

*旧遺構名は現地調査時の名称であるが、SH12・14・15・32の旧遺構名は平成14年刊行の報告書の遺構名である。

表8 小穴一覧(1)

※掘立柱建物跡の柱穴は表3~7参照

遺構名	旧遺構名	平面形態	大きさ(cm)		底面高 (cm)	備 考
			長径	短径		
P92	—	方形	54	53	161	
P93	—	長方形	38	30	161	
P94	—	方形	54	50	161	
P95	—	方形	14	14	165	SD26と重複
P96	—	長方形	24	17	173	
P97	—	長方形	20	16	175	
P98	SPオ	長方形	24	20	169	山茶碗出土
P99	—	方形	29	27	162	
P100	—	橢円形	43	37	177	
P101	—	長方形	19	14	176	
P102	—	橢円形	19	13	175	
P103	—	方形	23	23	170	
P104	SPエ	方形	15	15	184	
P105	—	方形	20	18	190	
P106	—	長方形	20	16	194	
P107	—	長方形	21	19	183	
P108	—	長方形	24	18	185	
P109	—	長方形	20	17	194	
P110	SPム	方形	20	19	191	山茶碗出土
P111	SPノ	長方形	24	18	184	山茶碗出土
P112	—	長方形	17	15	182	
P113	—	長方形	26	23	179	
P114	—	不整形	27	24	175	
P115	—	長方形	22	19	167	
P116	—	長方形	24	21	180	
P117	—	長方形	23	18	178	
P118	—	長方形	22	20	176	SH19-2と隣接
P119	—	方形	22	21	177	SH20-2と重複
P120	—	長方形	22	18	166	
P121	—	長方形	27	23	174	SH23-3と重複
P122	SPネ	長方形	32	25	171	SH24-2と重複、土師器出土
P123	—	橢円形	48	40	158	
P124	—	長方形	41	34	163	
P125	SPP	長方形	36	24	159	礫出土、第11・13回
P126	—	不整形	73	42	177	P127と重複
P127	—	五角形	25	25	171	P126と重複
P128	—	長方形	20	16	181	
P129	—	方形	17	17	177	
P130	—	方形	17	16	171	SX13と重複
P131	—	橢円形	36	25	169	SX13と重複
P132	—	方形	18	17	168	SX13と重複
P133	—	方形	28	27	158	SX13と重複
P134	—	不整形	29	29	168	
P135	—	長方形	21	19	166	
P136	—	五角形	32	29	172	
P137	—	橢円形	25	22	167	
P138	—	長方形	24	18	164	
P139	—	円形	13	13	166	

表9 小穴一覧(2)

※掘立柱建物跡の柱穴は表3~7参照

遺構名	旧遺構名	平面形態	大きさ(cm)		底面高 (cm)	備考
			長径	短径		
P140	-	円形	16	16	167	SH26-8と重複
P141	-	椭円形	24	20	165	
P142	-	長方形	19	15	168	
P143	-	長方形	17	13	165	
P144	-	長方形	14	12	153	
P145	-	椭円形	21	14	165	SR1と重複
P146	SPレ	長方形	25	20	155	SR1と重複
P147	SPワ	長方形	21	17	161	陶器出土
P148	-	長方形	17	15	167	SR1と重複
P149	-	長方形	24	19	160	
P150	SPA	椭円形	18	16	159	山茶碗・鉢出土、第10回
P151	SPB	円形	17	16	157	山茶碗出土、第10回
P152	SPカ	長方形	30	25	152	SH30-1と重複、土師器出土
P153	SPヨ	方形	26	26	167	土師器出土
P154	-	長方形	22	18	152	
P155	-	不整形	36	29	153	
P156	-	円形	48	48	140	SH26-5と重複
P157	-	円形	18	17	165	SD28と重複
P158	-	方形	22	21	159	
P159	-	長方形	28	22	160	
P160	-	長方形	24	20	165	P161と重複
P161	-	椭円形	30	20	164	P160と重複
P162	-	不整形	22	20	169	
P163	-	不整形	26	24	170	
P164	-	長方形	20	17	169	

であろう。区画内の建物跡は、比較的重複が少なく散在的であるため短期間に内に使用された屋敷地であろうと推測され得るが、区画内包含層出土土器にはかなり時間幅がある。

SD7 (第6・20図) SE1から連続した溝である。底面は、砂礫層を掘り込んでおり、かなりの湧水があった。上層には植物遺体が多数存在した。

SD9 (第6・25図) B・C7区に位置している北東から南西方向の溝を便宜的にSD9とした。浅いSD11が途中の深い地点で合流しており、北側に連続する深いSD9はSD11に連続するものと考えることも可能である。北側の深い地点から陶器(148)が出土している。

SD11 (第6図) C7区の中央部とB4区の南西部で、平成12年度に調査した深い溝の続きが発見された。SD12も含めて前回は侵食痕として報告したが、建物跡や区画溝の方向との一致から排水を主目的とした人工的な溝と訂正したい。幅は40cm弱で、深さは10cmに溝たない小規模なもので、区画溝として十分に機能していたかは疑問である。むしろ通路の側溝や菜園の排水溝として仮設的に掘削され、結果として建物跡の周囲を囲んでいるかのように見えているのではないかと思われる。

SD12 (第6図) B4区の南西部で、平成12年度に調査した深い溝の続きを発見された (SD11の項参照)。一部途切れているが、同じ遺構名とした。SD11に平行し、同時併存の可能性もある。

SD24 (第6・20・22図) SR1に直交するように配置され、SR1に向かうに従い細くなり、SR1とは重なることは無く、約1mほどの隙間がある。

SD25 (第6図) C7区北東に位置する非常に深い溝である。SD9とT字状に繋がっている。

S D26 (第6図) A5区に位置し、S R 1と平行している。その配置から S H16の雨落ち溝などになる可能性がある。

S D27~29 (第6図) a 7区南西とB 7区北西に位置する浅い溝である。性格は不明である。

3 井戸跡と出土遺物

SE3 (第17・22図) B 6区北東に位置している。東側に張り出し部がある略長方形の浅い掘り込みがあり、東側に梢円形の深い掘り込みがある。完掘後、1日経つと水が溢れ出すほどの湧水量があった。井戸底を深掘りしたが、井戸側などの施設は確認されなかった。埋積土には粘土ブロックが多く含まれており、埋め戻されているようである。確認面では、53の山茶碗が出土した。建物跡との関係については、各建物跡の項目を参照していただきたい。

SE4 (第17・22図) A 5区北東に位置している。東側に張り出し部がある略方形の浅い掘り込みがあり、中央部に円形の深い掘り込みがある。

SE5 (第17・22図) a 6区北東に位置し、北側は調査区外になる。他の2基と異なり、周囲に浅い掘り込みは無く、出土土器も多く、上層からは拳大から人頭大の礫が多く発見されている。その礫は井戸桁の一部であったかもしれないが、平成12年度に調査したSE1で確認されたような井戸の廃絶に伴う祭祀的行為に関係するものと考えておきたい。60のような完形に近い状態に復原できた小皿などが出土している。

4 土坑・性格不明遺構と出土遺物

S F16 (第18図) B 6区南東に位置し、S R 1の東端部と接している。底面は砂礫層を掘り込んでおり、若干湧水がある。埋積土には粘土ブロックが多く含まれており、埋め戻されている。

S F17 (第18図) A 5区中央に位置し、北側は攪乱されている。壁面は垂直気味に立ち上がる。遺物は出土していない。

S F18 (第18・23図) A 5区北東に位置している。一辺が約3mの略方形で、当初は竪穴状遺構とも考えたが、掘り込みが浅く、底面が平坦ではない（南東部がやや深い）といったことから別の遺構と考えられる。埋積土には多量の炭化物と少数の山茶碗が含まれていた。

S F19 (第6図) B 5区北東に位置し、排水溝およびS R 1と重複している。おそらく円形になるとと思われるが、詳細は不明である。

S F20 (第19図) A 5区北東に位置し、中央部は攪乱されている。出土遺物は無く、壁面は垂直気味に立ち上がる。

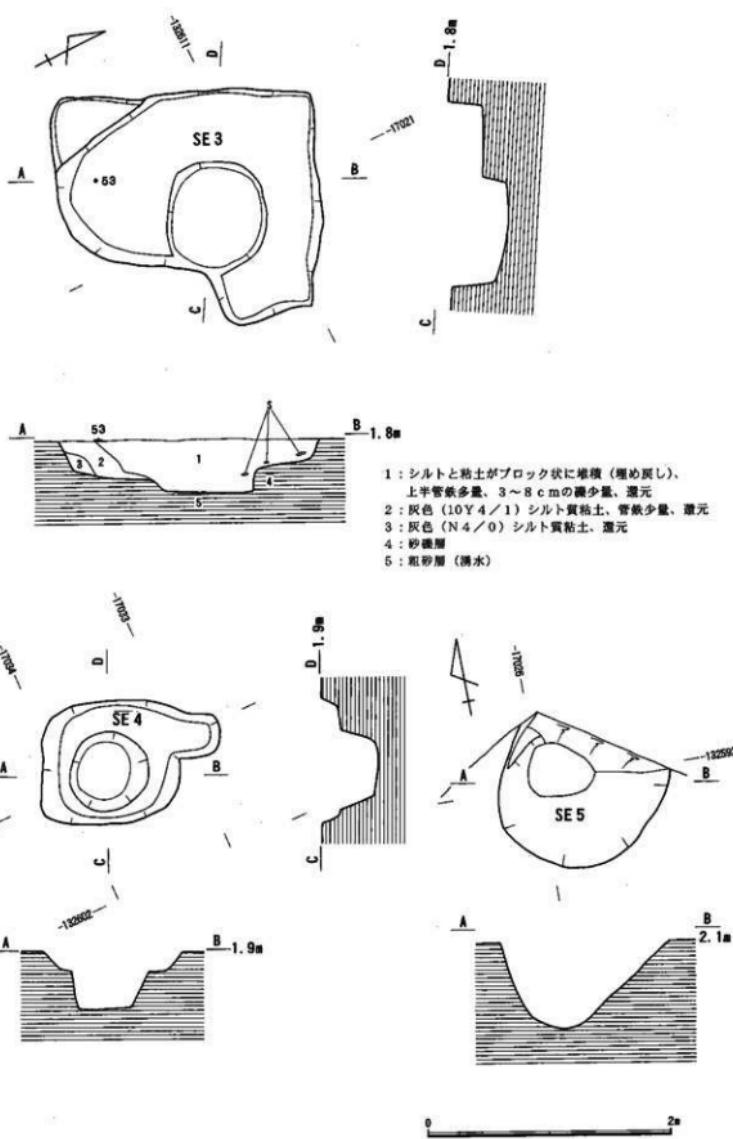
S F21 (第13図) A 6区北西に位置している。当初は柱穴のつもりで調査したが、浅いため土坑とした。小型の礫が多数確認されたが、周辺の礫が混入している可能性が高い。

S F22 (第6図) A 7区中央に位置している。断面形はU字形で、炭化物が多量に検出された。

S X12 (第19・23図) A 5区南東に位置している。その配置から S H16に関連する可能性もある。上層からは山茶碗の碗の破片が集中して出土した。

S X13 (第14図) A 6区東に位置し、S D 1の北側コーナーに連結している。S H23・24との関連性も考えられるが、不整形であり、むしろS D 1からオーバーフローした、もしくはS D 1へと流れ込んだ水の侵食痕と理解される。

S X14 (第19図) B 6区北西のS H16の南側コーナー付近に位置している。S R 1と重複しており、排水をしたのであろうか。



第17図 SE3~5 実測図

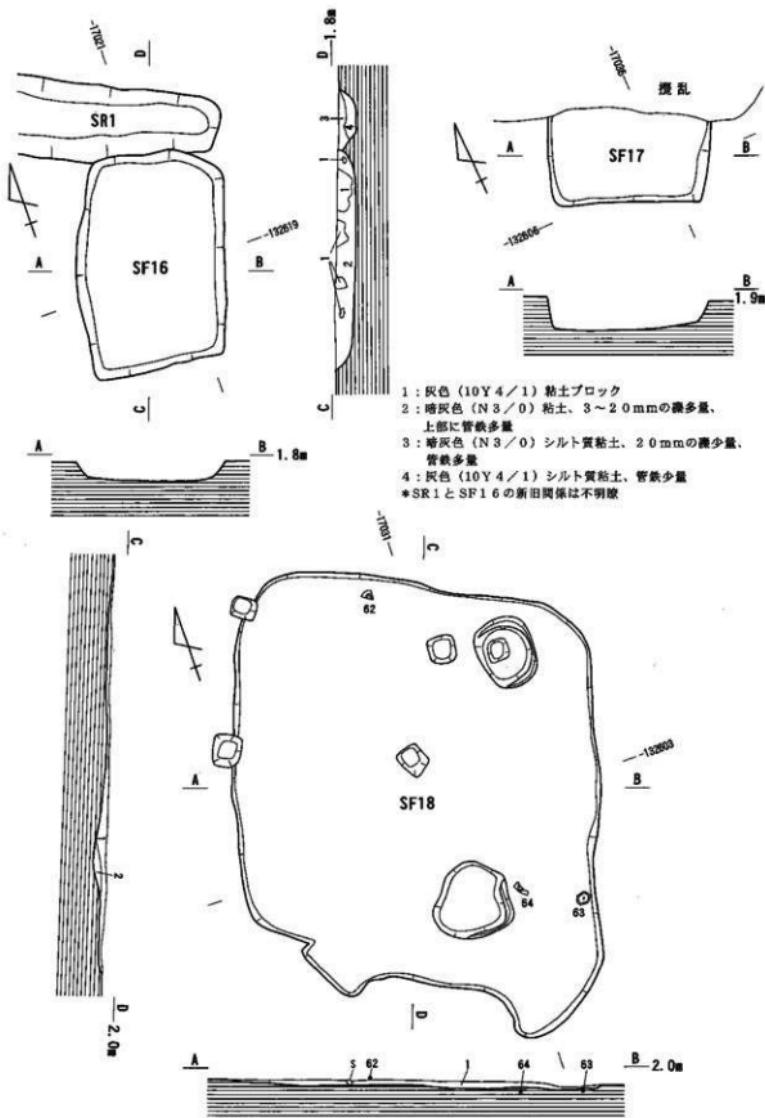
表10 溝一覧

押図番号	遺構名	旧遺構名	方向	断面形態	幅(cm)	底面高(cm)	備考
第20図	SR1	-	N-61°-W	略U字形	180	157	SD1と交差、SD7、SF16-19、SX14、SH2・3・12～15・30と重複、東端部では幅54cm
"	SD1	-	N-30°-E	略U字形	86	163	L字形、SR1と交差、SX13、SH14・15・23・24・26～28と重複
"	SD7	-	N-30°-E	逆台形形	136	145	SR1、SH15と重複
第6図	SD9	-	N-30°-E	U字形	56	147	SD11と合流部分の幅100cm、SD25と重複
"	SD11	-	N-60°-E	U字形	38	169	東端でSD9と合流、SH32と重複
"	SD12	-	N-64°-W	U字形	36	181	
第20図	SD24	-	N-27°-E	U字形	86	168	SD1と交差、SH29・30と重複、南端部では幅30cm
第6図	SD25	-	N-57°-W	U字形	40	166	SD9と重複
第11図	SD26	-	N-61°-W	U字形	60	174	
第6図	SD27	-	N-36°-E	U字形	40	187	
第10図	SD28	-	N-46°-E	U字形	24	173	SD29と重複
"	SD29	-	N-22°-E	U字形	22	173	SD28と重複

表11 井戸跡・土坑・性格不明遺構一覧

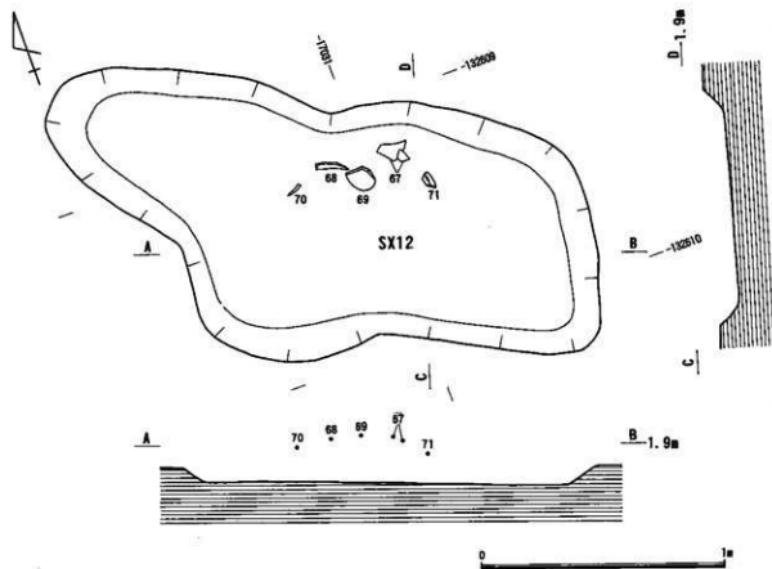
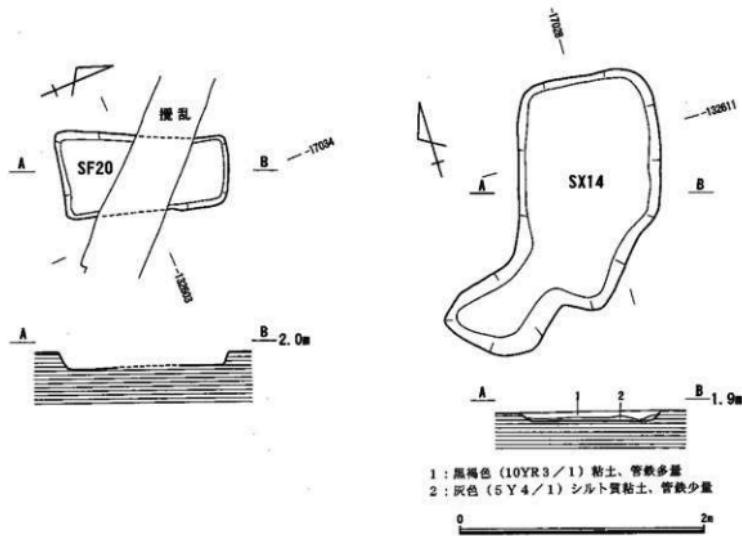
* 旧遺構名は調査時の名称

押図番号	遺構名	旧遺構名	大きさ(cm)		底面高(cm)	平面形態	備考
			長径	短径			
第17図	SE3	-	212	150	125	不整形	東側に張り出し部あり、SH26～28と重複、テラスあり、中央部楕円形(80cm×92cm)
"	SE4	-	112	100	143	不整形	東側に張り出し部あり、SH16と重複、テラスあり、中央部円形(径66cm)
"	SE5	-	128	-	128	円形?	北側調査区外
第18図	SF16	-	180	120	158	長方形	SR1、SH30と重複
"	SF17	-	-	135	155	長方形	SH16と重複、北側は攪乱
"	SF18	-	324	302	171	不整形	SH16～18と重複
第9図	SF19	-	-	-	165	円形?	SR1、SH3・13と重複、南側は不明
第19図	SP20	-	138	70	179	長方形	SH16と重複
第13図	SF21	SPO	82	74	171	長方形	SH16・18・19と重複
第6図	SP22	SPニ	70	55	158	楕円形	
第7図	SX11	-	-	-	176	-	土器集中
第19図	SX12	-	242	104	172	不整形	SH3・13と重複
第14図	SX13	-	420	210	174	不整形	北側に突出部あり、SD1、SH23・24、P130～133と重複
第19図	SX14	-	260	116	169	不整形	SR1、SH13と重複

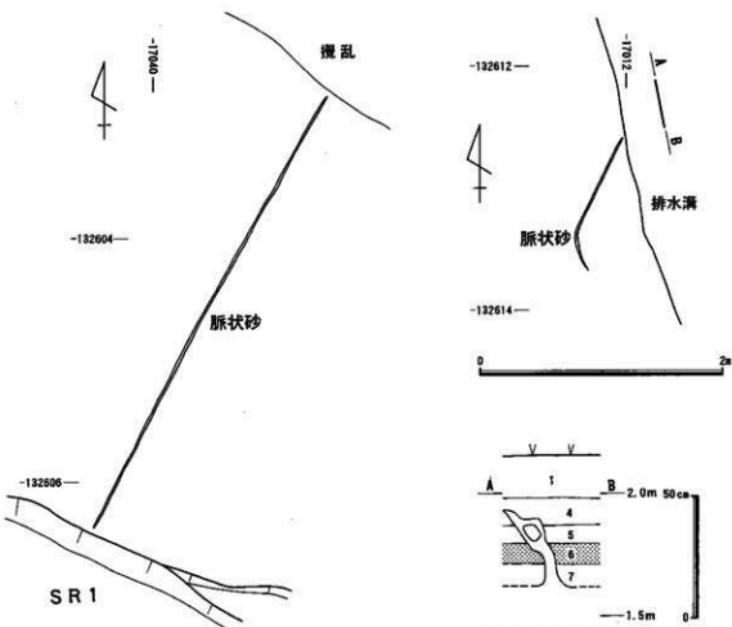
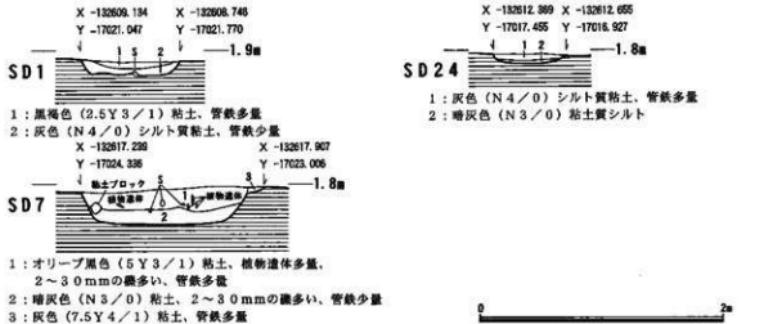


1: オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト質粘土、炭化物多量、2~10mmの礫多量
2: 灰色 (10Y 4/1) シルト質粘土

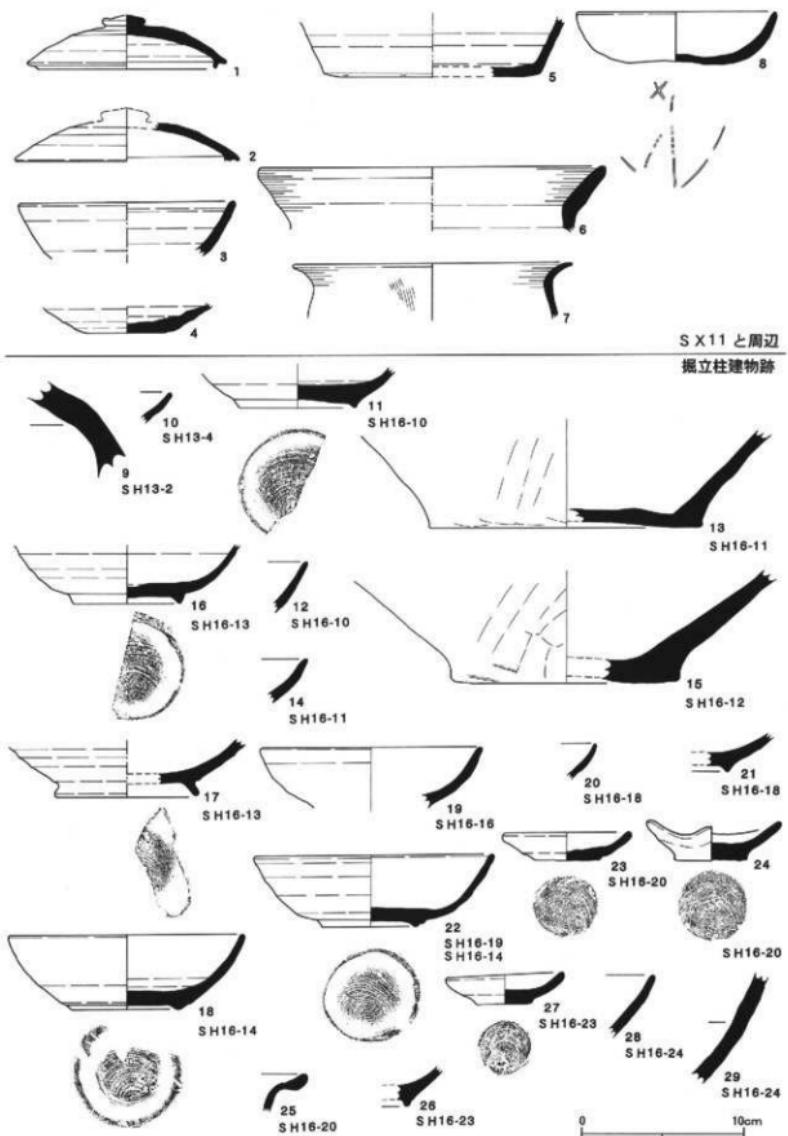
第18図 SF16~18 実測図



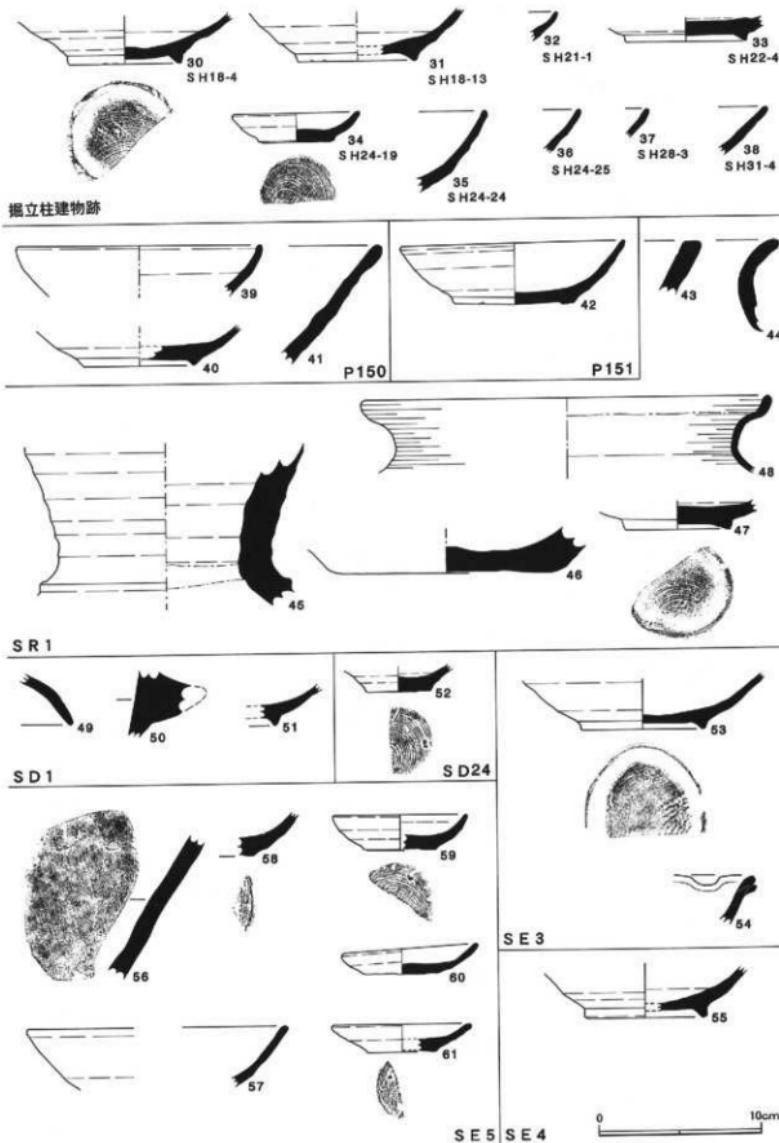
第19図 SF20、SX12・14 対測図



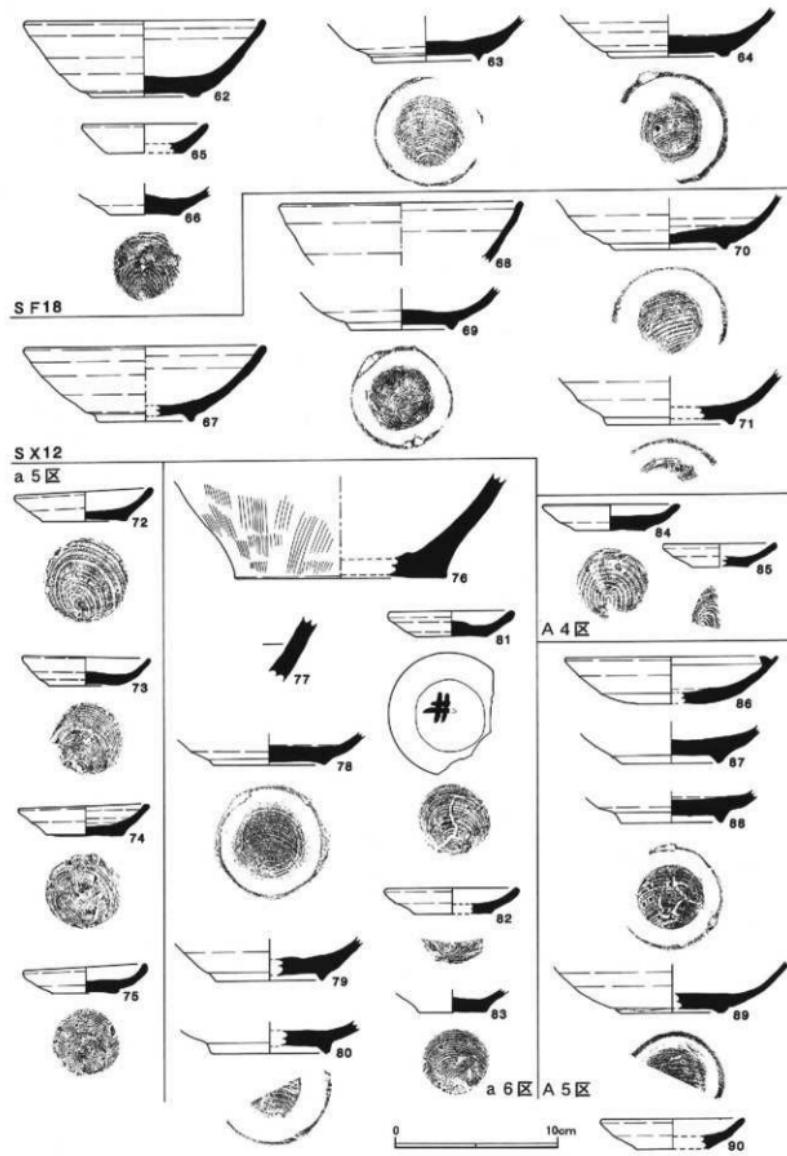
第20図 SR1、SD1・7・24、噴砂 実測図



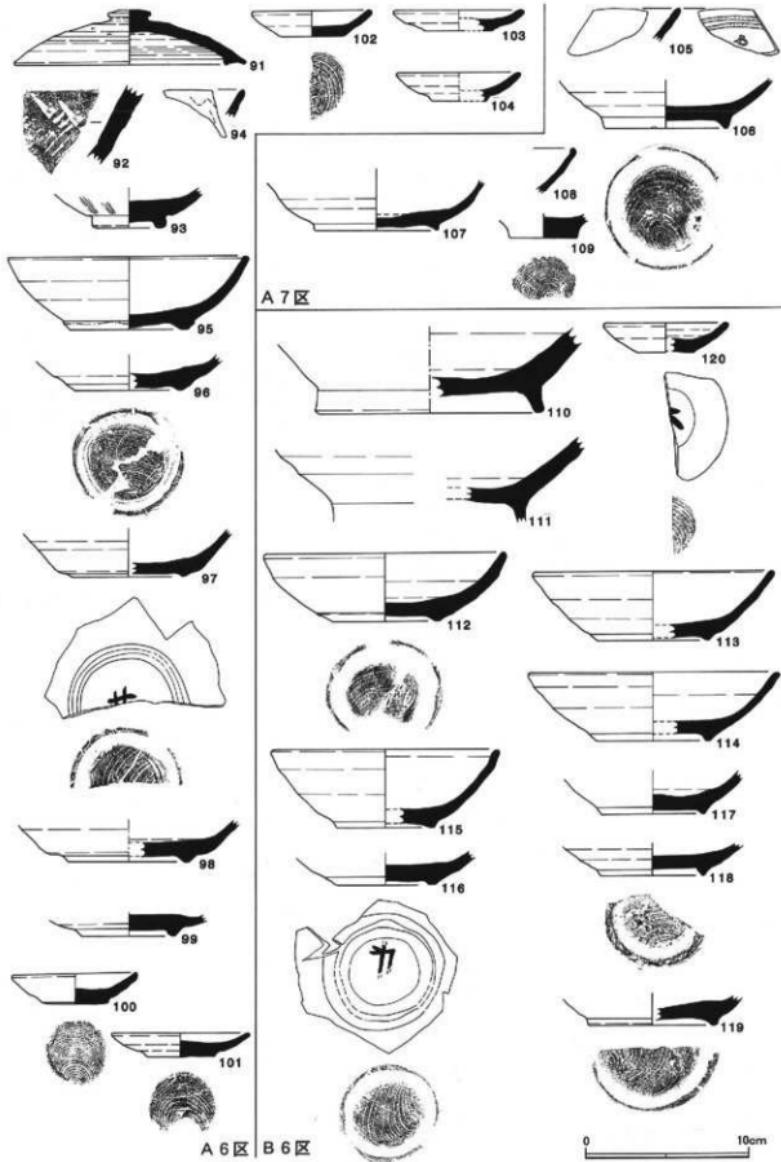
第21図 出土遺物実測図（1）



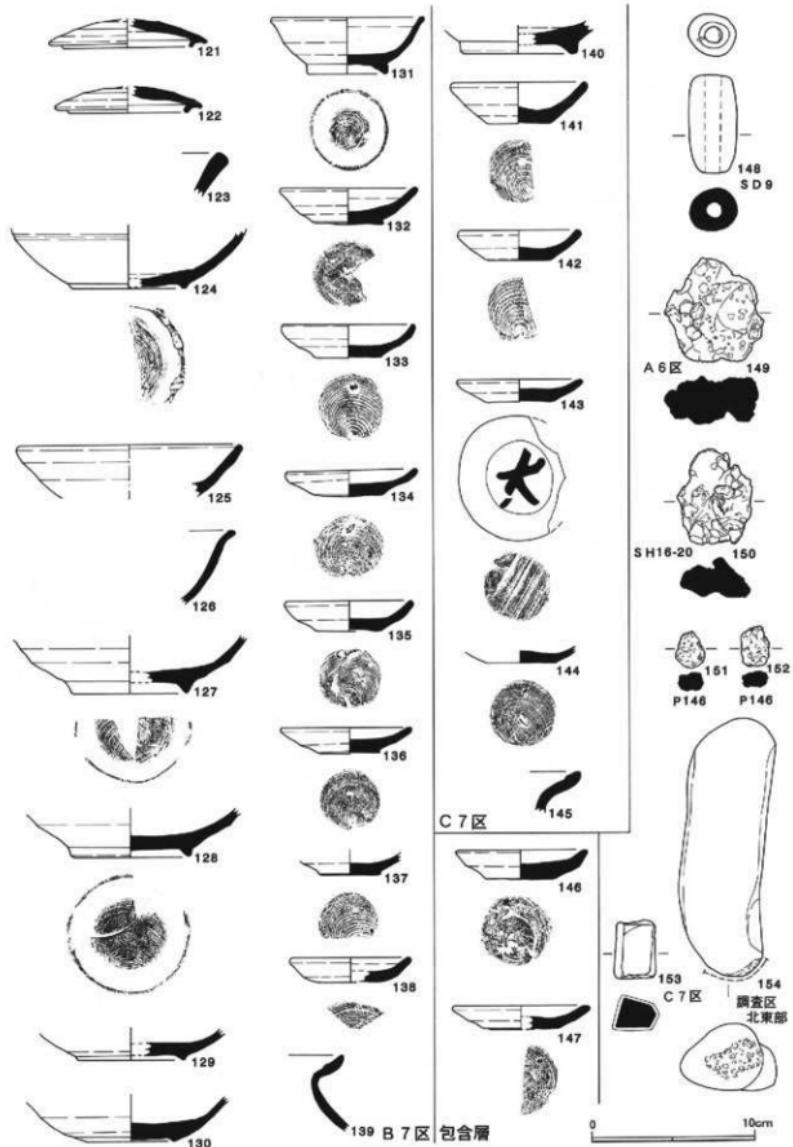
第22図 出土遺物実測図（2）



第23図 出土遺物実測図（3）



第24図 出土遺物実測図（4）



第25図 出土遺物実測図 (5)

表12 土器一覧

器物番号	写真番号	通称	目次番号	出土層高 (cm)	取上日 N _h	種別	器形	色	調	残存部	口径 (cm)	底径 (cm)	断面最大径 (cm)	受容径 (cm)	底径 (cm)	高 (cm)	備考	
1	15	SX11	-	177	1	02.11.29	須恵器 灰白	灰白色	N 6/0	口縁 1/3~ 天井 1/2	(10.7)	-	-	(12.2)	-	3.3	つまみ紐(2.6cm)、外面部黒化	
2	15	SX11	-	177	2	02.11.29	須恵器 灰白	灰白色	N 4/0	口縁~天井 7/8	(12.2)	-	-	13.7	-	-	つまみ紐(2.6cm)、外面部黒化	
3	-	SX11	-	179	7	02.11.29	須恵器 灰白	灰白色	N 5 Y 8/1	口縁 1/6	(13.2)	-	-	-	-	-	-	
4	-	SX11	A7E9 三輪目付	-	-	02.11.14	須恵器 灰白	灰白色	N 8/0	底 1/5	-	-	-	(4.8)	-	-	ヘラ足跡、口沿立ち上がりが急斜面	
5	-	SX11	A7E9 三輪目付	-	-	02.11.14	須恵器 灰白	灰白色	N 7/0	底 1/6~底焼付	-	-	-	(13.1)	-	-	-	
6	-	SX11	-	179	5, 9	02.11.29	土師器 灰	灰白色	2.5 Y 7/2	口縁 1/4	(21.3)	(17.4)	-	-	-	-	-	花地縫?
7	-	SX11	-	179	4	02.11.29	土師器 灰	灰白色	10YR 6/4	口縁破片	-	-	-	-	-	-	小型品、存在地の粘土	
8	15	SX11	A7E9 コーナー	-	-	02.11.14	土師器 灰	灰白色	5 YR 7/6	口縁 1/6~底 2/3 底~底 2/3	(12.2)	-	-	-	-	-	3.2 不規則、複数色多量含む 網目・網目付(アラカツメ付) 外底部黒化(オリーブグリーン) 7.5 Y 5/2	
9	21	SH15-2	SPD	-	-	02.11.29	陶器 灰	灰白色	2.5 Y 5/1	底破片	-	-	-	-	-	-	-	
10	-	SH15-4	SPD	-	-	02.12.03	山茶碗 輪	青紫色	2.5 Y 7/2	口縁破片	-	-	-	-	-	-	内面黒、酸化鉄斑成	
11	-	SH16-10	SPM	-	-	02.12.05	山茶碗 輪	青紫色	5 B 6/1	底 1/2	-	-	-	(7.2)	-	-	糸切り、スノコ状縦	
12	-	SH16-10	SPM	-	-	02.12.03	山茶碗 輪	青紫色	5 YR 6/1	口縁破片	-	-	-	-	-	-	酸化鉄斑成	
13	21	SH16-11	SP 1	179	1, 2	02.11.29	陶器 灰	青紫色	7.5 YR 5/1	底 1/3	-	-	-	(16.5)	-	-	知多郡、薄い施釉	
14	-	SH16-11	SP 1	-	-	02.12.03	山茶碗 輪	青紫色	5 B 6/1	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	
15	21	SH16-12	SPC	175	1, 2	02.11.29	陶器 灰	青紫色	N 5/0	底 1/4	-	-	-	-	(14.0)	-	内面黒(灰土色) - 7.5 Y 4/2 網目・網目付	
16	-	SH16-13	SPE	-	-	02.11.29	山茶碗 輪	青紫色	N 7/0 (Y)	井形孔、底 1/2	-	-	-	(6.5)	-	-	糸切り、スノコ状縦	
17	-	SH16-13	SPE	-	-	02.12.04	山茶碗 輪	青紫色	N 7/0	井 1/8~底 1/4	-	-	-	(8.8)	-	-	糸切り、高い窓台	
18	15	SH16-14	SPF	190	1~3	02.11.29	山茶碗 輪	青紫色	N 6/0 (Y)	口縁~底 1/2 底 7/8	(14.5)	-	-	-	(6.8)	4.6	糸切り、スノコ状縦	
19	-	SH16-16	SPG	-	-	02.12.02	山茶碗 輪	青紫色	5 B 6.5/1	口縁~底 1/3	(13.7)	-	-	-	-	-	-	
20	-	SH16-18	SPL	178	1	02.12.05	山茶碗 輪	青紫色	5 B 6/1	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	
21	-	SH16-18	SPL	174	2	02.12.05	山茶碗 輪	青紫色	N 6/0 (Y)	底破片	-	-	-	-	-	-	スノコ状縦	
22	15	SH16-14	SPF	192	3	02.11.29	山茶碗 輪	青紫色	N 6/0 (Y)	口縁~底 1/4 底 1/1	(14.8)	-	-	-	-	5.8	4.4 糸切り、スノコ状縦	
23	15	SH16-20	SPK	173	4	02.11.29	山茶碗 小皿	青紫色	5 Y 6/1	完形	8.0	-	-	-	-	4.0	1.8 糸切り、使用無し	
24	15	SH16-20	SPK	183	1	02.11.29	山茶碗 小皿	青白色	N 7/0 (Y)	完形	8.3	-	-	-	-	4.5	2.2 糸切り、施釉無し	

試験番号	写真 図版	通 緒	日付 年月日	出土場所 (m)	取上日	地質	岩相	性 調	残存部	口径 (cm)	断 径 (cm)	受容層 (cm)	底 (高台等) (cm)	等 高 (cm)	備 考		
25	-	SH16-20	SP K	179	2	02.11.29	土師陶	燒	灰黑色 5 B 6 / 1	口縁部片	-	-	-	-	-	伊勢型系、内外面燃、弄在地粘土 スノコ板	
26	-	SH18-23	SP J	-	-	02.12.02	山茶陶	燒	灰黑色 5 B 6 / 2	底板片	-	-	-	-	-	伊勢型系、内外面燃、弄在地粘土 スノコ板	
27	15	SH18-23	SP J	HJ	1	02.11.29	山茶陶	燒	灰黑色 N 6 / 0 (B)	完形	7.3	-	-	-	3.5	2.0 系切り、使用歴無し	
28	-	SH18-24	SP N	-	-	02.12.06	山茶陶	燒	青褐色 5 B 6 / 1	口縁部片	-	-	-	-	-	知多型、内外面燃	
29	21	SH18-24	SP N	-	-	02.12.06	山茶陶	焼?	灰白色 N 7 / 0	底板片	-	-	-	-	-	知多型、内外面燃	
30	-	SH18-4	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	灰白色 5 Y 7 / 1	底 2 / 3	-	-	-	-	(6.9)	系切り、スノコ板	
31	-	SH18-13	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	灰白色 10 Y 5 / 1	底 1 / 5	-	-	-	-	(7.3)	系切り	
32	-	SH21-1	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	小皿	青褐色 5 B 6 / 1	口縁部片	-	-	-	-	-	知多型、内外面燃	
33	-	SH22-4	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	青褐色 5 B 6 / 1	底 1 / 3	-	-	-	-	(7.4)	系切り、スノコ板	
34	16	SH24-19	SP W	-	-	02.12.11	山茶陶	小皿	灰白色 5 Y 7 / 1	口縁~底 1 / 2	(7.9)	-	-	-	(4.6)	1.8 系切り、ヘア弓	
35	-	SH24-24	SP ~	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	灰白色 2.5 Y 7 / 2	口縁~底板片	-	-	-	-	-	知化器地盤	
36	-	SH24-25	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	灰黑色 10 Y 6 / 2	口縁部片	-	-	-	-	-	知化器地盤	
37	-	SH28-3	SP I	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	青褐色 5 B 5 / 1	口縁部片	-	-	-	-	-	知化器地盤	
38	-	SH31-4	SP ♀	-	-	02.12.03	山茶陶	燒	青褐色 5 B 6 / 1	口縁部片	-	-	-	-	-	知化器地盤	
39	-	P150	SPA	-	-	02.11.21	山茶陶	燒	黄褐色 2.5 Y 6 / 1	口縁 1 / 6	(15.0)	-	-	-	-	-	知化器地盤
40	-	P150	SPA	-	-	02.11.21	山茶陶	燒	灰~灰褐色 SYR 7 / 4	底 1 / 2	-	-	-	-	(6.7)	知化器地盤	
41	21	P150	SPA	-	-	02.11.21	山茶陶	鉢	灰白色 N 7 / 0	口縁~底板片	-	-	-	-	-	知多型、内外面燃	
42	16	P151	SPB	-	-	02.11.21	山茶陶	燒	灰白色 N 7 / 0 (Y)	口縁~底 1 / 3	13.8	-	-	-	7.3	3.9 系切り、薄灰地、内外面燃、 芦屋瓦	
43	-	SR1	-	-	-	02.11.15	土師陶	壺	灰~灰褐色 7.5 YR 6 / 4	口縁部片	-	-	-	-	-	伊勢型系、弄在地粘土	
44	21	SR1	-	-	-	02.11.15	陶器	壺	灰 N 5 / 0	口縁部片	-	-	-	-	-	湖面燃	
45	21	SR1	-	-	-	02.11.14	陶器	壺	灰白色 N 7 / 0	底 1 / 3	(13.0)	-	-	-	-	底板面/19外面 湖面燃、湖面燃、サンゴイット 2012年6月18日~同一年度 湖面燃、湖面燃、サンゴイット	
46	21	SR1	-	-	-	02.11.15	陶器	壺	灰 N 6 / 0 (Y)	底 1 / 3	-	-	-	-	(13.6)	伊勢型系、弄在地粘土 スノコ板	
47	-	SR1	-	-	-	02.11.15	山茶陶	燒	灰白色 N 7 / 0 (GY)	底 2 / 3	-	-	-	-	6.4	系切り、スノコ板	
48	-	SR1	-	-	-	02.11.14	土師陶	壺	灰~灰褐色 7.5 YR 7 / 4	口縁部片	(25.2)	-	-	-	-	伊勢型系、弄在地粘土 スノコ板	
49	-	SD1	-	-	-	02.12.02	須恵器	壺	灰白色 N 7 / 0	口縁部片	-	-	-	-	-	2012年6月19日~同一年度 湖面燃、湖面燃、サンゴイット	
50	-	SD1	-	-	-	02.12.02	土師陶	壺	灰 2.5 Y 7 / 2	口縁部片	-	-	-	-	-	伊勢型系、弄在地粘土 スノコ板	

序番号	写真 図版	通 稱	玉頭部 形状	出土層 (m)	層上日 No.	種別	幅 幅	色 色	圓 圓	残存部 体～底盤片	口 径 (cm)	直径 (cm)	周長 (cm)	支承筋 (高台形) (cm)	底 径 (高台形) (cm)	周 長 (cm)	備 考	
																	横断面	縦断面
51	—	SD1	—	—	—	02.12.22 山茶輪 細	灰白色	N 7/0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
52	—	SD24	—	—	—	02.11.28 山茶輪 細	灰色	N 6/0	底 1/2	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り、内外面自然端
53	16	SE3	—	—	—	02.11.21 山茶輪 細	灰色	N 6/0 (B)	体 1/2～底 2/3	—	—	—	—	—	—	—	7.7	余切り、スノコ板
54	21	SE3	—	177	—	02.11.13 山茶輪 細	灰白色	2.5 YR 4/2	口盤部片	—	—	—	—	—	—	—	—	知多郡、内面端
55	—	SE4	—	—	—	02.12.05 山茶輪 細	灰白色	N 7/0	体盤片～底 1/3	—	—	—	—	—	—	—	—	腹美、底西側、確認面出土
56	21	SE5	—	—	—	02.12.05 脚輪 重	灰色	N 4/0 (Y)	脚底片	—	—	—	—	—	—	—	—	變形、脚底、ランナーワイド状態、内面端
57	—	SE5	—	—	—	02.12.06 山茶輪 細	にぶい・黒色	7.5 YR 7/4	口盤部片	—	—	—	—	—	—	—	—	無化粧端
58	—	SE5	—	—	—	02.12.06 山茶輪 細	灰黑色	2.5 YR 5/2	底盤片	—	—	—	—	—	—	—	—	無高台、余切り
59	—	SE5	—	—	—	02.12.06 山茶輪 細	灰白色	5 Y 7/1	口盤～体 1/8 底 1/2	(8.3)	—	—	—	—	—	—	—	系切り、無化粧端
60	16	SE5	—	—	—	02.12.05 山茶輪 小皿	透明白色	7.5 YR 8/4	口盤 9.0/0～ 底 1/1	8.4	—	—	—	—	—	—	4.7	1.9 余切り、無化粧端
61	—	SE5	—	—	—	02.12.05 山茶輪 小皿	青灰色	5 B 5.5/1	口盤～体 1/8 底 1/3	(8.6)	—	—	—	—	—	—	—	系切り
62	16	SF18	—	187	1	02.11.28 山茶輪 細	にぶい・黒色	10 YR 7/3	口盤～体 1/8 底 2/3	(14.9)	—	—	—	—	—	—	—	系切り、スノコ板、無化粧端
63	16	SF18	—	180	3	02.11.29 山茶輪 細	灰白色	5 Y 7/1	底 1/1	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り、スノコ板
64	—	SF18	—	178	2	02.11.29 山茶輪 細	青灰色	5 B 6/1	底 3/4	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り、スノコ板
65	16	SF18 SD26	—	—	—	02.12.02 (2) 山茶輪 小皿	灰白色	N 7/0 (B)	口盤～体 2/5 底 1/5	(7.7)	—	—	—	—	—	—	—	系切り、内外面自然端
66	—	SF18	—	—	—	02.11.27 山茶輪 小皿	灰白色	N 6/0 (B)	底 1/1	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り
67	16	SX12	—	192	2	02.11.29 山茶輪 細	にぶい・黒色	10 YR 7/2	口盤～体 1/4 底 1/5	(14.9)	—	—	—	—	—	—	—	スノコ板、無化粧端
68	—	SX12	—	192	4	02.11.29 山茶輪 細	灰白色	N 7/0 (BG)	口盤～底 1/3	(15.0)	—	—	—	—	—	—	—	系切り
69	17	SX12	—	194	3	02.11.29 山茶輪 細	灰白色	N 7/0 (B)	底 1/1	—	—	—	—	—	—	—	6.4	—
70	—	SX12	—	189	5	02.11.29 山茶輪 細	にぶい・黒色	10 YR 7/2	体盤片、底 3/4	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り、スノコ板、無化粧端
71	—	SX12	—	186	1	02.11.29 山茶輪 細	灰白色	N 7/0	体下部～底 1/5	—	—	—	—	—	—	—	—	系切り
72	17	小瓦輪前	—	—	—	02.12.02 山茶輪 小皿	灰白色	N 5.5/0 (B)	完形	8.6	—	—	—	—	—	—	5.1	2.0 余切り、滑用端し、蓋面？
73	17	小瓦輪前	—	—	—	02.11.26 山茶輪 小皿	灰白色	N 6/0 (B)	口盤 1/2～ 底 1/1	(7.9)	—	—	—	—	—	—	—	系切り、スノコ板、前部面に糸引孔
74	17	小瓦輪前	—	—	—	02.12.02 山茶輪 小皿	灰白色	N 7/0 (B)	完形	8.1	—	—	—	—	—	—	4.9	1.9 余切り、外面、蓋自然端
75	17	45 北東	—	—	—	02.11.26 山茶輪 小皿	灰白色	N 5/0	口盤 3/4～ 底 1/1	7.6	—	—	—	—	—	—	4.1	1.8 余切り、内外面自然端

留番号	写真 番号	道 線	田舎端	出止高 (m)	及上日 No.	場所	範囲	色 調	現存 (cm)	口径 (cm)	頭径 (cm)	胸深 大径 (cm)	受胎距 (cm)	胎 高 (高台径) (cm)	備 考	
76	21	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	端	灰色 N 6.5/0	毫 1/6	-	-	-	(13.0)	-	優美、湖西端、内面自然端外端ナメ内側オーブ色 Y 5/4、尾端	
77	21	A6区	-	-	(2).12.03	山茶端	端	淡褐色 2.5Y 8/3	体裸片	-	-	-	-	-	内側オーブ色 Y 5/4、尾端	
78	-	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	端	寶灰褐色 5 B 6.5/1	毫 1/1	-	-	-	6.9	-	系切り、スノコ板	
79	-	A6区	-	-	(2).11.26	山茶端	端	灰色 N 5.5/0 (B)	毫 1/2	-	-	-	(6.5)	-	系切り	
80	-	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	端	灰白色 N 7/0	毫 1/2	-	-	-	(7.2)	-	系切り、スノコ板	
81	17	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	小端	にごい褐色 5 YR 6/3	口端~全体 3/5 底 1/1	(7.8)	-	-	-	4.5	1.6	墨縁井、系切り、墨化端地成
82	-	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	小端	灰色 N 6/0	口端~底 1/4	(8.3)	-	-	-	(4.8)	1.6	系切り
83	-	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	小端	灰白色 N 7/0	毫 1/1	-	-	-	(4.2)	-	系切り	
84	17	A4区北	-	-	(2).11.13	山茶端	小端	灰色 N 6/0 (B)	口端~全体 3/4 底 1/1	8.4	-	-	-	4.4	1.6	系切り
85	-	A4区南	-	-	(2).11.13	山茶端	小端	にごい褐色 10 YR 7/2	口端 1/5~ 底 1/6	(7.9)	-	-	-	(3.4)	1.5	系切り、墨化端地成
86	-	A5区南	-	-	(2).11.27	須磨端	端	灰色 N 6/0	口端 1/4~ 底 2/5	(11.1)	-	-	(13.0)	-	2.9	内外端墨化
87	-	A5区	-	-	(2).11.19	山茶端	端	灰褐色 2.5 Y 7/2	毫 1/1	-	-	-	-	6.2	-	系切り、墨化端地成
88	-	A5区南	-	-	(2).11.18	山茶端	端	灰白色 5 Y 7/1	毫 7/8	-	-	-	(6.3)	-	系切り、スノコ板	
89	-	A5区南	-	-	(2).11.27	山茶端	端	寶灰褐色 2.5 Y 6/1	体裸片、毫 1/2	-	-	-	(6.3)	-	系切り	
90	17	A5区	-	-	(2).11.27	山茶端	小端	寶灰褐色 5 B 6/1	口端~毫 2/5	(8.8)	-	-	-	(4.5)	1.9	系切り
91	-	A6区北	-	-	(2).11.12	須磨端	端	灰白色 N 7/0	毫 1/4~ 口端 1/8	(11.9)	-	-	(14.2)	-	3.4	湖西端?、つまみ端(2.4cm)
92	21	A6区南	-	-	(2).11.12	山茶端	端	灰色 N 6/0	体裸片	-	-	-	-	-	墨縁井、湖西端	
93	20	A6区中央	-	X	(2).12.06	須磨	端	灰白色 N 8/0	毫 1/2	-	-	-	(4.6)	-	内外端墨化(須磨色 5 G 7/1)	
94	20	A6区中央	-	-	(2).11.28	須磨	端	灰白色 N 8/0	口端裸片	-	-	-	-	-	内外端墨化(須磨色 5 G 7/1)	
95	18	A 6区	-	-	(2).12.06	山茶端	端	寶灰褐色 5 B 5/0	口端裸片 底 2/3	(14.7)	-	-	(7.1)	4.5	系切り、スノコ板	
96	-	A6区北	-	-	(2).11.12	山茶端	端	灰白色 N 7/0	毫 1/1	-	-	-	(6.6)	-	系切り、スノコ板、棒状茎	
97	18	A6区中央	-	-	(2).11.27	山茶端	端	にごい褐色 5 YR 6/4	毫 1/2	-	-	-	(7.0)	-	墨縁井、系切り、鰐口端地成、新月端	
98	-	A6区中央	-	-	(2).12.02	山茶端	端	灰色 N 6/0	毫 1/2	-	-	-	(7.3)	-	系切り、棒状茎、別端真	
99	-	A6区北	-	-	(2).11.12	山茶端	端	灰白色 7.5 Y 6/1	毫 1/1	-	-	-	(6.8)	-	系切り、スノコ板	

圖案番号	写真 版面	土壤構 造	土質 (cm)	土質 厚さ (cm)	取上日 No.	場所	樹種	色 調	測定部	口 徑 (mm)	周 長 (mm)	輪廓最大径 (mm)	受部延 (mm)	底 径 (高台部) (mm)	備 考	
															底 径 (mm)	高 度 (mm)
底存部	側存部															
100	18	A6区東央	—	—	—	02.11.28	山茶樹	小葉 灰色 N 6/0 (B)	口盤 3.4~ 底 1/1	(7.8)	—	—	—	(4.1)	1.9	系切り
101	18	A6区東端	—	—	—	02.11.12	山茶樹	小葉 灰色 N 6/0	口盤 1/6~ 底 5/6	(8.5)	—	—	—	(4.2)	1.5	系切り、内面自然地、スノコ板
102	18	A6区中央	—	—	—	02.11.28	山茶樹	小葉 灰色 N 6/0	口盤 1/3~ 底 1/2	(7.4)	—	—	—	(4.0)	1.6	系切り
103	—	A6区中央	—	—	—	02.11.28	山茶樹	小葉 灰色 N 6/0	口盤 1.5~ 底 1/4	(8.0)	—	—	—	(4.2)	—	系切り
104	—	A6区	—	—	—	02.11.06	山茶樹	小葉 青灰色 5 PB6/1	口盤 1/6 底盤片	(7.5)	—	—	—	(3.4)	—	内外自然地
105	20	A7区西端	—	—	—	02.11.15	青楓	灰白色 N 8/0	口盤底片	—	—	—	—	—	—	内面自然地、側存部 内面側面、側存部 (写真色 10GT 8/1)
106	—	A7区西	—	—	—	02.11.18	山茶樹	灰白色 N 6.5/0	底盤片、底 9/10	—	—	—	—	(7.5)	—	系切り、横状模
107	—	A7区東端	—	—	—	02.11.21	山茶樹	灰に淡い褐色 5.5 YR 6/3	底盤片、底 1/3	—	—	—	—	(7.6)	—	系切り、スノコ板地、變化地塊
108	—	A7区東	—	—	—	02.11.12	山茶樹	青灰色 5 B 6/1	口盤底片	—	—	—	—	—	—	系切り
109	—	A7区南	—	—	—	02.11.07	山茶樹	小葉 青灰色 5 B 6/1	底 3/5	—	—	—	—	(4.2)	—	系切り
110	21	B6区東端	—	—	—	02.11.14	山茶樹	灰 灰色 5 Y 6/1	底 1/6	—	—	—	—	(14.0)	—	知多郡、内面側、外面ヘタケアリ
111	21	B6区東	—	—	—	02.11.13	山茶樹	灰 灰色 N 7/0	底盤片	—	—	—	—	—	—	知多郡、外面ヘタケアリ
112	18	B6区東端	—	—	—	02.11.14	山茶樹	灰 灰色 5 Y 6/1	口盤底片 底 4/5	(14.9)	—	—	—	(6.6)	4.2	系切り、スノコ板
113	18	B6区北端	—	—	—	02.11.14	山茶樹	灰に淡い褐色 5 YR 6/3	口盤底片 底 2/5	(14.8)	—	—	—	(6.8)	4.2	系切り、變化地塊
114	18	B6区東端	—	—	—	02.11.08	山茶樹	灰 灰色 N 6/0	口盤 1/4 底 1/3	(15.4)	—	—	—	(7.0)	4.2	系切り、スノコ板
115	—	B6区北端	—	—	—	02.11.18	山茶樹	灰に淡い褐色 5 YR 7/4	口盤底片 底 1/4	(14.0)	—	—	—	(6.0)	—	變化地塊、摩滅
116	18	B6区東端	—	—	—	02.11.14	山茶樹	灰 灰色 7.5 YR 6/3	底 1/1	—	—	—	—	(6.2)	—	黒暗、系切り、スノコ板
117	—	B6区北端	—	—	—	02.11.18	山茶樹	灰 灰色 N 7/0 (RG)	底 1/1	—	—	—	—	(6.4)	—	系切り、スノコ板
118	—	B6区北端	—	—	—	02.11.18	山茶樹	灰 灰色 5 Y 6/1	底 1/2	—	—	—	—	(6.4)	—	系切り、スノコ板
119	—	B6区東端	—	—	—	02.11.14	山茶樹	灰 灰色 N 7/0	底 1/2	—	—	—	—	(8.0)	—	細美、黒暗、内面側
120	18	B6区北端	—	—	—	02.11.18	山茶樹	灰 灰色 N 6/0 (Y)	口盤~底 1/3 底 2/5	(7.6)	—	—	—	(3.5)	1.8	墨書き、系切り
121	19	B7区北端	—	—	—	02.11.15	須弥葛	灰白色 N 7.5/0 (PB)	口盤~底 1/4	(7.8)	—	—	—	(9.7)	—	湖南 7、122と同一種体?
122	—	B7区	—	—	—	02.11.08	須弥葛	灰白色 N 7.5/0 (PB)	口盤~底 1/4	(7.2)	—	—	—	(9.0)	—	湖南 7、121と同一種体?
123	21	B7区	—	—	—	02.11.08	山茶樹	灰 灰色 N 7/0 (Y)	口盤底片	—	—	—	—	—	—	知多郡
124	—	B7区北端	—	—	—	02.11.13	山茶樹	青灰色 5 B 6/1	底盤片、底 1/3	—	—	—	—	(7.0)	—	系切り、スノコ板、内面自然地

回収番号	写真 記載	種 類	田邊地 域	出土位置 (m)	地上高 M.s.	地上日 期	編列	標識	灰 色	圓 面	残存部	口 径 (cm)	軸 径 (cm)	断面最大 直径 (cm)	受留径 (cm)	高 倍 (高倍率 (cm))	備 考
125	- B7 区東端	-	-	-	02.11.13	山茶樹	輪	灰白色	N 7/0(B)	口盤・体 1/6	(13.5)	-	-	-	-	-	
126	- B7 区北端	-	-	-	02.11.13	山茶樹	輪	灰白色	N 7/0	口盤・輪片	-	-	-	-	-	灘美・瀬西窓	
127	- B7 区東端	-	-	-	02.11.14	山茶樹	輪	灰白色	5 Y 7/1	体 1/3~盤 1/2	-	-	-	-	(7.0)	糸切り、スノコ模	
128	- C7 区東端	-	-	-	02.11.14	山茶樹	輪	灰白色	N 7/0(B)	体盤片、盤 5/6	-	-	-	-	7.3	糸切り、スノコ模、内外面縫	
129	- B7 区南端	-	-	-	02.11.13	山茶樹	輪	灰白色	N 7/0(PB)	盤 3/5	-	-	-	-	6.6	糸切り、スノコ模	
130	- B7 区中央	-	-	-	02.11.14	山茶樹	輪	青灰色	5 B 6/1	体 1/6~盤 1/1	-	-	-	-	5.5	糸切り、スノコ模	
131	19 B7 区北端	-	-	-	02.11.07	山茶樹	小輪	灰白色	N 6.5/0	口盤 1/8	(9.4)	-	-	-	4.9	糸切り	
132	19 B7 区西端	-	-	-	02.11.14	山茶樹	小輪	灰白色	N 6.0/Y(R)	口盤~体 2/3	8.4	-	-	-	4.4	糸切り	
133	19 B7 区北端	-	-	-	02.11.07	山茶樹	小輪	灰白色	N 6.0(B)	口盤~体 1/3	(8.2)	-	-	-	(4.0)	糸切り	
134	19 B7 区中央	-	-	-	02.11.15	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0(B)	口盤 1/3~盤 1/1	8.2	-	-	-	4.3	糸切り、内面自然縫	
135	19 B7 区東端	-	-	-	02.11.14	山茶樹	小輪	灰白色	N 5.0	口盤 1/3~盤 1/1	(7.9)	-	-	-	(4.0)	糸切り	
136	- B7 区中央	-	-	-	02.11.14	山茶樹	小輪	灰白色	N 6.0	口盤輪片 盤 1/1	(7.5)	-	-	-	(3.8)	糸切り	
137	- B7 区	-	-	-	02.11.06	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0	盤 2/3	-	-	-	-	(3.8)	糸切り	
138	- B7 区西端	-	-	-	02.11.13	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0(B)	口盤~盤 1/4	(7.4)	-	-	-	(4.0)	糸切り	
139	- B7 区東端	-	-	-	02.11.12	土壌器	端	にぶい緑色	5 YR 7/4	口盤輪片	-	-	-	-	-	伊勢原系、内外面縫、青在地防護土	
140	- C7 区東	-	-	-	02.11.28	山茶樹	輪	灰白色	N 8/0	盤 1/6	-	-	-	-	(7.2)	灘美・瀬西窓、内・輪面縫	
141	19 C7 区中央	-	-	-	02.11.15	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0	口盤 1/4~盤 3/4	(8.4)	-	-	-	(4.0)	糸切り	
142	19 C7 区東端	-	-	-	02.11.15	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0(PB)	口盤 1/2~盤 2/3	(7.5)	-	-	-	(4.0)	糸切り	
143	20 C7 区東端	-	-	-	02.11.15	山茶樹	小輪	青灰色	5 B 6.5/1	口盤~体 3/5	(7.7)	-	-	-	(4.4)	墨書き・糸切り、スノコ模	
144	- C7 区東	-	-	-	02.11.28	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0	盤 1/1	-	-	-	-	4.2	糸切り	
145	- C7 区東端	-	-	-	02.11.15	土壌器	端	灰白色	10 YR 8/2	口盤輪片	-	-	-	-	-	伊勢原系、内外面縫、青在地防護土	
146	20 排土内	-	-	-	02.12.03	山茶樹	小輪	灰白色	N 6.0(B)	口盤 1/3~底 1/1	(8.1)	-	-	-	4.4	糸切り、内面縫	
147	20 薙表面	-	-	-	02.11.07	山茶樹	小輪	灰白色	N 7/0(Y)	口盤 1/4~底 1/2	(8.4)	-	-	-	(4.6)	糸切り、内面縫	

* 実物を輸入していない山茶樹は東洋江・西野河向と考へられるものである。

5 その他の遺構と出土遺物

前記の他に必要と思われる遺構と遺物について概略を述べることとする。地震痕跡（脈状砂など）はかなり新しいが、ここで述べることとする。

P150・151（第10・22図） B6区中央に位置し、S R1に沿っている。比較的小型の小穴であるが、山茶碗や鉢の破片が出土し、P150からは多量の炭化物も確認された。

脈状砂（第20図） A5区とB7区のものを掲載したが、他にも何条か存在する。方向はN-27°-Eで、中世以降に発生した地震痕跡である。平成12年度の調査では、同じ中世以降の例で、旧河道に平行した東西方向の脈状砂も発見されている。

包含層出土土器 最も新しいものは浅く口徑の小さい山茶碗の小皿で、比較的多く散見される。山茶碗のなかで、最も古いとされるのが131の小碗である。これは、今回発見された遺構の時期とは直接結びつかないかもしれないが、遺構の重複状態から判断すると比較的古くから集落が形成された可能性もある。出土土器から推測される建物跡群の存続時期は、12世紀後半から13世紀中頃と推定される。

平成12年度の調査では、碗には渥美・湖西産のものが比較的多く混在した（小碗や皿は非常に少ない）が、今回の調査区では、時期的に新しいものが多いためか東遠江・西駿河産の碗が主体である。

今回は、渥美・湖西産の壺や甕と知多産の鉢といった大型の陶器が遺構内出土例も含めて比較的多く出土し、龍泉窯系とされる青磁片も3点出土した。威信財としての輸入陶磁器は、平成12年度調査分を含めて青磁片4点、白磁片2点が確認されているに過ぎない。一般的の傾向からすれば、その出土比率は低く、上級支配者層や特殊な施設の存在を出土土器から推定することはやや困難であろう。

墨書き土器（第23図81、第24図97・116・120、第25図143） 何れも包含層出土土器であり、遺構との直接的な関連性は不明である。文字の明瞭な例は「井」（81）と「大」（143）の2点のみで、97と120も同様の墨書きと推定することは可能である。

鉄滓（第25図149～152） 149・150はエックス線写真により鉄滓であると確認されている。150は柱穴内から完形の小皿と伴出しており、祭祀的行為と関連する可能性がある。

表13 鉄滓、土・石製品一覧

図番号	写真 図版	遺構	旧遺構	出土標高 (cm)	取上日	取上 番号	種別	備考
148	20	SD9上層	—	—	02.11.15	—	土鉢	ほぼ完形、灰白色N7/0
149	20	A6区北西	—	—	02.11.12	—	鉄滓	
150	20	SH16-20	SPK	176	02.11.29	3	鉄滓	山茶碗と共に
151	20	P146	SPレ	—	02.12.03	—	鉄滓	
152	20	P146	SPレ	—	02.12.03	—	鉄滓	
153	20	C7区中央	—	—	02.11.15	—	砥石	
154	20	調査区北東	—	—	02.11.07	—	敲石	

第IV章 まとめ

第1節 平安時代末期から鎌倉時代の集落について

ここでは、とくに掘立柱建物跡の時期別の変遷について、それらと関連するであろう遺構を含めてまとめてみたい。平成14年の報告（平成12年度調査分）に際しても建物跡の変遷案を示したが、今回の調査によりいくつかの変更点が生じているので、訂正と補足をしながら説明を試みたい。

前回の報告のなかで、広範囲の調査にも関わらず出土遺物の時期が限定される点が、この時期の他の調査事例とは異なっているとした。このような遺構や遺物の在り方は、集落縁辺部の特殊な事例として扱われる場合が多い。しかし、平成12・14年度調査区は、安定的な土地環境にあったと考えられるため、集落の非連續性の要因を説明する材料に乏しい。今回は、この非連續性を積極的に評価し、むしろ周辺地域における歴史的な変化を暗示している可能性があるということで「藤守期」を設定した（註2）。

藤守期は、建物跡を中心とした遺構の変遷案を理解するため、古・中・新の3段階に区分した（拙著2002）。各段階における東遠江・西駿河産の山茶碗の形態変化を示すと、古段階は、高台の高い腰の張った深い碗と低い高台の付いた小碗が存在する。中段階の碗は大きな形態の変化はないが、相対的にやや小振りになり、高台もやや低くなる。そして、小碗は無くなり、深めの小皿が出現する。新段階の碗は、口辺部が直線的に開き、口径も小さく、高台も形骸化しつつある。小皿は浅く偏平化する。

今回の調査区では、比較的新段階の土器が多く出土しているが、1点（I31）古段階より古い小碗が発見されている。これは、遺構に伴うものではなく少数であるため、ここでは長期間使用されていたものがこの地区に搬入されたものと解釈している。しかし、I31と古段階の基準となるSD2出土例とは形態差が大きく、古段階でもより古い様相を示す一群の存在が想定され得る。

平安時代末期から鎌倉時代の掘立柱建物跡は、平成14年報告では9棟が発見され、今回の報告で21棟が追加された。合計で31棟が調査区の北側（北群）と南側（南群）に分かれて存在する。

北群の建物跡群を囲むSD1の時期については、平成14年報告の第58図2の山茶碗（中層出土）から新段階としたが、この区画溝内の建物跡群はその棟方位から比較的古く、別の区画溝（SR1）に切られていることから、中段階以前としておきたい。

北群のSH4は、今回の調査によって存在しないことが確定したため欠番とした。

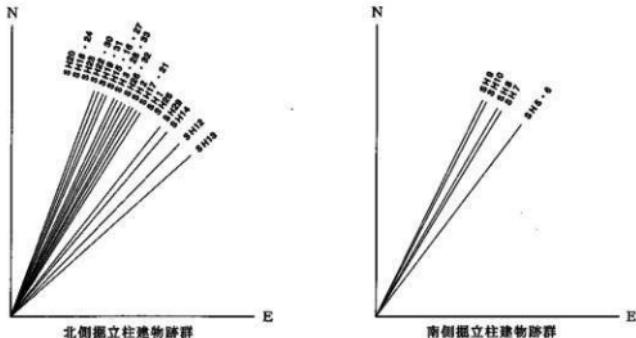
南群については、とくに変更する点はないが、建物跡の初現を決める材料に欠けている。確実に古段階とされる土器が、周辺から出土していなかったためであるが、今回、新たにI-4区から小碗の出土（第29図155）が確認されたため、古段階から存続する確率は高まった。

柱穴内からの出土遺物によって時期を限定できる建物跡は少ないが、建物跡に関連する遺構からは、比較的多くの土器が出土している例が存在する。SH1とSD2、SH16とSR1（SX1）、SH9とSD15～17・19などは、その配置と出土土器から建物跡の時期を推測することが可能である。

現地調査の段階で、遺構の新旧関係が確認された主な遺構がいくつあるので、それらを以下にまとめておく。SD1→SR1、SD1→SH28、SH18→SF18?、SF18→SH17、SD16→SH5である。

掘立柱建物跡の棟方位のグラフを第26図に掲載した。これらは、北を優先させてまとめたものであり、実際の棟方位とは異なる。建物跡群の変遷は、北群と南群に分けて第27・28図に示した。

南群の建物跡の棟方位はまとまりが良く、中段階前後の比較的短期間の内に建てられた可能性がある。周辺からの出土土器も、古段階や新段階の例が乏しいことからそれを裏付けている。前回の報告のなか



第26図 挿立柱建物跡の棟方位（北を基準とする）

で、その変遷案をまとめているので詳細の再論はしないが、第28図の南群Aが中段階に近い古段階、BとCが中段階、Dが中段階から新段階にかけてのものと考えられ、時期が新しくなるにつれて棟方位が東に掘れている。

北群は、今回発見されたものが多いため、第Ⅲ章の内容を簡単にまとめ直し、その変遷案を提示してみたい。比較的同時存在の建物群を認識しやすいものとして、第27・28図の北群①・②・③・⑥があり、これらを中心に説明したい。

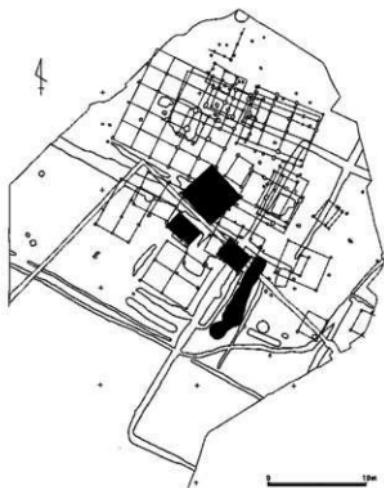
①は棟方位が東に大きく振れている建物跡群で、②に接しながら中央の空閑地に存在する。②はSH1を中心据え、柱筋が一致するSH2と棟方位が近いものを充てた。②はSD2出土土器から古段階に属する。棟方位は、南群とは逆で北に振れている方が新しい傾向があり（実際には北に振れて、少し東に戻る）、①が古いと考えられる。①は小型の母屋に納屋風の建物が付属し、建て替え後の②では大型の建物跡が2棟に増加している。

③はSD1により区画された建物群である。棟方位は、①→②→③とスムーズに変化している。②の段階での成長が、新たな地点への屋敷地の移動を可能にしたものと推測される。SD1はSH1をかなり意識した配置であり、③は古段階に近い中段階とすべきであろう。

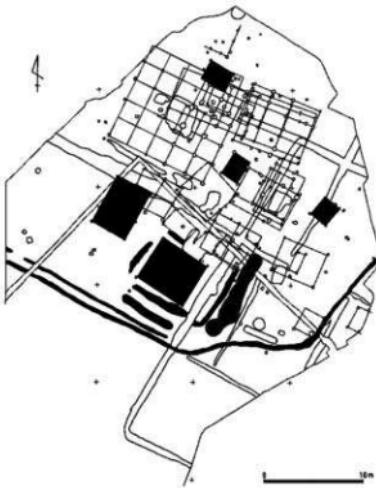
⑥も溝により区画された建物跡群で、最大規模のSH16を含んでいる。SH26は区画間にうまく配置されており、南西側の柱筋もSH16を意識しているようである。地籍図（第4図）から推定したこの区画の東西の距離は約40mで、SD1の南北の距離と大差はない。区画溝の幅や深さは小さく、この屋敷の所有者を上位の有力者層と連断することはできない。⑥は建物跡群の変遷過程から、突如現れた物ではなく、在地で徐々に成長した農民（武士）の屋敷と理解した方が良いのではないかと考えられる。一時的に地位と経済力を得た名主層の屋敷の一部とすべきであろう。SR1出土土器がSX1出土例と接合しており、⑥は新段階に属するであろう。

上記以外の④・⑤・⑦は、遺構間の新旧関係と建物跡の棟方位や配置から群とその変遷を推測した。

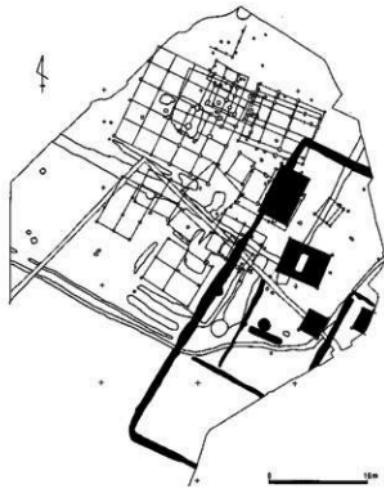
④ではSH18・24とSH3・15・28の棟方位が異なっており、北に大きく振れたSH18・24が新しいであろう。SH18と24は柱筋が直線的に通っており、同時に存在していたと考えられる。SH24のような両面庇の建物跡には、SH3・15・28のような付属的な建物跡が当然存在するものと思われる。ただし、④を開む施設は確認されていない。SH18はSF18より古くと現地調査段階では認識しており、当



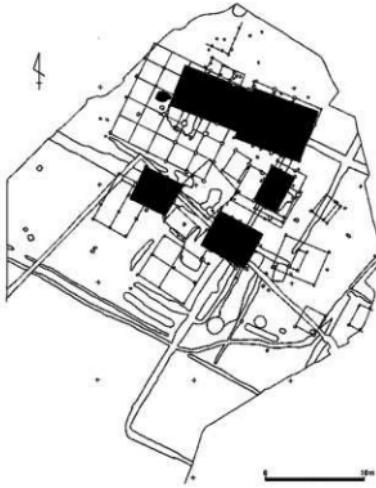
北群①



北群②

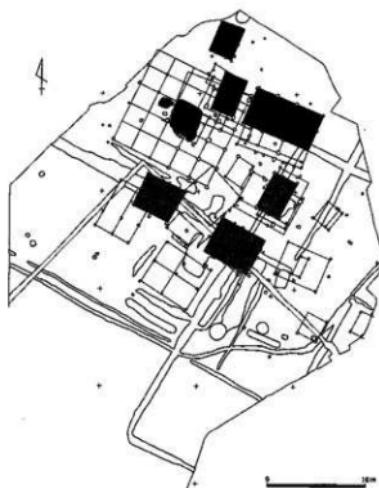


北群③

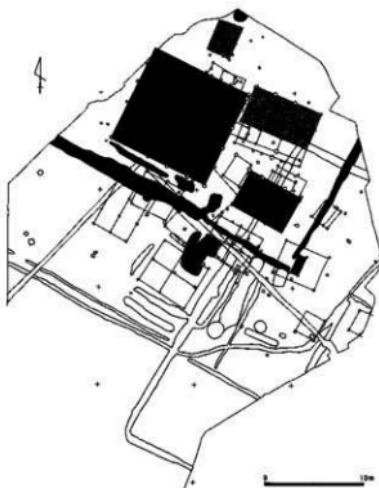


北群④

第27図 藤守期の集落変遷図（1）



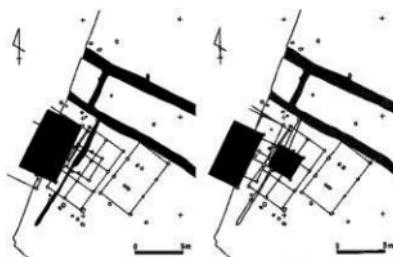
北群⑤



北群⑥

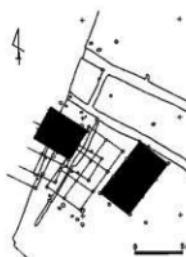


北群⑦



南群A

南群B



南群C

南群D

第28図 藤守期の集落変遷図（2）

然 S F18 (⑤) の掘削以前に建てられたものとなる。S F18は新段階に埋没しているので、⑤～⑦を新段階とすると、④は中段階に属す可能性が高い。

⑤は S H18・24に近い棟方位の S H20・22・23が新たに建てられている。その配置と重複状態から S F18も同時に存在したと考えた。より北側に母屋などの主要な施設が展開している可能性もある。この地区に限って見ると、倉庫風の S H3・15は、S H16に吸収されるているようにも取れる。

⑦は S H17が S F18より新しいことから設定した。最終段階の寂しい状況が想定される。

今回の調査による大きな成果として、区画溝の一辺の長さが約35mと判明したことと大型の総柱建物跡（身舎周囲の付属施設を含む）の発見がある。この時期の沖積平野上の繼続性のある集落は、基本的に屋敷地を閉む溝が存在する場合が多いと考えられる。県内の藤守期の集落跡で、区画溝を伴う屋敷地は多数推定されているが、区画の大きさが計測できる例は少ない。時期的に少し問題もあるが、細江町川久保船渡遺跡（栗原1993）、磐田市玉越遺跡（山崎1986）、島田市石成遺跡（中鉢1995）、清水市太田切遺跡（大川1984）などが比較的大きさは認識し易い。各遺跡の溝間の間隔は、川久保船渡遺跡が35m、玉越遺跡が38m、石成遺跡が推定で約35m、太田切遺跡は約40・50mである。川久保船渡遺跡や玉越遺跡の区画は堀であり、おそらく土塁などを伴う防衛的な性格が強い。太田切遺跡は比較的溝の幅が大きく防衛機能を有していたものと思われる。また、区画溝はより広い範囲を巡っているようである。石成遺跡の溝も幅は広いが浅く、侵食をかなり受けているようである。

上記の遺跡は、区画溝の間隔が太田切遺跡を除くといずれも40m未満で、出土遺物に少量の輸入陶磁器があり、集落の存続期間が短期的なものでは無いという共通点がある。当時の職種や階層は様々に分化しており、一概には言えないが、屋敷地の面積が一般的であるという点では、藤守遺跡の区画された屋敷の保有者は中級以下の自立的な農民もしくは武士層と考えられる。

大型の総柱建物跡（S H16）が何に利用されたのかは不明であるが、どのような遺跡で確認されているのか比較検討してみたい。

浅羽町馬場第2遺跡（柴田稔1984）例は、3間×3間で柱間間隔が192cmである。清水市太田切遺跡（大川1984）例は、6間×3間で柱間間隔が約200cmである。裾野市大畠遺跡（渡瀬ほか1989）では、大きさの不明なものや建て替えを除くと3棟（S H1・3・4）が発見されている。S H1は10間×3間で柱間間隔が約230cm、S H3は4間×4間（庇を除く）で柱間間隔が約230cm、S H4は建て替えのある4間×4間で柱間間隔が約230cmである。これらの建物跡は、規模も大きいが柱間間隔も広い点が特徴である（註3）。これだけの建物跡の建築には、高度な建築技術が要求され、専業集団に依頼するだけのある程度の経済力も必要であろう。

馬場第2遺跡では、長期にわたる屋敷の繼続性を指摘できないことから、単純に有力者層を想定することは難しい。太田切遺跡は飯田氏と関連する屋敷とされている。大畠遺跡の建物跡は領主層の屋敷と推定され、群を抜いて大きく小鍛冶遺構も伴う。

藤守遺跡からも鍛冶関連遺物が少量出土しているが、S H16と鍛冶を直接結び付けるだけの証拠に欠けている。領主層の屋敷とすることは、出土遺物や区画施設の状況から積極的に論ずることもできない。現状では、こうした大型建物跡が他の遺跡でも少なからず存在する可能性は指摘できる。

第2節 平安時代末期から鎌倉時代の土器について

平成12年度と今回の発掘調査で出土した遺物は、多くの方々に実見していただき、とくに、その産地についての御教示をいただいている。ただし、産地は新たな知見により変動し、地域を限定できる場合もあれば、逆により広い範囲を想定しなければならない場合もある。産地の特定については、流動的な側面が常に内在していることを了解しておかなければならない。

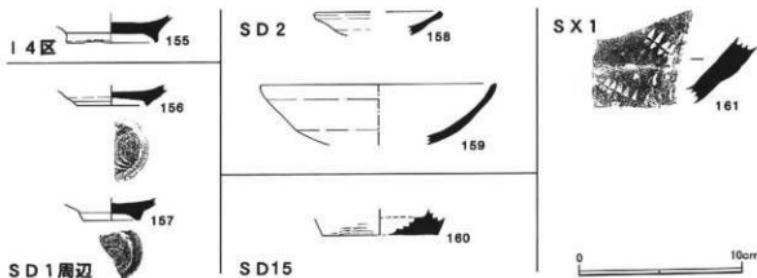
本論にはいる前に、まず始めに平成14年報告分の土器で、訂正すべき箇所と新たに公表すべき資料があるので追加報告する。

平成14年報告の第62図9は尾張産の可能性を指摘したが、渥美・湖西産としておきたい。同第80図18は口縁部が厚い点で産地不明であるが、胎土は猿投産に近いようである。

第29図に平成12年調査時に出土した土器の追加実測図を掲載した。155は調査区南部から出土した大振りの小碗である。底外面は丁寧に撫でられているが、微かに糸切り痕が残る。スノコ状の圧痕も付いている。156・157はSD 1周辺出土の小碗である。156はB 6区から、157はC 6区北西から出土した。158・159はSD 2出土である。158は小片のため詳細は不明であるが、おそらく渥美・湖西産の小皿であろう。159は胎土に橙色粒子を多量に含んでおり、山茶碗の模倣品の可能性もある（註4）。醸成化焰焼成の山茶碗と胎土以外では区別ができない。制作者は山茶碗工人であろうが、当遺跡からは所謂かわらけは出土していないため類例の増加を待って検討したい。160はI・2区のSD 15出土の壺である。外面には工具痕が残り、胎土に白色の岩片を多く含んでいる。161はSX 1出土の甕で、外面には渥美・湖西産の特徴とされる接合痕が顕著に観察される（註5）。

今回の資料整理では、出土例の少ない古段階以前の土器と渥美・湖西産小碗と小皿の抽出を平成12年度発掘分も含めて主に行なった。小碗は3点が追加され、調査区北部だけでなく、南部にも1点存在している。このことにより、古段階の遺構が調査区南部にも存在する確率は高まった。渥美・湖西産の碗は一定量搬入されているのであるが、渥美・湖西産の小碗や小皿は1例しか確認されていない。ここで、当遺跡と周辺遺跡の山茶碗の産地別の出土状況を検討したい。

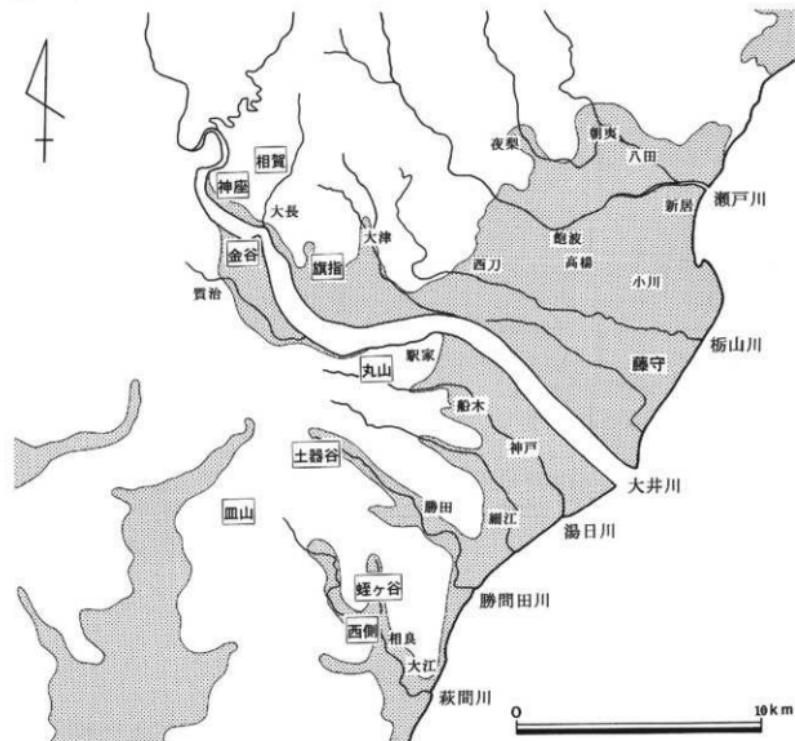
当遺跡は海岸沿いに位置していることもあり、東遠江地域の集落跡と同様に、比較的多くの渥美・湖西産の山茶碗が出土している。底部残存率から計測した個数比では、古段階のSD 2で8.75点の山茶碗の内、渥美・湖西産碗14%、東遠江・西駿河産碗69%、同小碗17%、中段階のSD 15~17で17.2点の山茶碗の内、渥美・湖西産碗22%、東遠江・西駿河産碗38%、同小皿37%、壺3%、新段階のSX 1で9.2点の山茶碗の内、渥美・湖西産碗0%、東遠江・西駿河産碗87%、同小皿13%である。



第29図 平成12年度出土土器追加実測図

今回の調査で出土した山茶碗は、量的にそれほど多くなかった。そのため、口縁部もしくは底部が1／2以上残存している破片は全て実測図を掲載した。それらは、底部の残存率を個体数に換算すると合計で39.84点である。山茶碗の構成比は、碗が75%、小碗が2.5%、小皿が22%、鉢が0.4%であり、碗の比率がかなり高く、時期的に古い小碗が非常に少ない。

周辺の生産地に近く、藤守期の古・中段階の土器が多く出土した島田市矢崎遺跡では、報告書に掲載されているものなかに1点湖西系とされている（青木2001）ものがある。渥美・湖西産山茶碗の出土比率は1%以下であろうと推測される。隣接した石成遺跡（中鉢1995）は古～新段階で、同様の比率のようである。菊川町林光寺遺跡（塚本1999）では、古段階よりも古い山茶碗が多数報告され、渥美・湖西産が相当数を占めている。掛川市牛岡遺跡（篠原1995）では、観察表の356点中、渥美・湖西産の碗7%、小皿1%、東遠産の碗42%、小碗17%、小皿33%である。新段階の渥美・湖西産の碗は存在するが、小皿が非常に少ない点は藤守遺跡と共通している。掛川市領家遺跡（長谷川2001）では、古段階より古いものは渥美・湖西産が46%、古段階併行で85%、中段階併行で64%である。袋井市坂尻遺跡（松井1995）では、I-2期で、渥美・湖西産72%、東遠江産11%、知多産9%、尾張産8%、II期では同順で80%、5%、10%、5%、III-1期では57%、18%、25%、0%とされる。藤守遺跡同様、計測点



第30図 藤守遺跡周辺の山茶碗窯

数が少ないため断定的なことは言えないが、坂尻遺跡では、渥美・湖西産が主体であり、時期が新しくなるにつれて知多産が増加している。渥美・湖西産の山茶碗が主体的に出土した福田町元島遺跡（加藤1999）からも新段階以降の山茶碗のなかに知多産を含む尾張系の山茶碗が多数認められる。当遺跡とは異なり、東遠江系の山茶碗が主体とはならないようである。

平成14年の報告書では、山茶碗の産地の選択には使用者の指向性の問題を提起したが、マクロ的に考えれば、渥美・湖西窯からの流通体制と供給量の変化が在地窯の操業に大きな影響を及ぼしているものと思われる。中段階以前の在地窯は、生産者と使用者が密接な関係にあり、小範囲の需要に応じた生産体制下にあり、余剰品が周辺の集落に流通していたものと思われる。新段階以降は渥美・湖西産製品の供給量が減少し、在地窯が生産量を増加させ、供給範囲を拡大したものと考えたい。

海岸沿いの集落に船便で遠隔地の製品が供給されることはある、容易に想像される。しかし、河川を利用した下流域への製品の供給は、海上輸送より安全で効率的であると思われる。やはり、在地製品への需要（指向性）が流通体制を整備させるまでには、初期の段階では至っていないかったものと思われる。

碗皿類以外にも鉢や壺・甕の破片も少數出土している。鉢は、胎土に大粒の白色石英やチャート岩片が多量に含まれていることから知多産のもので、壺・甕は渥美・湖西産とされるものが比較的多い。

知多産の鉢は平成12年度調査分も含めて4点ほど出土している。点数は少ないが、なぜ渥美・湖西産でないのか、別の地点に知多産の壺や甕なども多く存在するのか、今後の調査の進展に期待したい。

最後に編年的位置付けを検討しておきたい。藤守期の古～新段階は、中野編年（中野1994）の第2～5型式（12世紀後半～13世紀前半）、藤澤編年（藤澤1994）の第4～7型式（12世紀後半～13世紀中頃）に相当する。下限の相違は無高台の碗の捉え方の相違であり、文永三年銘（1266年）の蓋が出土した確率の高い岐阜県多治見市小滝9号窯では、無高台の碗は出土していない。正見（元）元年銘（1259～1260年）陶器が出土した愛知県武豊町中田池A-1号窯では、無高台の碗が一定量出土している。よって、13世紀の後半には無高台の碗の比率が増加するものと理解される。

西国産の山茶碗の形式変化とは直接対比することはできないが、おそらく、東遠江や西濃河で生産された山茶碗は、西国の製品の影響を多分に受けているものと考えられる。当遺跡では、無高台の碗の出土は少ないが、小皿の偏平化は新しい様相であり、牛岡遺跡（篠原1995）S X 3出土例を加味し、藤守期の下限は13世紀中頃としておきたい。

末筆ではあるが、産地の推定では河合修、佐野元、篠原修二、塙本和弘、中野晴久、増山禎之、松井一明、溝口彰啓の各氏にたいへんお世話になった。記して感謝したい。

表14 藤守遺跡出土山茶碗產地別数量一覧（溝口彰啓作成）

藤守遺跡1次（平成12年度調査区）

山 茶 碗				破片小計	破片數合計	個体數小計	個体數合計	
	器種	時 期	破 片	個体數				
東 遠 江	碗	I 期	2	2	425	109	202	
		II 期	29	10				
		III 期	113	84				
		破片	281	13				
江	小碗	I 期	6	3	6	3	90	
		破片						
	小皿	II 期	3	3	134	90		
		III 期	54	23				
湖西・ 渥美	碗	破片	77	64				
		I 期	3	3	38	19	19	
		II 期	5	5				
		III 期	14	11				
		破片	16					
尾張系	碗	知多4型式	3	1	3	3	1	

藤守遺跡2次（平成14年度調査区）

	器種	時 期	破 片	個体數	破片小計	破片數合計	個体數小計	個体數合計			
東 遠 江	碗	I 期	0	0	303	385	118	73			
		II 期	3	2							
		III 期	96	70							
		破片	204	1							
江	小碗	I 期	1	1	1	44	1	118			
		破片									
	小皿	II 期	2	2	81						
		III 期	45	42							
湖西・ 渥美	碗	破片	34	0	5	10	2	3			
		I 期									
		II 期									
		III 期	2	1							
		破片	3	1							
	片口碗	片口碗	5	1							

* 1 山茶碗の時期区分は東遠江、湖西・渥美産製品については松井一明氏編年（松井一明 1994「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会）、知多産製品については中野晴久氏編年（中野晴久 1994「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター）に準じている。本書第4章の柴田の編年とは対応しない。

* 2 時期認定が可能なものについてのみ時期別とした。それ以外については単に「破片」とした。

表15 東遠江系山茶碗 底部圧痕数一覧（溝口彰啓作成）

	スノコ痕	モミ痕
藤守I	22	6
藤守II	28	5
計	50	11

註

- (1) 柴田稔氏より御教示をいただいた。ただし、北西側は砂礫層でありプラン確認が困難であったため、柱痕のみを検出している可能性もある。
- (2) 凡例のなかで、平安時代末期を設定しているが、これは政治の象徴的事項による時代区分に対応させたもので、莊園制の変質と武士の胎動期に充てている。この平安時代末期における広域での変革の動きに対して、「藤守期」はより限定された地域での生産活動や集落構造の変化に関連した政治的、経済的な時期区分である。
- (3) 側柱建物跡の柱間間隔は、古墳時代中期169cm、奈良～平安時代前期178cm、平安時代末期～鎌倉時代219cmである。総柱建物跡は同じく187cm→183cm→231cmである。ちなみに側柱建物跡の柱穴掘り方の大きさ（長径平均値）は、古墳時代中期51.9cm、奈良～平安時代前期86.0cm、平安時代末期～鎌倉時代26.0cmである。総柱建物跡は同じく74.8cm→75.0cm→28.3cmである。この分析に用いた遺跡は古墳時代中期が浅羽町古新田遺跡（柴田稔1992）、奈良～平安時代前期が藤枝市御子ヶ谷遺跡（八木・磯部1981）、平安時代末期～鎌倉時代は当遺跡例である。根拠とした計測値は平均値であるが、特殊な構造の建物跡、時期的に問題のあるものや確実性に乏しいものは今回の計測からは除外した。
- (4) 塚本和弘氏より、菊川町でいくつか確認されているとの御教示をいただいた。
- (5) 増山植之氏より御教示いただいた。

引用・参考文献

- 浅井治平 1972『大井川とその周辺』いづみ出版
- 谷岡武雄 1973「大井川扇状地における散居集落—その起源と集落型の繼承性に関する若干の考察」『史林』56巻3号 京都大学史学研究会
- 原秀三郎 他 1980『静岡県歴史の道調査報告書－東海道－』静岡県教育委員会
- 八木勝行・磯部武夫 1981『日本住宅公園藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－奈良・平安時代編－』藤枝市教育委員会
- 濱谷昌彦 1983『旗指古窯跡』島田市教育委員会
- 大川敬夫 他 1984『飯田遺跡 大田切遺跡』清水市教育委員会
- 柴田 稔 1984『青木、馬場第1・2遺跡』浅羽町教育委員会
- 山下次郎 1984『大井川町史』上巻 大井川町
- 山崎克巳 1986『玉越遺跡』磐田市教育委員会
- 渡瀬 治 他 1989『富沢原・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞』裾野市教育委員会
- 渋谷昌彦・坂巻隆一 他 1990『宮上遺跡・尼沢遺跡』島田市教育委員会
- 宮本長二郎 1991『弥生時代・古墳時代の堀立柱建物』『第29回埋蔵文化財研究会報告』埋蔵文化財研究会
- 柴田 稔 1992『古新田Ⅰ』浅羽町教育委員会
- 石上英一 1994『初倉荘の成立』『静岡県史』通史編1 静岡県
- 山中敏史 1994『古代郷里比定地一覧』『静岡県史』通史編1 静岡県
- 大塚淑夫 1996『原始古代のはずくら』『古代末から中世の初倉』『島田風土記ふるさと初倉』島田市教育委員会
- 塚本和弘 1993『皿山古窯跡群の成立と終末について』『向坂鏡二先生還暦記念論文集』
- 栗原雅也 1993『久保船渡遺跡』細江町教育委員会
- 松井一明 1993『遠江における山茶碗生産について－遠江の山茶碗研究Ⅰ－』『静岡県考古学研究』No25 静岡県考古学会
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1993『東海の中世窯－生産技術の交流と展開－』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

- 中野晴久 1994 「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 篠原修二 1995 「牛岡I遺跡・頭地遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 中鉢賢治 1995 「石成遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 松井一明 1995 「坂尻遺跡—遺物・総括編—」袋井市教育委員会
- 伊藤裕偉 1996 「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と壺そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 北村和宏 1996 「尾張の伊勢型鍋」『鍋と壺そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 篠ヶ谷路人 1996 「青木原遺跡」島田市教育委員会
- 嶋野雄康 1997 「向山遺跡」島田市教育委員会
- 丸杉俊一郎 1997 「丸山古窯跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木良孝 1998 「川合遺跡志保田地区」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 福垣聖二 1999 「古代末期の方形屋敷跡の発見—静岡空港関連遺跡C・O・J地点ー」『静岡県埋蔵文化財調査研究所年報IV』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 加藤理文 1999 「元島遺跡I」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 塚本和弘 1999 「林光寺遺跡」菊川町教育委員会
- 塚本和弘 他 2000 「横地域跡 総合調査報告書 資料編」菊川町教育委員会
- 青木 修 2001 「矢崎遺跡II」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 河合 修 2001 「青灰色のうつわ」『研究紀要』第8号 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 篠ヶ谷路人 2001 「中原遺跡・宮上遺跡」島田市教育委員会
- 長谷川睦 2001 「領家遺跡II・梅橋古墳」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 池谷初恵 2002 「静岡県東部地域の中世集落」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 井鍋誓之 2002 「勝田井の口遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 勝又直人 2002 「中原遺跡・宮裏遺跡」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 河合 修 2002 「中世集落の地域性（駿河国）」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 松井一明・溝口彰啓 2002 「中世集落の地域性（遠江国中・東部）」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 丸杉俊一郎 2002 「中世集落の地域性（遠江国西部）」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 加藤芳朗 2002 「藤守遺跡の自然的立地条件」『藤守遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 柴田 瞳 2002 「平安時代末期から鎌倉時代の土器について」『藤守遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 溢谷昌彦 他 2002 「山王前遺跡」島田市教育委員会

付編1 藤守遺跡の古植生について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

藤守遺跡（静岡県志太郡大井川町に所在）周辺の地形は、現大井川河道に沿って扇状地が発達し、駿河湾沿いに砂堤列が形成され、砂堤列と大井川扇状地の間に低地が形成されている。本遺跡は、大井川左岸の河口近く、大井川扇状地と海岸部の低地の境界部に位置するとされる（加藤、2002）。これまでの発掘調査により、古墳時代～奈良時代、平安時代末～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が検出される、集落遺跡であることが明らかにされている。今回の発掘調査区では、中世（12世紀後半～13世紀中頃の包含層）の遺物や土坑・井戸跡・溝跡などが検出されており、集落の継続期間は短かったと考えられている。今回の分析調査では、当時の本遺跡周辺の古環境や耕作地などの土地利用の変遷に関する情報を得るために、植物珪酸体分析・花粉分析を実施する。

1. 試料

花粉分析を行う試料は、13世紀前半に埋没したとされる井戸跡（SE5）の上層と下層から採取された2点（試料F・G）、13世紀前半とされる区画溝（SR1）の確認面と下層から採取された2点（試料H・I）の合計4点である。なお、SR1の確認面は、基本土層の6層に相当するとされている。

一方、植物珪酸体分析を実施する試料は、調査区南東側、Cライン東壁の基本土層から採取された。本遺跡の層序は、最下部に砂礫層が認められ、その上位が1層～25層まで分層されている（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、2002）。試料採取地点では、8層～4層・2層・1層が確認されている。この内、6層が12世紀後半～13世紀中頃の包含層、5層が中世？、4層が近世？、1層が近・現代の水田層とされている。試料は1層・4層～7層の各層から1点ずつ、計5点（試料A～E）が採取された。

2. 分析方法

（1）花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトトリル処理（無水酢酸：濃硫酸=9:1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン（-）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（2）植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古

植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表1、図1に示す。検出される花粉化石は、全体的に保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっている、壊れたりする。また、試料F・G・Iの3試料では、花粉化石の検出個数も少ない。

試料Hでは、統計的に扱うに十分な量の花粉化石が検出される。木本花粉では、コナラ亜属アカガシ亜属が最も高率に出現し、次いでマツ属(複維管束亜属を含む)が多産する。この他、ツガ属、スギ属、ヤマモモ属、クマシデ属ーアサグ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属などを伴う。

一方、草本花粉の出現傾向は、総花粉・胞子数に対する木本花粉の占める割合が約55%と高率である。その中でもイネ科の多産が顕著であり、この他にガマ属、オモダカ属、カヤツリグサ科、サンエタデ節ーウナギツカミ節、ソバ属、キンポウゲ科、ナデシコ科、キカシグサ属、オオバコ属、ヨモギ属、ミズワラビ属などを伴う。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、その保存状態は良好である。ただし、試料Eおよび試料Dでは、検出個数が少なく、不明短細胞珪酸体と不明機動細胞珪酸体が認められる程度である。なお、試料Dでは、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体や穎珪酸体もわずかに検出される。

試料C(5層)～A(1層)では、比較的豊富に植物珪酸体が検出される。植物珪酸体群集は、3試料とも類似しており、イネ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の産出が目立つ。この中には短細胞列や機動細胞列も認められる。また、稲糲に形成される穎珪酸体も検出される。この他には、タケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、スキ属、イチゴツナギ亜科もわずかに認められる。

表1 花粉分析結果

種類	試料番号	SE 5		SR 1	
		F	G	H	I
木本花粉		—	—	2	—
マキ属		—	—	7	—
ツガ属		—	—	1	1
トウヒ属		—	—	1	1
マツ属単維管束亜属		—	—	17	2
マツ属複維管束亜属		—	1	28	1
マツ属(不明)		—	—	2	—
コウヤマキ属		—	—	3	—
スギ属		—	—	10	—
イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科		—	—	—	—
ヤマモモ属		—	—	14	—
クルミ属		—	—	2	—
クマシデ属ーアサグ属		1	—	6	3
ハンノキ属		—	—	5	—
ブナ属		—	—	12	—
コナラ属コナラ亜属		—	—	13	—
コナラ属アカガシ亜属		—	—	87	2
クリ属		—	—	1	—
シノキ属		—	—	10	2
ニレ属ーカヤキ属		—	—	2	—
エノキ属ームクノキ属		—	—	1	—
アメガシマツ属		—	—	1	—
ニシキギ属		—	—	2	—
トチノキ属		—	—	1	—
ツタ属		—	—	2	—
シナノキ属		—	—	1	—
グミ属		—	—	1	1
ウコギ科		—	—	2	—
ハイノキ属		—	—	1	—
イボクノキ属		—	—	2	—
草本花粉		—	—	—	—
ガマ属		—	—	7	—
オモダカ属		—	—	3	—
イネ科		4	—	316	3
カヤツリグサ科		—	—	33	1
イボクサ属		—	—	1	—
クワ科		—	—	4	1
サンエタデ節ーウナギツカミ節		—	—	12	—
ソバ属		—	—	5	—
アカザ科		—	—	3	—
ナデシコ科		—	—	13	—
キンポウゲ属		—	—	6	—
キンポウゲ科		—	—	4	—
アブラナ科		—	—	5	—
バラ科		—	—	4	—
メメ科		—	—	2	—
フウォッソ属		—	—	1	—
カシカシグサ属		—	—	16	1
セリ科		—	—	7	—
オオバコ属		—	—	2	—
ヨモギ属		—	—	36	2
キク科		—	—	6	—
クンボボ属		—	—	10	—
不明花粉		—	—	12	—
シグ頸胞子		—	—	2	—
ミズワラビ属		—	—	2	—
シグ頸胞子		29	10	192	57
合計					
木本花粉		1	1	237	12
草本花粉		4	0	496	8
不明花粉		0	0	12	0
シグ頸胞子		29	10	194	57
総計(不明を除く)		34	11	927	77

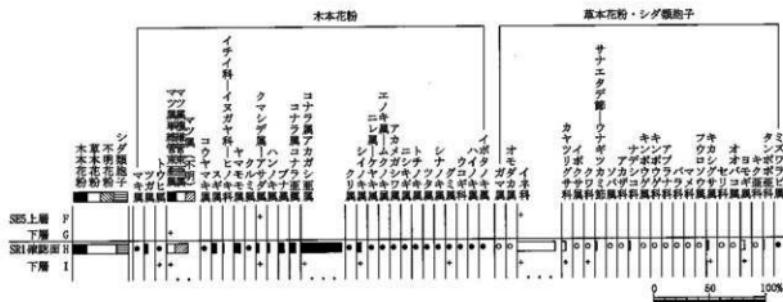


図1 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

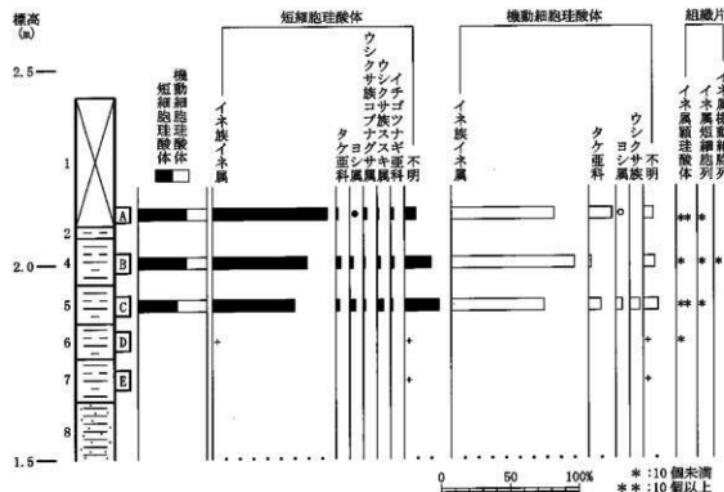


図2 植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は100個体未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

4. 考察

13世紀前半とされる区画溝(SR1)の遺構確認面では、アカガシ属が高率に産出し、次いでマツ属が検出される花粉化石群集が認められる。アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素である。この他にも、常緑広葉樹林の構成要素となるシノキ属、また暖温帯に分布する種類を含むヤマモモ属・アカメガシワ属・グミ属・ハイノキ属などが検出される。これらのことから、13世紀前半頃、周辺はアカガシ亜属を中心とした暖温帯林が形成されており、この他にもツガ属・スギ属などの温帶性針葉樹、クマシデ属ーアサガ属・コナラ亜属などの落葉広葉樹も当時の森林構成種として存在していたと推定される。また、マツ属(複管束亞属を含む)が比較的多く検出されることから、ニヨウマツ類からなる林分も存在していたと考えられる。マツ属は、植生が破壊された後に成立する、代償植生を形成する代表的な先駆植物である。時代的な背景も考慮すると、このマツ林は、人間の植生干渉が著しくなったために成立した二次林と推定される。

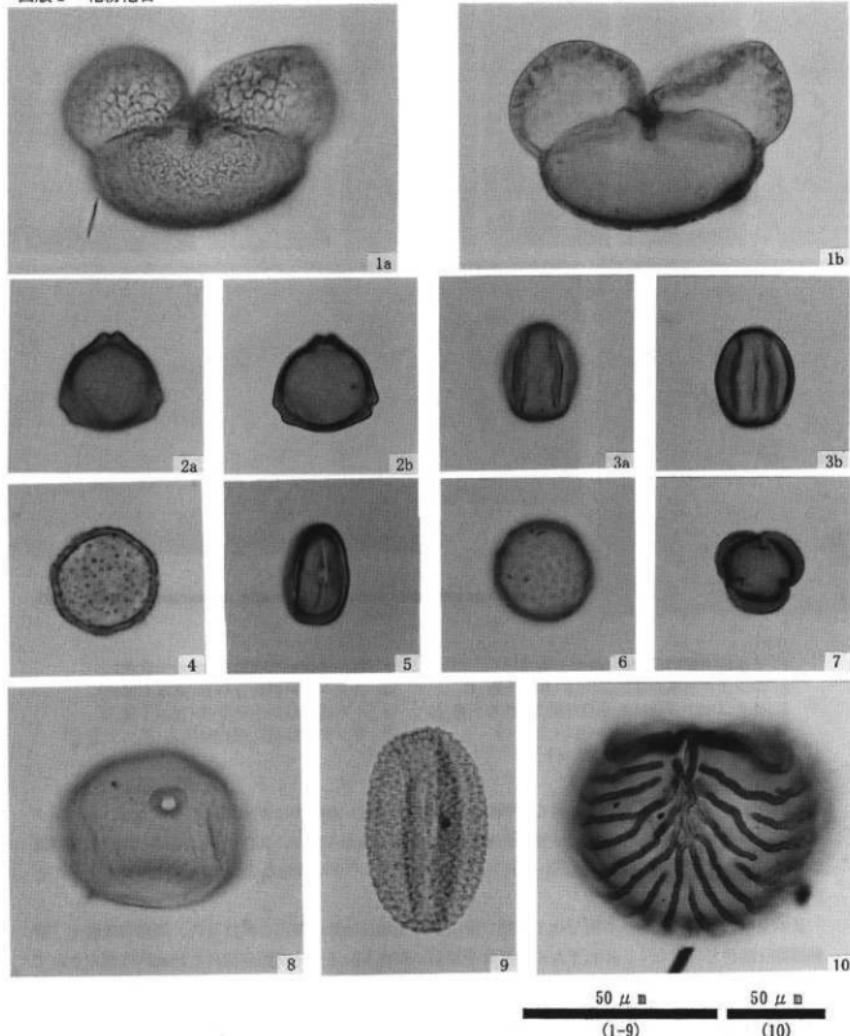
本遺跡では、既に古墳時代後期と鎌倉時代に形成された河道埋積物について花粉分析が行われており、その結果によると、古墳時代頃に常緑広葉樹と温帶性針葉樹からなる暖温帯林が成立していたが、鎌倉時代になるとマツ林が増加したと考えられた(パリノ・サーヴェイ株式会社、2002)。今回の結果と比較すると、ツガ属とアカガシ亜属の出現率が大きく異なる。このような違いは、花粉化石群集の形成過程の違いによるものと推測されるが、さらに資料を蓄積していく必要がある。ところで、袋井市域で行われた古墳時代～奈良・平安時代前後とされる層準の花粉分析結果では、今回本遺跡で得られた花粉化石群集と同様にアカガシ亜属を中心とするものである(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、2000; 株式会社古環境研究所、2000a, 2000b)。しかし、静岡・清水平野で行われた花粉分析結果(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社、1990a, 1994, 1995a, 1995b: 安田, 1983, 1990など)では、縄文時代後晩期以降から中近世までアカガシ亜属とともにスギ属が多産している。また、沼津市域でも、弥生時代～古墳時代にかけてスギ属が多産している(パリノ・サーヴェイ株式会社、1990b: 松原, 1990)。これらのことから、静岡県沿岸部では、基本的に常緑広葉樹林が成立していたが、駿河湾東部地域、おそらく安倍川流域周辺を境とし、その東側ではスギを中心とする暖温帯林が成立していたと推測される。このような地城的な植生の差には、気候・地形・土地の因子など様々な要因が関連していると思われ、今後も検討を重ねていきたいと考えている。

一方、総花粉・胞子数に対して木本花粉の占める割合が低いこと、灌木類のアカメガシワ属・イボタノキ属やツル性木本類のツク属など、林縁部の植生を形成する種類も併せて検出されている点から、本遺跡の近くまで森林が迫っていたとは考えにくい。むしろ、本遺跡の周辺は、開けた草地のような状態であったと考えられる。このような場所には、イネ科を中心とした植生であったと考えられる。なお、この時期、すなわち区画溝(SR1)の確認と対比される基本土層6層、その下位の7層では、植物珪酸体の検出個数が極めて少ないとから、イネ科植物相について詳細な検討が不可能である。この他、付近では、カヤツリグサ科、サンエクダ節ーウナギツカミ節、ナデシコ科、オオバコ属、ヨモギ属などの

表2 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	A	B	C	D	E
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	218	186	137	4	—	—
タケ亜科	4	10	6	—	—	—
ヨシ属	2	7	10	—	—	—
ウシクサ族コブナグサ属	7	3	4	—	—	—
ウシクサ族スキ属	3	6	11	—	—	—
イチゴツナギ亞科	5	6	3	—	—	—
不明キビ型	11	27	32	11	1	—
不明ヒゲサ型	10	12	12	2	—	—
不明グンサク型	1	13	14	5	—	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	83	105	118	—	—	—
タケ亜科	19	2	16	—	—	—
ヨシ属	1	—	8	—	—	—
ウシクサ族	—	—	13	—	—	—
不明	8	10	19	2	1	—
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	261	270	229	22	1	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体	111	117	174	2	1	—
総計						
粗 粒 片						
イネ属網状珪酸体	16	7	24	1	—	—
イネ属短細胞列	5	3	5	—	—	—
イネ属機動細胞列	—	2	—	—	—	—

図版1 花粉化石



1. マツ属複維管束亞属(SR1;H)
3. コナラ属アカガシ亞属(SR1;H)
5. キカシグサ属(SR1;H)
7. ヨモギ属(SR1;H)
9. ソバ属(SR1;H)

2. ヤマモモ属(SR1;H)
4. オモダカ属(SR1;H)
6. オオバコ属(SR1;H)
8. イネ科(SR1;H)
10. ミズワラビ属(SR1;H)

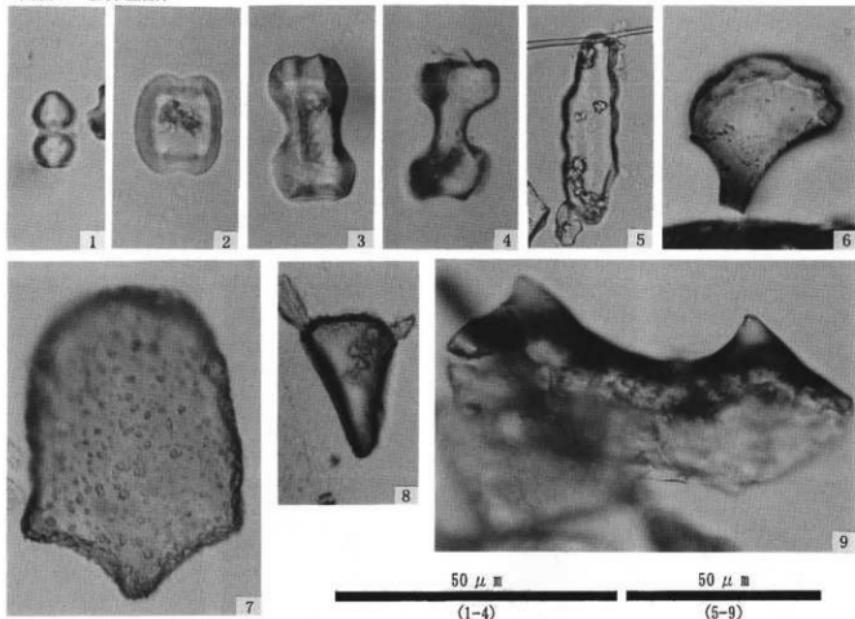
50 μm

(1-9)

50 μm

(10)

図版2 植物珪酸体



- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(基本土層;C) | 2. ヨシ属短細胞珪酸体(基本土層;C) |
| 3. コブナグサ属短細胞珪酸体(基本土層;A) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(基本土層;C) |
| 5. イチゴツナギ科短細胞珪酸体(基本土層;B) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(基本土層;C) |
| 7. ヨシ属機動細胞珪酸体(基本土層;C) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(基本土層;C) |
| 9. イネ属頸珪酸体(基本土層;C) | |

人里植物と呼ばれるような種類を含む分類群が、溝沿いの湿った場所にガマ属、オモダカ属、キカシグサ属、ミズワラビ属などの水湿地性植物が生育していたと考えられる。また、畑作植物とされるソバ属が検出されていることから、区画溝(SR1)の周辺においてソバ栽培などの畑作が行われていたことが推定される。

基本土層の5層・4層・1層ではイネ属に由来する植物珪酸体が豊富に検出され、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体だけでなく、それぞれの組織片や稈軸に形成されるイネ属頸珪酸体も特徴的に検出されている。植物珪酸体の動態研究によると、水田土壤表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が9%、稲藁堆肥連用(8年間、500kg/10a/年)された水田土壤表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示すとされている(近藤、1988)。本層準のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、60%以上であり、上記の調査例と比べると極めて高いと言える。このことから、これらの3層準が畑作地として利用されていたと考えられる。すなわち、中世?(13世紀中頃以降)以降近現代まで、本遺跡付近は水田として利用されていた可能性が高い。これらの点については、今後、考古学的・文献史学的な調査成果も併せて総合的に検討を行っていきたい。

引用文献

- 加藤芳朗（2002）藤守遺跡の自然的立地条件。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第131集「藤守遺跡 平成12年度（主）焼津棟原線緊急地方道道路改築（B）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」、p.216-217、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 株式会社古環境研究所（2000a）恒武西宮遺跡・山ノ花遺跡における自然科学分析。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第120集「恒武西宮・西浦遺跡 平成8～10年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.107-126、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 株式会社古環境研究所（2000b）恒武西浦遺跡における自然科学分析。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第120集「恒武西宮・西浦遺跡 平成8～10年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.127-137、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 近藤鍊三（1988）十二遺跡土壤の植物珪穀体分析。「鉢師屋遺跡群 十二遺跡－長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一」、p.377-383、御代田町教育委員会。
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪穀体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-64。
- 松原影子（1990）雌鹿塚遺跡周辺における自然環境の変遷。沼津市文化財調査報告書第51集「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書 I 遺構編 一狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」、p.171-215、沼津市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1990a）花粉分析報告。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第25集「川合遺跡（遺構編） 平成元年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書本文編」、p.229-235、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1990b）雌鹿塚遺跡の自然科学分析結果。沼津市文化財調査報告書第51集「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書 I 遺構編 一狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」、p.153-170、沼津市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1994）長崎遺跡における古環境。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第49集「長崎遺跡（遺構編）平成4年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.70-91、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1995a）瀬名遺跡の縄文時代後・晩期以降の古環境変遷。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第61集「瀬名遺跡IV（自然科学編）静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書4」、p.69-210、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1995b）縄文時代後・晩期以降の古環境変遷。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第63集「川合遺跡八反田地区II（本文編）平成3・4年度県営住宅南沼上団地建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.195-284、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（2000）恒武西浦遺跡の古環境変遷。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第120集「恒武西宮・西浦遺跡 平成8～10年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.138-155、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（2002）藤守遺跡の自然科学分析。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第131集「藤守遺跡 平成12年度（主）焼津棟原線緊急地方道道路改築（B）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」、p.182-191、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 安田喜憲（1983）静岡県有東遺跡の泥土の花粉分析。静岡県文化財調査報告書第28集「有東遺跡（静岡南警察署建設用地内埋蔵文化財調査報告書）I」、p.63-67、静岡県教育委員会。
- 安田喜憲（1990）静岡県川合遺跡の泥土の花粉分析。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第25集「川合遺跡（遺構編）平成元年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書本文編」、p.201-227、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（2002）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第131集「藤守遺跡 平成12年度（主）焼津棟原線緊急地方道道路改築（B）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」、217p

付編2 藤守遺跡および関連遺跡出土土師器甕の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

静岡県大井川町に所在する藤守遺跡は、大井川扇状地の末端に形成された低地上に位置する。これまでに行われた発掘調査により、古墳時代から古代にわたるとされる須恵器や土師器などの土器が多量に出土している。その中で、7世紀後半から8世紀前半のものとされる土師器の甕は、形態分類と分布論から注目されている土器の一つである。この時期の土師器甕には、平底長胴で口縁部が断面「コ」字状に開く薄手のものと、球胴で口縁部が断面「く」字状に開く厚手のものとが存在し、前者は遠江型、後者は駿東型と呼称されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所、2002）。発掘調査所見では、これらの甕は、肉眼で観察される胎土の特徴も明瞭に異なっていることから、いずれも在地で作られたものではなく、交易品として持ち込まれた可能性があるとされている。

今回の分析調査では、これらの土師器を対象として胎土分析を行い、胎土の地質学的および技法的な特徴を明らかにすることで、上記の課題に対する資料を作成することを目的とする。

1. 試料

試料は、藤守遺跡から出土した7世紀後半～8世紀とされる土師器甕の土器片と、静岡県内各地の遺跡から出土したほぼ同時期の土師器甕の土器片計15点である。各試料は、発掘調査所見として、遠江系と駿河系の2系統に分類されている。各試料の試料名、出土地の流域河川、出土遺跡などを一覧にして表1に示す。

表1 分析試料一覧

試料	流域	遺跡名	遺構名	時期	器種	系統	胎土
A	都田川下流			8世紀	土師器甕	遠江	I a
B	都田川	祝田	SD40	8世紀	土師器甕	遠江	I b
C	天竜川	恒武西浦	SR16	8世紀	土師器甕	駿河	II a
D	天竜川	恒武西浦	SR30	8世紀	土師器甕	遠江	I a
E	太田川	新堀	SD305	8世紀	土師器甕	遠江	I a
F	逆川	頭地	SX02	8世紀	土師器甕	遠江	I c
G	大井川	藤守	SP 7	7世紀後半	土師器甕	駿河	II a
H	欠番						
I	大井川	藤守	SX 6	8世紀	土師器甕	遠江	I a-c
J	大井川	藤守	SX 6	8世紀	土師器甕	駿河	II a
K	安倍川	川合志保田	SC02	8世紀	土師器甕	駿河	II b
L	安倍川	川合志保田	SC02	8世紀	土師器甕	遠江	I c
M	富士川	東平	4-4住	8～9世紀初頭	土師器甕	駿河	II b
N	黄瀬川	的場	SB 6	8～9世紀初頭	土師器甕	遠江	I c
O	黄瀬川	的場	SB 4裏内	8世紀	土師器甕	駿河	II c
P	狩野川	仲道	旧河道	7・8世紀	土師器甕	駿河	II d

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。土師器のように比較的粗粒の砂粒を含む土器胎土の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物および岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析で対象とする土師器も、同一の地質分布範囲内で作られた

可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法によりプレパラート全面で計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、孔隙・砂粒・基質の割合、砂粒の粒径組成を求めた。同時に、珪藻化石・植物珪酸体などの微化石についても同様の方法で同定・計数を行った。

3. 結果

分析結果を表1に示す。この結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度を棒グラフにして図1に示し、孔隙・砂粒・基質の割合を図2、砂粒の粒径組成を図3に示す。これらの結果から、今回の試料は、大きく2つのグループに分類され、さらに、粒径組成などから各グループともに3～4の小グループに細分することができる。以下に各グループについて述べる。

・I類

鉱物片では、石英を主体とし、中量～少量のカリ長石、斜長石を伴い、少量～微量の黒雲母、緑レン石、不透明鉱物を含む。岩石片では、チャート、多結晶石英、花崗岩類、結晶片岩を少量～微量含む。胎土中における砂粒の量は、30～40%を示し、後述するII型よりも多い。これに分類される試料は、系統分類で遠江系とされた試料と完全に一致する。砂粒の粒径組成により、Ia～Icに細分される。

Ia：モードは中粒砂であり、次いで細粒砂、粗粒シルト、極細粒砂の順に多い。粗粒砂や中粒シルトは少量であり、極粗粒砂を含まない。試料A、D、Eがこれに分類される。

Ib：モードは粗粒シルトであるが、中粒砂～粗粒シルトまであまり差はない。粗粒砂や中粒シルトは少量であり、極粗粒砂を含まない。試料Bが、これに分類される。

Ic：細粒砂をモードとする山形を呈する。細粒側の裾野の方がややなだらかである。試料F、L、Nがこれに分類される。なお、本類では、結晶片岩の量比が高い傾向がある。

なお、試料Iは、Ia類とIc類を混合させたような粒径組成を示すので、Ia-c類とする。

・II類

鉱物片では、斜長石を主体とし、少量の石英を伴い、試料によっては少量～微量のイディングサイト（風化カンラン石）と角閃石を含む。カリ長石は、ほとんどの試料で含まれない。胎土中における砂粒の量は、20%前後であり、上述のI類に比べて少ない。これに分類される試料は、系統分類で駿河系とされた試料と完全に一致する。砂粒の粒径組成により、IIa～IIdに細分される。

IIa：モードは粗粒砂～細粒砂のうちのいずれかであるが、この範囲で砂粒のほとんどを占め、極細粒砂以下は少量である。また少量の極粗粒砂も含む。試料C、G、Jがこれに分類される。

IIb：モードは粗粒砂または中粒砂であるが、粗粒シルトに第二のピークが認められる。少量の極粗粒砂を含む。試料K、Mがこれに分類される。

IIc：細粒砂に明瞭なピークが認められる山形を呈する。極粗粒砂は含まれない。試料Oがこれに分類される。

IId：粗粒砂に明瞭なピークが認められるが、中粒砂から中粒シルトにかけては緩やかな傾きである。また、少量の極粗粒砂を含む。試料Pがこれに分類される。

なお、II類では、細分されたグループ内でも軽石や安山岩および玄武岩などの岩石片の量比が異なつ

表2 薄片観察結果(1)

試 料	粒 度 分 区	砂 粒 の 片 物													成 岩			結 晶 組 合 体		
		全 物			片 物			片 物			成 岩			片 物			結 晶 組 合 体			
		石 英 砂	長 石 砂	斜 長 石 砂	白 雲 母 砂	黑 云 母 砂	绿 泥 石 砂	绿 泥 石 片	合 計											
A 砂	粗 粒 砂	2	1															0		
	粗 粒 砂	13	3	4		1		2										0		
	中 粒 砂	10	4	7		1		2		4	10						5			
	细 粒 砂	10	3	4		1		1		3							41			
	粗 粒 シルト	6	6	4		2		1		2							20			
	细 粒 シルト	2	2	1						1							6			
	基 質																303			
	孔 隙																15			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
B 砂	粗 粒 砂	2															2			
	粗 粒 砂	17	9					1		3							33			
	中 粒 砂	27	1	6		1		3		4							45			
	细 粒 砂	25	5	7				3			1	1					43			
	粗 粒 シルト	30	7	11				1		2							51			
	细 粒 シルト	15	4	2						1							21			
	基 質																362			
	孔 隙																25			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
C 砂	粗 粒 砂	3	4	1						1		1	1	1	1		4			
	粗 粒 砂	11	1						1								24			
	粗 粒 砂	1	5	1	1				1	4		1	2	2	4		22			
	细 粒 砂	4								4		1	1	3			21			
	细 粒 シルト	3								4		1	2				9			
	中 粒 シルト	2								1							3			
	基 質	風化粒子は鈣石記部が主。																440		
	孔 隙																23			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
D 砂	粗 粒 砂	4	1	2						1							11			
	中 粒 砂	17	2	14					1	5	1	4		2	6	1	57			
	细 粒 砂	22	6	6					1	5		2					43			
	细 粒 シルト	17	6	6					3	1	1						29			
	中 粒 シルト	17	5	6					1		1						30			
	基 質																14			
	孔 隙																330			
	粘 土																23			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
	基 質	結晶片岩は鈣石記部																0		
E 砂	粗 粒 砂	1	1	1						2							0			
	粗 粒 砂	15	5	6					1	2	1						9			
	中 粒 砂	12	2	6					1	2	2						26			
	细 粒 砂	10	2	2					1		1						18			
	细 粒 シルト	15	3	5						1	2						23			
	中 粒 シルト	2	2	4													340			
	基 質																19			
	孔 隙																0			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
F 砂	粗 粒 砂	1	1	1						1							6			
	粗 粒 砂	16	8	2					5		2						36			
	粗 粒 砂	29	8	5		2		1	3	3	2						51			
	细 粒 砂	22	1	7					2								34			
	粗 粒 シルト	16	4	5					1	2							25			
	中 粒 シルト	7	3	5													15			
	基 質																446			
	孔 隙																30			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
G 砂	粗 粒 砂	5	10							1	9	1		1	4		31			
	中 粒 砂	4	9	1					1	12	1	1			4		33			
	细 粒 砂	6	5	1					1	1	7						19			
	细 粒 シルト	5	6	6					1		1						12			
	中 粒 シルト	4	3														7			
	基 質	風化粒子は鈣石記部																476		
	孔 隙																38			
	粘 土																0			
	硫酸 カル ボニ チル ド																0			
	基 質	結晶片岩は鈣石記部																332		
	孔 隙																32			

表2 薄片観察結果(2)

試 料	粒 度 分	砂 粒 の 様 形 成 分														合 計		
		粒 度 分	底 部 片	中 部 片	上 部 片	不 規 則 物	ナ イ ル ト	真 岩	板 岩	雲 母 岩	ガ ラ ス 岩	安 山 岩	石 英 岩	片 英 岩	多 結 晶 岩	苦 鉱 岩	純 基 岩	火 山 ガ ラ ス
		石英 砂	長 石 砂	長 石 英 砂														
J	細粒砂																0	
	粗粒砂																3	
	粗粒砂	12															20	
	中粒砂	11		2													16	
	粗粒砂	3		1													23	
	粗粒砂	1		5													11	
	粗粒シルト	4															6	
	中粒シルト	1															2	
	粗粒シルト																40	
	中粒シルト																30	
注記 安山岩としたものには玄武岩の可能性あり。																		
K	細粒砂																0	
	粗粒砂	1															8	
	粗粒砂	5	2	1													25	
	中粒砂	8	1	3													25	
	粗粒砂	2	1	2	1												15	
	粗粒砂	1	10														18	
	粗粒シルト	7															2	
	中粒シルト	3															6	
	基質																645	
	孔隙																35	
L	細粒砂																0	
	粗粒砂	2	1	3													11	
	粗粒砂	14	5	5													41	
	中粒砂	15	11		1	1											45	
	粗粒砂	11	7	5		2	1	3									30	
	粗粒シルト	7	6	4													8	
	中粒シルト	4	12	2													342	
	基質																13	
	孔隙																0	
	粗粒砂																0	
M	細粒砂	2	3														4	
	粗粒砂	14	1	4													18	
	中粒砂	1	2	1													22	
	粗粒砂	1	1	3	2												8	
	粗粒砂	5	2	4													15	
	粗粒シルト	6															14	
	中粒シルト	5															2	
	基質																665	
	孔隙																43	
	粗粒砂																0	
N	細粒砂	2	1	3													15	
	粗粒砂	9		5													19	
	中粒砂	14	1	4		1	2										28	
	粗粒砂	5	2	6													10	
	粗粒シルト	3	2	4													5	
	中粒シルト	1	2	2													252	
	基質																15	
	孔隙																0	
	粗粒砂																0	
	粗粒砂	1	2														8	
O	細粒砂	1	4														14	
	粗粒砂	2	2	6	2												34	
	粗粒砂	7	3	11	1												26	
	粗粒シルト	3	1	7													15	
	中粒シルト	1	2														4	
	基質																383	
	孔隙																25	
	粗粒砂																0	
	粗粒砂	2	3														6	
	中粒砂	1	1														23	
P	細粒砂	1	3	1													19	
	粗粒砂	1	2	1													16	
	粗粒砂	2	2	1													9	
	粗粒シルト	2	2	2													3	
	中粒シルト	2															502	
	基質																42	
	孔隙																0	

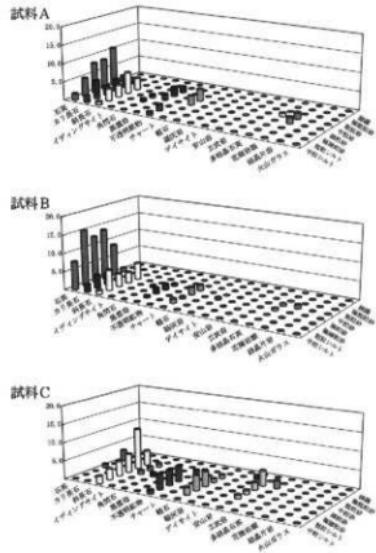


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

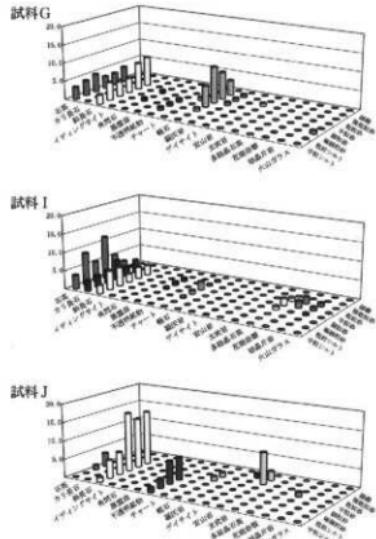


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（3）

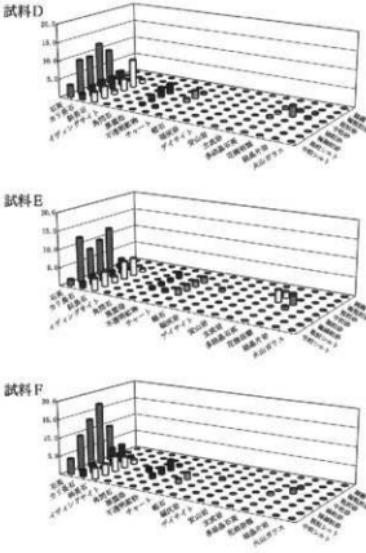


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

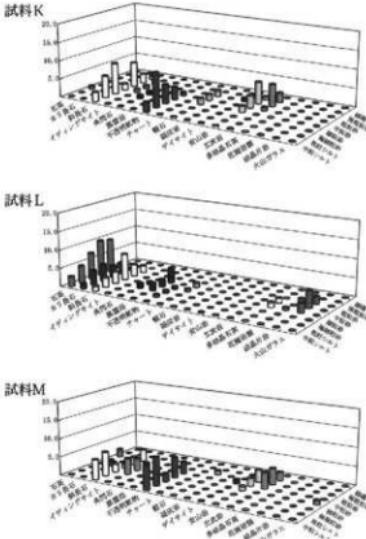


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（4）

ているが、現時点では、組成のばらつきを判断できないことから、これに基づいたグループの細分は行わない。

また同時に行った微化石同定では、植物珪酸体が試料B・F・J・K・M・N・O・Pで確認されたが、他の試料を含め珪藻化石など他の微化石は検出されなかった。検出された植物珪酸体は、いずれも細部の観察がしにくく多くの多く、試料Kでイネ属に類似する1個体が確認された以外、すべてタケ亜科に類似するものであった。

4. 考察

(1) I類とII類の地域性について

結果に示したように、遠江系と駿河系に分類された試料は、胎土の特徴からもI類とII類に明瞭に分類された。I類とII類の分類基準となった鉱物片および岩石片の種類構成の違いは、その胎土を構成する砂や粘土の採取地における地質学的背景の違いを示唆する。すなわち、I類の土器とII類の土器とは、異なる地質を背景に持つ地域でそれぞれ製作された土器である可能性が高い。

ここで、I類の鉱物片のうち、石英、カリ長石、斜長石および角閃石、黒雲母、不透明鉱物などは、岩石片に花崗岩類が見られることから、いずれも花崗岩類の岩石に由来すると考えられ、緑レン石は、岩石片に結晶片岩が認められることから、緑色片岩などの変成岩類に由来すると考えられる。一方、I類の岩石片の種類構成からは、チャートの存在から中・古生層の堆積岩からなる地質が推定され、これに花崗岩類からなる地質と結晶片岩からなる変成岩帶の地質が推定される。次にI類が遠江系という分類と一致することから、遠江すなわち静岡県西部地域の地質学的背景を日本の地質「中部地方I」編集委員会(1988)などにより概観する。例えば天竜川沿いに上流へ向かうと、

まず右岸側の愛知県境をなす山地は、秩父帯と呼ばれる中・古生層と三波川帯とよばれる主に結晶片岩からなる変成岩帯が分布し、左岸側の山地は四万十帯と呼ばれる主に中生代の堆積岩類からなる地質が分布する。さらに上流の伊那盆地を取り巻く山地は、領家帯と呼ばれる花崗岩類からなる地質により構成されている。以上のことから、I類から推定される地質学的背景と静岡県西部地域特に天竜川流域の地質学的背景とはよく一致する。見方を変えれば、I類のような鉱物片・岩石片組成を持つ碎屑物は、上述のような地質を全て流域に持つような河川により形成された堆積物に由来するが、そのような河川

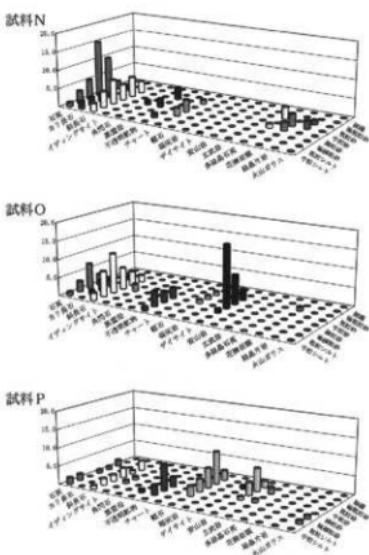


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (5)

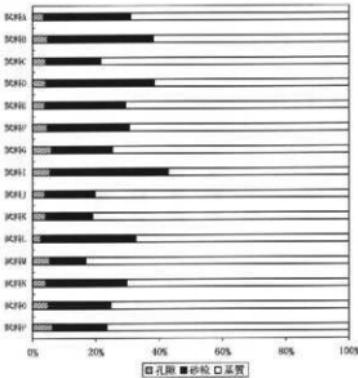


図2 孔隙・砂粒・基質の割合

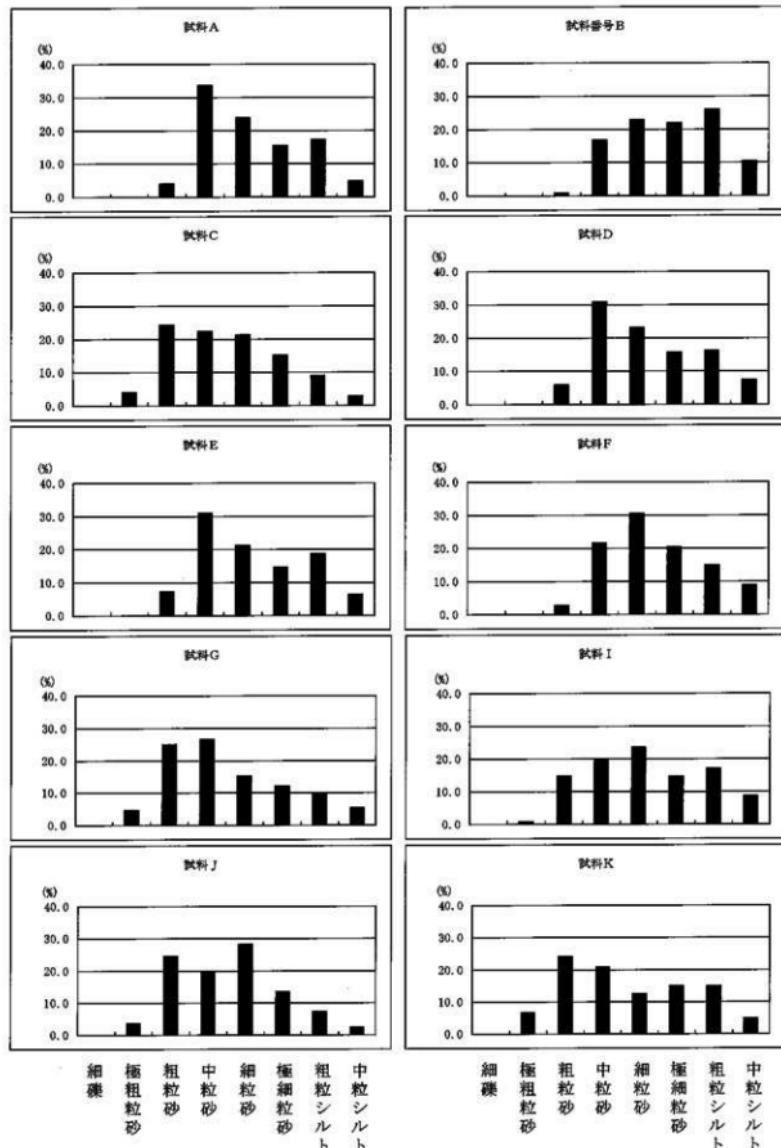


図3 (1) 胎土中の砂の粒径組成

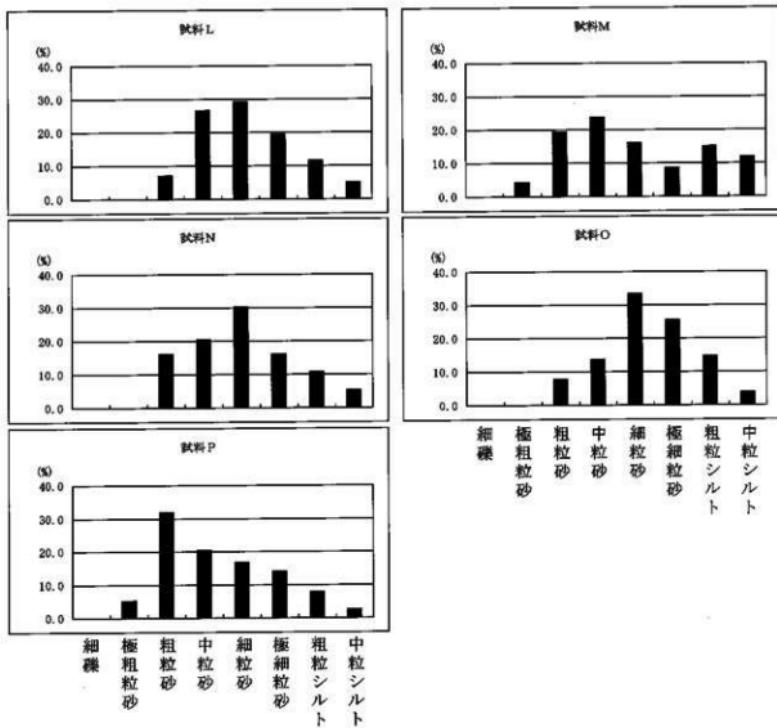
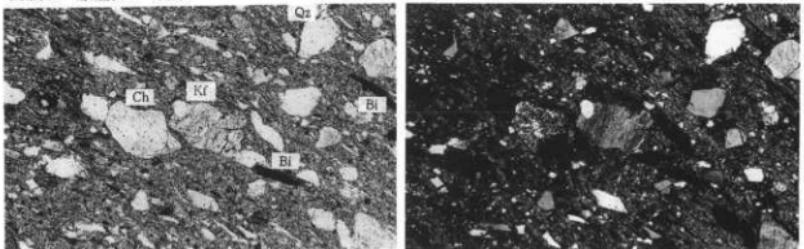


図3 (2) 胎土中の砂の粒径組成

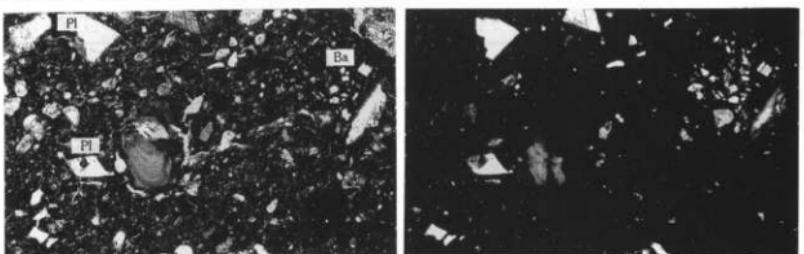
は静岡県および周辺域では天竜川と豊川以外には認められない。したがって、I類の胎土は、天竜川流域および天竜川によって形成された堆積物が分布する静岡県西南部地域に由来する可能性が高い。今回の試料出土流域で言えば、都田川、天竜川、太田川、逆川までの流域では、I類のような鉱物片・岩石片組成が認められると考えられる。

II類の鉱物片の大きな特徴は、カリ長石をほとんど含まず、かつ斜長石が卓越することである。これは、II類の由来する地質学的背景が、花崗岩地域ではなく、火山岩地域であることを示唆する。そして実際にII類に含まれる岩石片は、軽石、安山岩、玄武岩およびディサイトといういすれも火山岩であった。試料中に認められたこれらの火山岩は、どれもほとんど変質していないことから、第四紀に噴出した火山岩に由来すると考えられる。II類に分類された試料は、全て駿河系に分類されているが、駿河といふ地域では、特に東部において富士山、箱根火山および伊豆の火山を給源とする火山岩が広く分布する。このことから、II類の胎土は、上記諸火山が分布する静岡県東部地域に由来する可能性が高い。今回の試料出土流域で言えば、富士川、黄瀬川、狩野川の流域でII類のような鉱物片・岩石片組成が認められると考えられる。

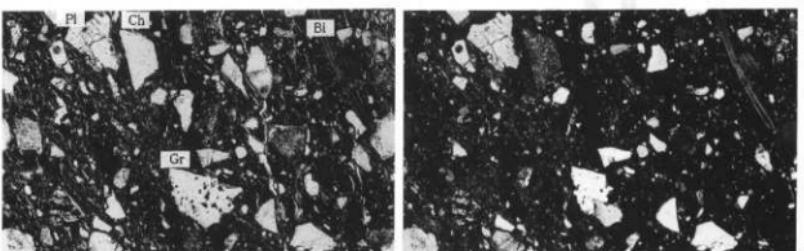
図版1 胎土薄片(1)



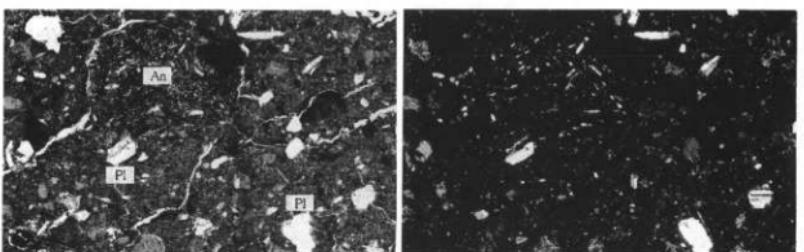
1. 試料A 都田川下流 8世紀 土師器窯 遠江系



2. 試料C 天竜川 恒武西浦遺跡 SR16 8世紀 土師器窯 駿河系



3. 試料E 太田川 新堀遺跡 SD305 8世紀 土師器窯 遠江系



4. 試料J 大井川 藤守遺跡 SX6 8世紀 土師器窯 遠江系

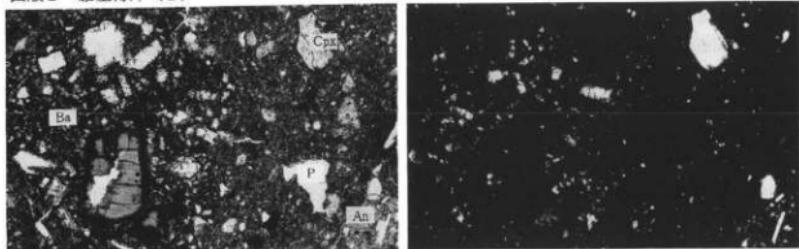
Qt: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Bi: 黒雲母, Ch: チャート, An: 安山岩,

Ba: 玄武岩, Gr: 花崗岩,

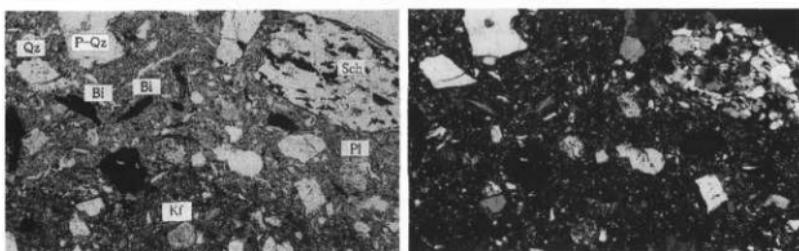
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

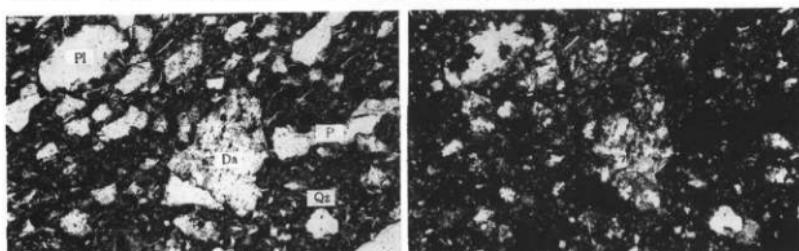
図版2 胎土薄片(2)



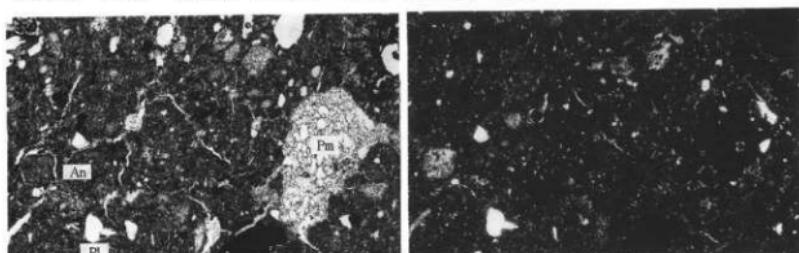
5. 試料K 安倍川 川合志保田遺跡 SC02 8世紀 土師器甕 駿河系



6. 試料L 安倍川 川合志保田遺跡 SC02 8世紀 土師器甕 遠江系



7. 試料O 黄瀬川 的場遺跡 SB4 窯内 8世紀 土師器甕 駿河系



8. 試料P 狩野川 仲道遺跡 旧河道 7・8世紀 土師器甕 駿河系

Qz: 石英. Kf: カリ長石. Pl: 斜長石. Cpx: 単斜輝石. Bi: 黒雲母. Da: デイサイト.

An: 安山岩. Ba: 玄武岩. P-Qz: 多結晶石英. Gr: 花崗岩. Sch: 結晶片岩.

Pm: 軽石. P: 孔隙. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

以上のことから、今回の試料のうち、天竜川流域に位置する恒武西浦遺跡から出土した駿河系の試料Cと黄瀬川流域に位置する的場遺跡から出土した遠江系の試料Nは、いずれも搬入品である可能性が高い。そして、I類の由来する地域ともII類の由来する地域とも地質学的背景の異なる、大井川および安倍川流域に位置する藤守遺跡および川合志保田遺跡の出土試料は、遠江系と駿河系のいずれもが搬入品である可能性がある。

(2) I類とII類の多様性について

今回の分析調査の結果、7世紀後半から9世紀前半とされる土師器試料について、胎土の特徴から大きくI類・II類に分類することができた。さらにこれらは、胎土中の砂粒における粒径組成の違いから、それぞれ3~4類に細分することができた。素地土に含まれている砂粒の粒径組成の違いは、胎土の調整方法や製作地あるいは製作集団などの違いを反映している可能性もあり、今後とも注目される事実である。この視点に立って今回の結果をみると、以下のように説明することも可能である。

遠江系であるI類は、静岡県西部の都田川、天竜川、太田川流域の各遺跡においては、Ia類またはIb類であるのに対して、逆川以東の各河川流域の各遺跡においてはIc類あるいは藤守遺跡ではIa類とIc類の中間型という結果になっている。同じ遠江系でも、遠江在地のものと駿河地域へ搬入されたものとでは、胎土の調整方法などが異なっていたということになる。これは、駿河系であるII類でも同様であり、天竜川および大井川流域の各遺跡ではIIa類、安倍川および富士川流域の各遺跡ではIIb類、さらに黄瀬川流域ではIIc類、狩野川流域ではIId類に分類されている。すなわち、駿河系でも駿河東部の在地のものと搬入品とみられる駿河西部地域および遠江地域でそれぞれ製作方法などが異なっていた可能性がある。

以上に述べたことは、今回分析対象とした15点（遺跡ごとにみれば1~3点）の分析結果に基づいて想像したことであり、今後遺跡の立地や流域を考慮してさらに分析例を蓄積することにより、検証する必要があることはいうまでもない。また、実際に各河川流域における自然堆積層の砂粒の鉱物・岩石組成や粒径組成の資料も蓄積した上で、土器胎土分析結果との比較検討を行うことにより、その製作・流通の実体がさらに明らかになると期待される。

引用文献

- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高（1999）瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆积学的による—。日本文化財学会第16回大会研究発表要旨集, p.120-121。
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会（1988）日本の地質4 中部地方Ⅰ, 330p., 共立出版。
静岡県埋蔵文化財調査研究所（2002）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第131集 藤守遺跡－平成12年度
(主)焼津櫟原線緊急地方道道路改築（B）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 217p.

付編3 西遠江型甕と駿東型甕について

柴田 瞳

はじめに

藤守遺跡からは異系統の土師器甕が出土しており、それらが在地産であるのかどうかということと、搬入品であるならばその製作地を推定するために胎土分析を依頼した。分析は、当遺跡出土試料と比較試料として県内の主要河川に近い遺跡から出土した西遠江型甕と駿東型甕を対象とし、パリノ・サーゲイ株式会社が実施し、その結果を付編2に掲載した。

平成14年の報告書では異系統を遠江型（註1）と駿東型（註2）としたが、遠江型が胎土から西遠江地域で製作されている可能性が高いものとして、今回の報告では西遠江型の名称を用いている。

分析に使用した土器の時期は、奈良～平安時代前期のものが多いが、当遺跡と仲道遺跡出土例に7世紀代にさかのぼる可能性の高いものが含まれている。

分析結果を要約すると、中部地方の大井川と安倍川流域に位置する当遺跡と川合志保田遺跡例（鈴木1998）は搬入品の可能性が高く、県西部と東部の遺跡では、西遠江型甕と駿東型甕は狭い意味での在地で製作されている可能性が指摘された。ただし、分析点数が限られたなかでの結論であり、今後に多くの課題を残している。

西遠江型甕と駿東型甕の主要な分布範囲は、伊豆国を含んでいるが、それぞれ旧国の範囲におおよそ一致する。旧国内部の流通網により、東遠江地域や西駿河地域へとそれらの甕は搬出されている可能性もある。駿東型甕は6世紀にはすでに存在しており、より早い段階から伊豆地方を含む広域に分布している。それらの律令期以前の駿東型甕については、今後の重要な検討課題である。

胎土分析においては、混和材や素地土の移動（流通）が常に問題とされる。今回は、静岡県中部地方から出土する土器の胎土が比較的識別し易いこともあり、遠隔地への混和材の移動（流通）を考慮しなくても良さうではある。素地土に関しては、胎土と型式学的特徴が土師器甕については一致しているため、とりあえず、製品が運ばれているものとして記述する。

1. 西遠江型甕の形態と分布の問題

西遠江型甕の器形は大小様々であり、大きさによって形状が異なっている。祭祀用の小型品から壺形の大型品まで様々である。一般的には、胎土に黒雲母、橙色粒子と石英を多く含み、口縁部の断面形が「コ」字状を成し、口唇部内面が肥厚しているものが認識され易い。ただし、駿河地方からは、様々な形状の西遠江型甕が出土している遺跡もあり、ある特定の形状の甕だけの移動現象することはできない。その他の供膳形態などの土師器については今後の検討課題であるが、甕と同様に駿河地方で散見されるようである。当遺跡や川合遺跡志保田地区などからも搬入品と思われる西遠江型の小型甕や土師器壺などが出土している。

位置的には東遠江地域であるが、駿河国に近い島田市中原・宮裏遺跡からも同様の西遠江型の甕や壺が多く出土している（勝又2002）。

西駿河地域では、古代東海道の備溝からも西遠江型甕が出土しており（及川1997）、常陸国と墨書きされた木簡が出土した地点付近から、完形に近く復原されたものが発見されている。少数例ではあるが、祭祀的行為に関連した遺構や土器群と共に出土している例が目に付く。また、安倍郡衙跡と目されている宮下遺跡（平野1991）や内荒遺跡（山田1988）からは、比較的多くの大小の西遠江型甕が灰釉陶器や甲斐型土器などと共に出土している。

東駿河地域では、富士市東平遺跡（平林・志村ほか1981）、沼津市鳥沢遺跡（鶴田1998）、同市下石田

原田遺跡（鶴田2000）などから西遠江型壺が出土しており、とくに海岸沿いの集落跡からの出土例が近年の発掘調査により増加しているようである。今回の分析では、長泉町の的場遺跡出土例が搬入品ではないかと指摘された。

量的には東に向かうほど減少傾向にあると思われるが、所謂律令的祭祀行為の東方への拡散の波に乗った波及であれば、点的に多量の西遠江型土器が出土する可能性があり、祭祀の執行に関連した人々の往来も当然想定される。

藤守遺跡がどのような集落跡であったかは、今後の調査の進展に期待したいが、遠江国と駿河国の境界に位置しており、近距離地域での婚姻を含む日常的な交流は盛んであったのであろう。

2. 駿東型壺の形態と分布の問題

駿東型壺は西遠江型壺ほどのバラエティは無いが、口縁部内面が肥厚する球胴と長胴形のものがあり、他に壺形の大型品なども存在する。駿東型壺は胎土に白色粒子を多量に含み、厚手で黄褐色または茶褐色の色調のため、他の土器との識別が容易である。遠江地方での出土例は少ないが、相模地方では比較的多く確認されているようである。田尾誠敏氏によると、相模地方では甲斐型壺と駿東型壺の分布がほぼ重なることから、甲斐→駿河→相模への海上交易が想定されている。相模地方では、海岸沿いの集落に駿東型壺・壺が多く搬入されているとされる。新島本村吹之江遺跡からも駿東型壺、甲斐型壺や湖西産須恵器などが出土している（水口1987）ことから、商品の輸送が海上ルートで行われたとし、駿東型壺は煮堅魚・煮堅魚汁用の容器として搬入されている可能性が論じられている（註3）。

駿東型壺は須恵器の模倣品であり、煮炊き用だけでなく、貯蔵用としても利用されていた可能性が指摘されている（平野1991）。また、駿東型壺には長胴壺と共に二次焼成による煤の付着の無い例があることから、貯蔵具として利用されていたものもあるとする見解もある（羽島1983）。

藤守遺跡では須恵器の壺が存在し、西遠江型の長胴壺も多く出土し、二次焼成による煤の付着のある駿東型壺も多数発見されている。駿東型壺は須恵器の代わりに当然貯蔵具として利用される機会もあったであろうが、遠隔地からの出土例をすべて交易品を入れた容器とするには早計であろう。東駿河地域では、甲斐型壺が日常の食器として利用されていた可能性があり、駿東型壺と共に出土してもそれほど不思議なことでは無いと思われる。より問題になるのは、駿東型壺に伴う壺であろう。その壺には様々な形態のものがあるが、壺のように特徴的では無いため、破片では他地域のものとの識別が難しいものも多い。そのため、目に付き易い壺と比較すると壺の量比はかなり低くなる傾向がある。

東遠江地域の牧之原台地上の集落跡からは、少数の駿東型壺が出土している。胎土の状況から推測すると、それらの多くは搬入品であろう。袋井市坂尻遺跡からは古墳時代後期後半の搬入品とされる駿東型壺が1点報告されている（松井1995）。

西遠江地域では駿東型壺の発見例は非常に稀であるが、注目すべき事例として浜松市の恒武西浦遺跡出土例がある。旧流路（SR16）からの出土であるが、同様の胎土を有する駿東型の壺と壺が各1点出土している（拙著2000）。

西遠江型壺は旧国の範囲を超えて、東方へと量的に多く波及している。それに対して、識別し易いという有利な条件下にあるにもかかわらず、駿東型壺の西方への波及は、西遠江型壺と比較するとそれほど顕著では無い。

駿東型壺が交易品を入れた容器として各集落に搬入されているとするには、遠江以西の集落跡からの出土数が少な過ぎるくらいがある。遠江地方には貯蔵具として須恵器がかなり普及しており、また、駿東型壺が煮炊き用として優れた性能があったようにも思えない。

駿東型壺の遠隔地での出土例を理解するには、胎土分析を含めた今後の詳細な検討が必要であろうが、

恒武西浦遺跡出土例を最大限評価すれば、やはりそこには駿東型甕を煮炊きに使用していた人が持ち込んでいる可能性がないであろうか。

まとめにかえて

今回の胎土分析は、搬入品と思われる異系統の甕が同じ集落から出土する現象に疑問を持ったことが始まりであった。当初は用途の異なる甕がある特定地域からの交易品として流通していたのではないかという想定を検証するために実施した。しかし、この仮説は胎土分析の結果からすると否定的な見解が示されている。

律令期の西遠江型甕と駿東型甕の分布からは、旧国内部の流通網の存在と旧国間の隣接地での活発な交流の様子が窺われる。また、西遠江型甕のより東方への波及の背景には、律令的祭祀行為に伴う祭祀具としての用途が、官人層を中心とする祭祀の執行者にとって必要とされたためではないかと推察される。

今回の胎土分析の目的を記すにあたって、西遠江型甕と駿東型甕についての文献を漁り、実物をいくつかの遺跡で実見した。その時の感想と類例を簡単に紹介してきたが、やはり、特定の器種だけでは、当時の多様な社会構造や人々の生活について多くを語ることができないのでと感じたのが素直な現在の感想である。

今後は、他の器種を含む食器や容器全般についても検討していきたいと考えている。

胎土分析における試料の提供や土器の実見に際して多くの方々にお世話になり、また、有益な助言を賜った。御芳名を記して深く感謝申し上げたい。

池谷信之、池谷初恵、柏木善治、栗原雅也、志村博、鈴木良孝、瀬川裕市郎、中川律子、平野吾郎
(敬称略、五十音順)

註

- (1) 管見では、平野吾郎1991「宮下遺跡（遺物編）」に遠江型の記載が認められ、その後、佐野五十三1996「遠・駿・豆における古代煮沸具」や贊元洋1996「市道遺跡（1）」などでも遠江型の名称が使われている。最近では、三河型甕（城ヶ谷1991）の認識から分離使用される傾向にあるのではないかと推測している。ただし、これ以前にも遠江型の通称が使用されていた可能性もある。名称は異なるが、伊場遺跡の調査時には、すでに奈良時代の遠江地方の甕の特徴は認識されており、肩下部に段を有する断面「コ」字状口縁の甕として一般的に認知されていたようである（平野吾郎氏御教示）。
- (2) 平林将信によると、駿東型甕は小野真一氏によりその特徴と分布範囲が認識され、その後「駿東型」の名称が研究者間で使用されるようになり、瀬川裕市郎氏が「シンポジウム盤状坏」に報告して以後、一般に広く普及したようである（平林1981）。伊豆地方からも多くの駿東型甕が出土しているが、在地で製作されているものか確認していないため、駿東型甕の通称を今回は用いている。
- (3) 当研究所の研修会で、瀬川裕市郎氏は煮堅魚汁（煎汁）について説明された。煎汁には液体の他にゼリー状のものもあり、土器に容れなくとも運搬は可能であるとされていた。

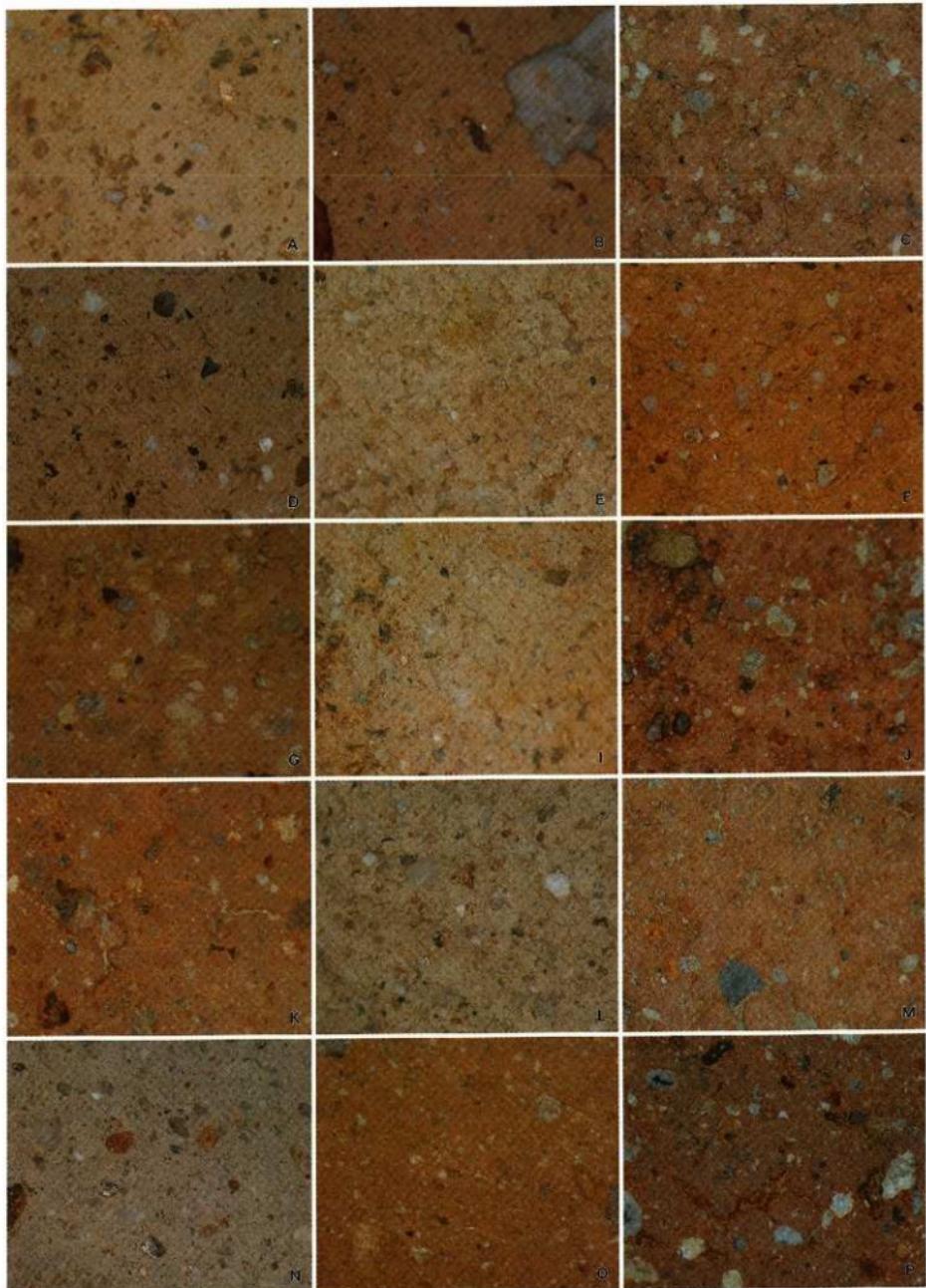
引用参考文献

- 瀬川裕市郎 1981 「静岡県東部地域における奈良時代の土器の様相」『シンポジウム盤状坏』 東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会
- 平林将信・志村博 他 1981 『東平 遺物考察編』 富士市教育員会

羽島靖子	1983 「静岡県東部地域における古墳時代後期の壺型土器について」『中島下舞台遺跡』 三島市教育委員会
水口由紀子	1987 「奈良・平安時代」『吹之江遺跡』 新島本村教育委員会
山田成洋	1998 「第2章第1節 土器類・土製品」『内荒遺跡（遺物編）』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
平野吾郎	1991 「遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開」『古代探覗III』 早稲田大学出版部
平野吾郎	1991 「第II章 遺物」『宮下遺跡（遺物編）』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
城ヶ谷和広	1991 「古代尾張の土師器－6世紀後半から11世紀の様相－」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
田尾誠敏	1992 「相模における駿東型土器の分布について」『東海大学校地内遺跡調査報告3』 東海大学校地内遺跡調査団
池谷初恵	1995 「箱根田遺跡」『三島市埋蔵文化財調査報告IV』 三島市教育委員会
佐野五十三	1996 「遠・駿・豆における古代の煮沸具」『鍋と甕そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
賛 元洋	1996 「市道遺跡（I）」 豊橋市教育委員会
及川 司	1997 「曲金北遺跡（遺物・考察編）」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木良孝	1998 「川合遺跡志保田地区」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鶴田晴徳	1998 「鳥沢遺跡」 沼津市教育委員会
鶴田晴徳	2000 「下石田原田遺跡」 沼津市教育委員会
柴田 瞳	2000 「恒武西浦・西宮遺跡」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

*本書の61・62頁に掲載した引用参考文献と重複しているものは省略した。

脱稿後、及川司氏が富士市東平遺跡の報告書（1981）のなかで、県内の律令期の土師器の分布図について論じていることを知った。氏も「他地域からの人間あるいは物の移動が、これらの土器量からも盛んに行われたもの」と結論付けられている。

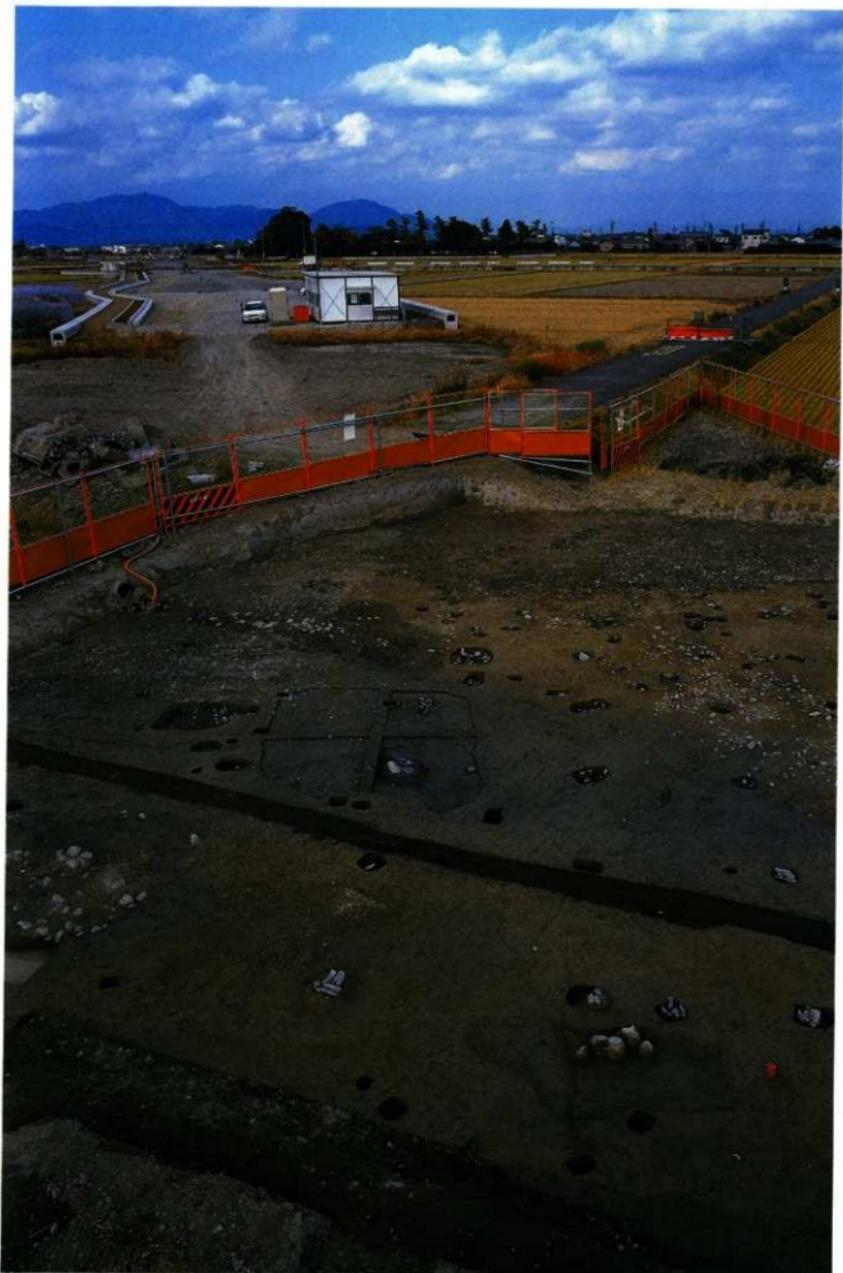


写 真 図 版



平成12年度調査区と今回の調査区との合成写真

図版2



S HI6 (南西より)



1. 調査区周辺の景観（北西より）



2. 調査区全景（北より）

図版4



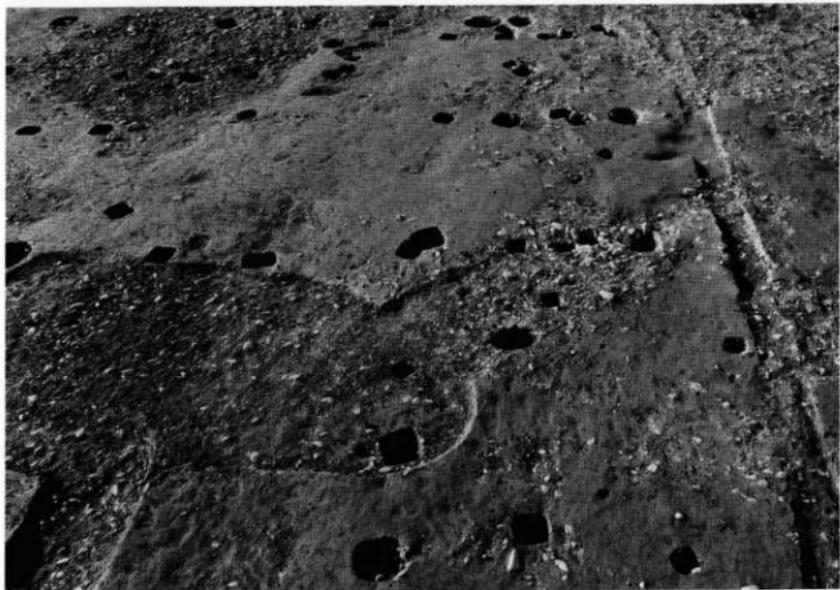
1. 調査区全景（南より）



2. SH13、SX12・14（西より）



1. SH19~21 (北西より)



2. SH23・24 (東より)

図版6



1. SH23~25 (南西より)



2. SH25~28 (北東より)



1. SR 1、SD24 (南東より)



2. SD 1 (北より)

図版8



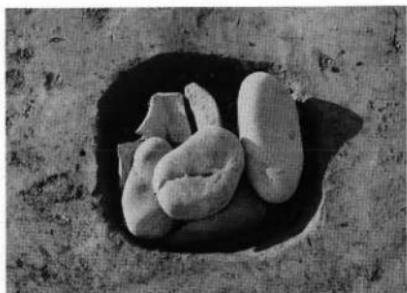
1. SH33 (北より)



2. SH13-2、SH16-13、SX12 (北東より)



1. SH16-10 (北より)



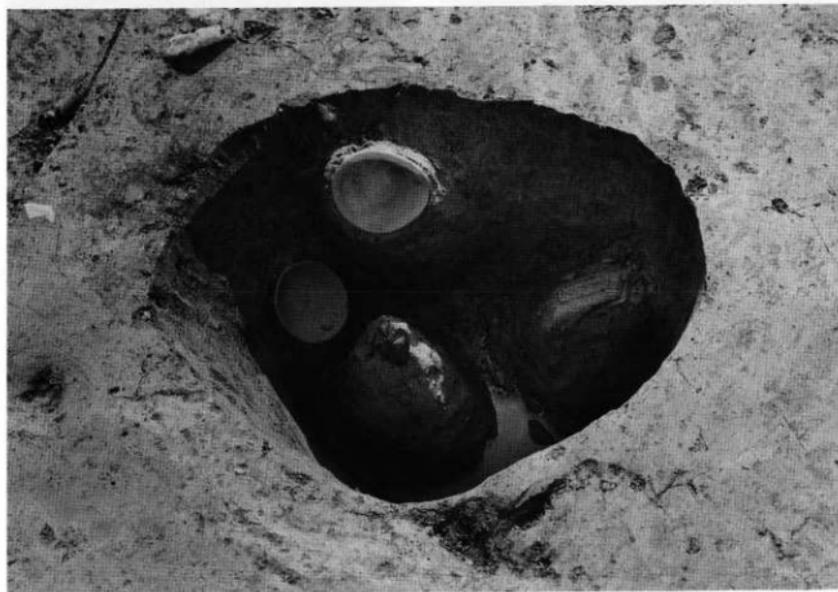
2. SH16-11上層 (南東より)



3. SH16-14 (北東より)



4. SH16-11下層 (北より)



5. SH16-20 (北より)

図版10



1. SH16-16 (東より)



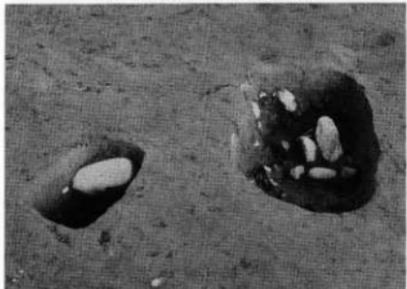
2. SH16-18 (西より)



3. SH16-19 (南東より)



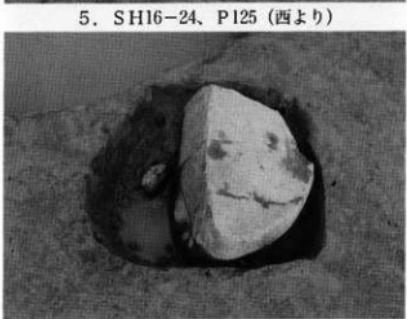
4. SH16-23 (東より)



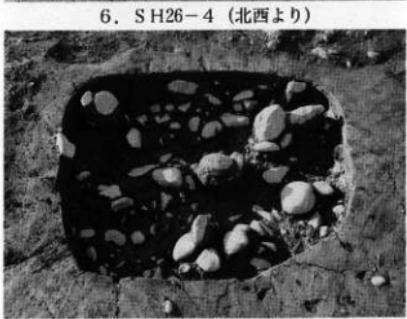
5. SH16-24, P125 (西より)



6. SH26-4 (北西より)



7. SH28-5 (南西より)



8. SF21 (南東より)



1. P150・151 (北東より)



2. SXII (北より)

図版12



1. SX12 (北西より)



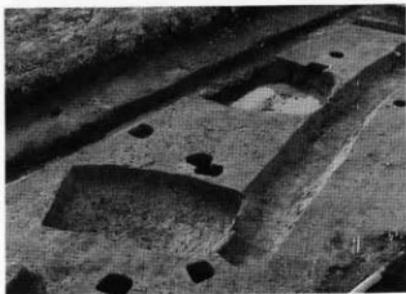
2. SF18 (北西より)



1. SE 3 (南東より)



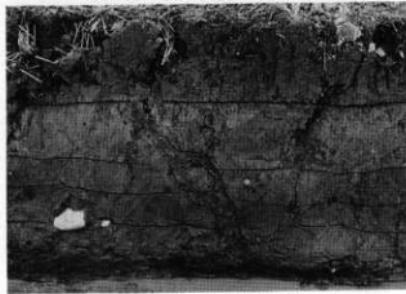
2. SE 3 土層 (南東より)



3. SF16、SD7 (東より)



4. SE 5 (南西より)



5. B 7 区噴砂 (西より)

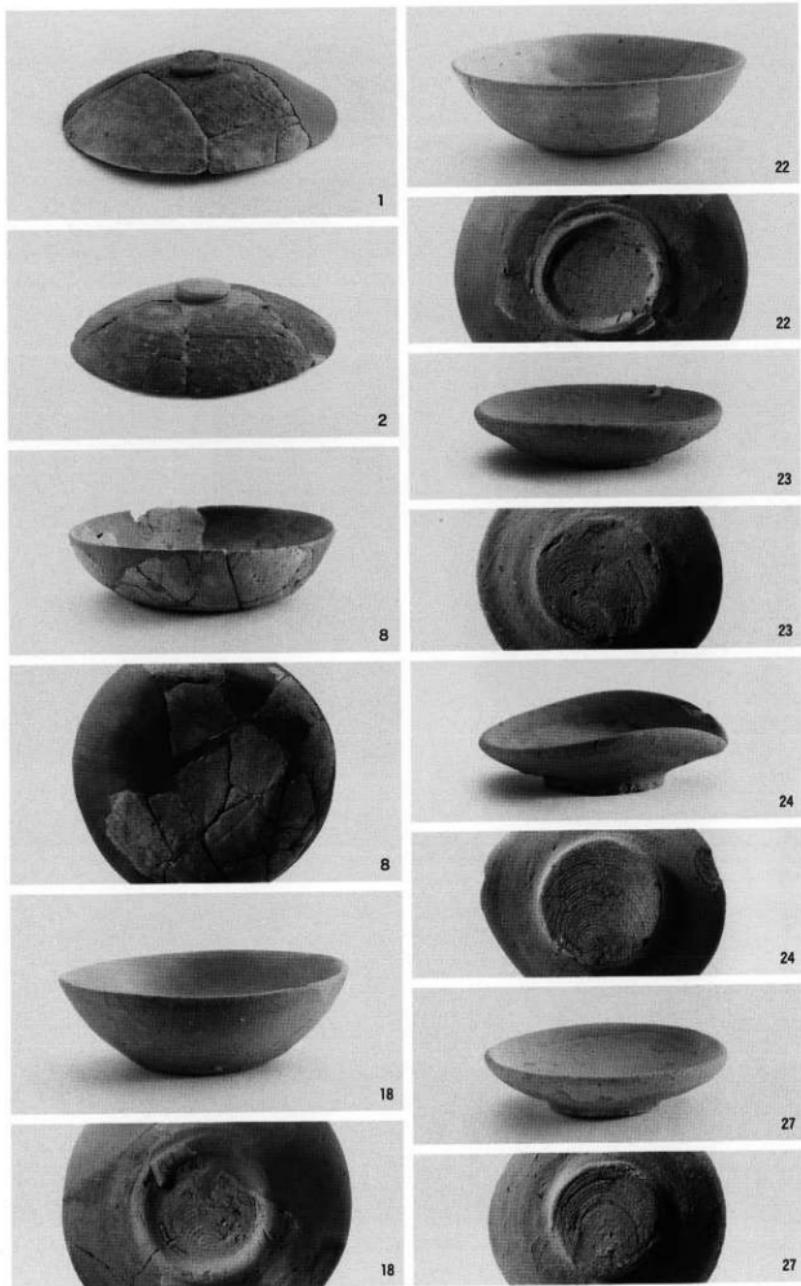
図版14



1. SE 4 (北東より)

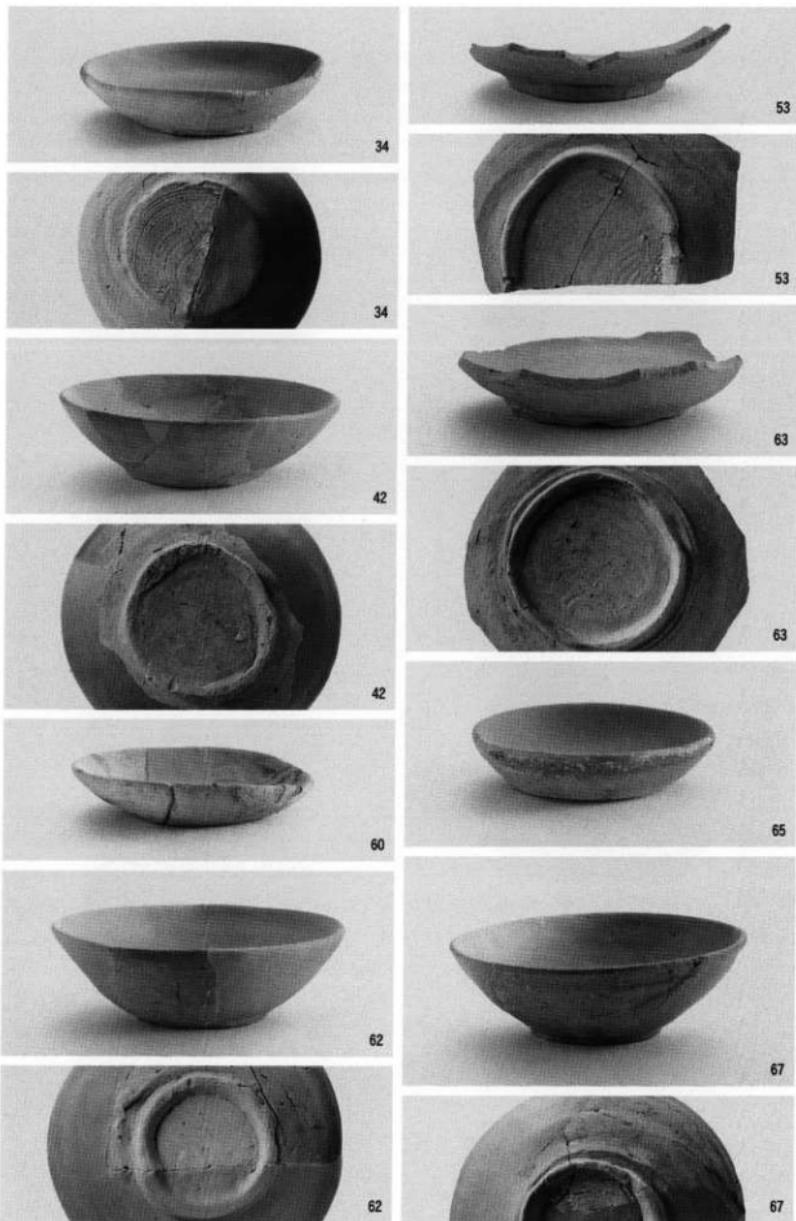


2. SE 5 (南西より)

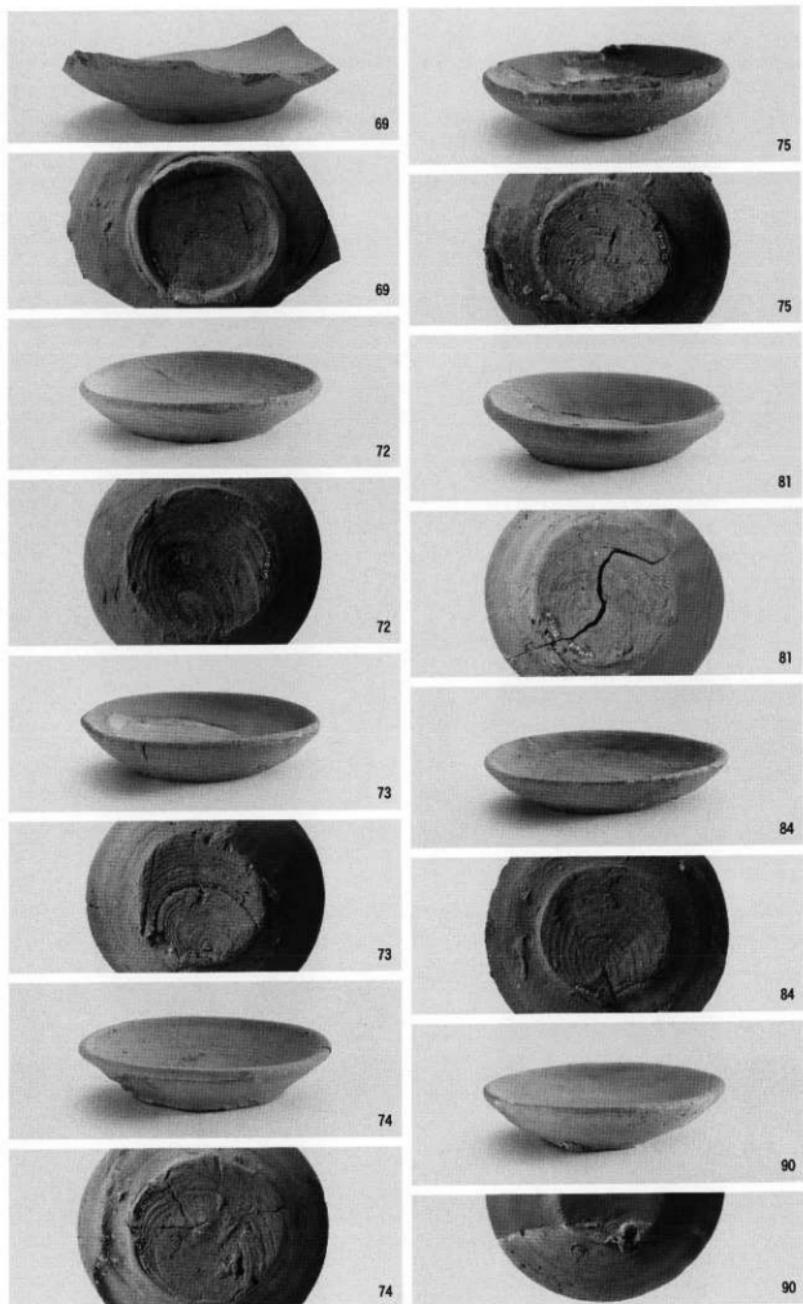


出土遺物（1）

図版16

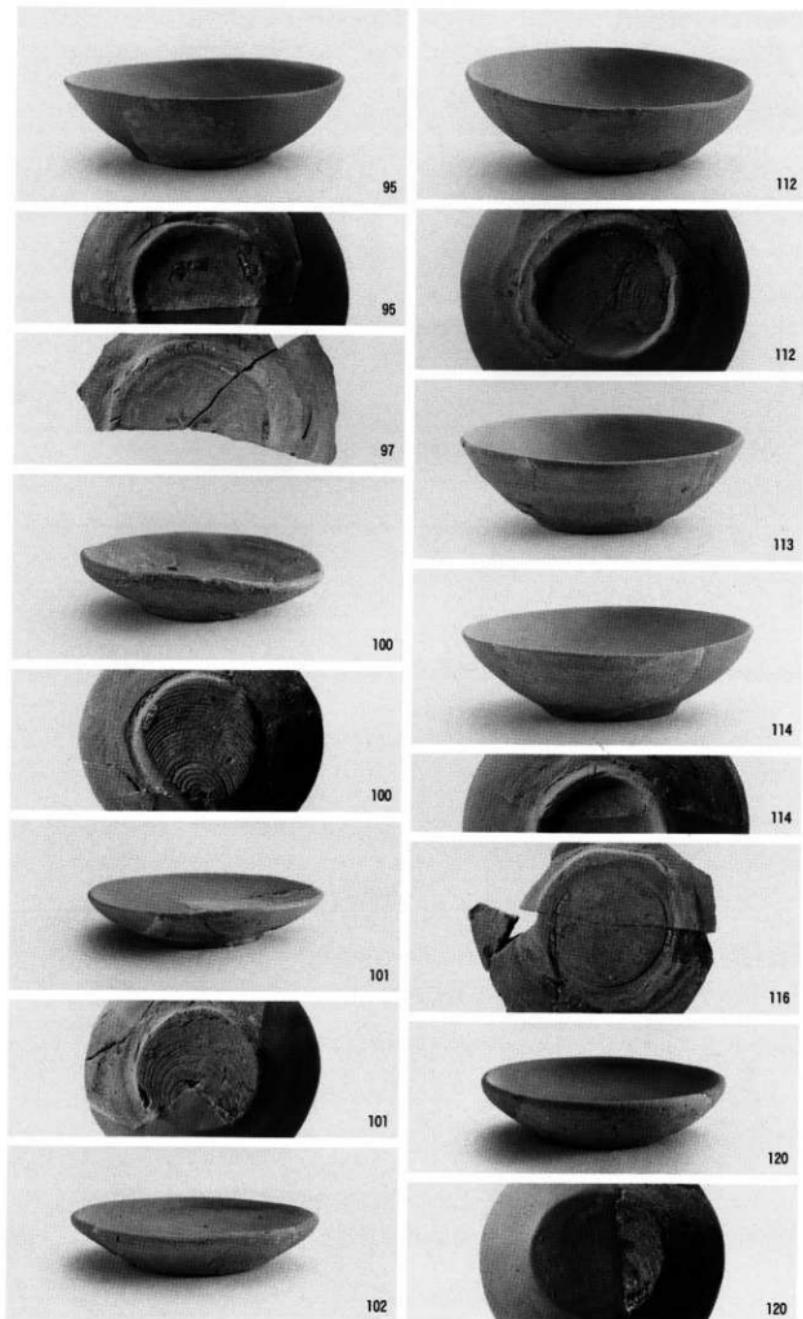


出土遺物（2）

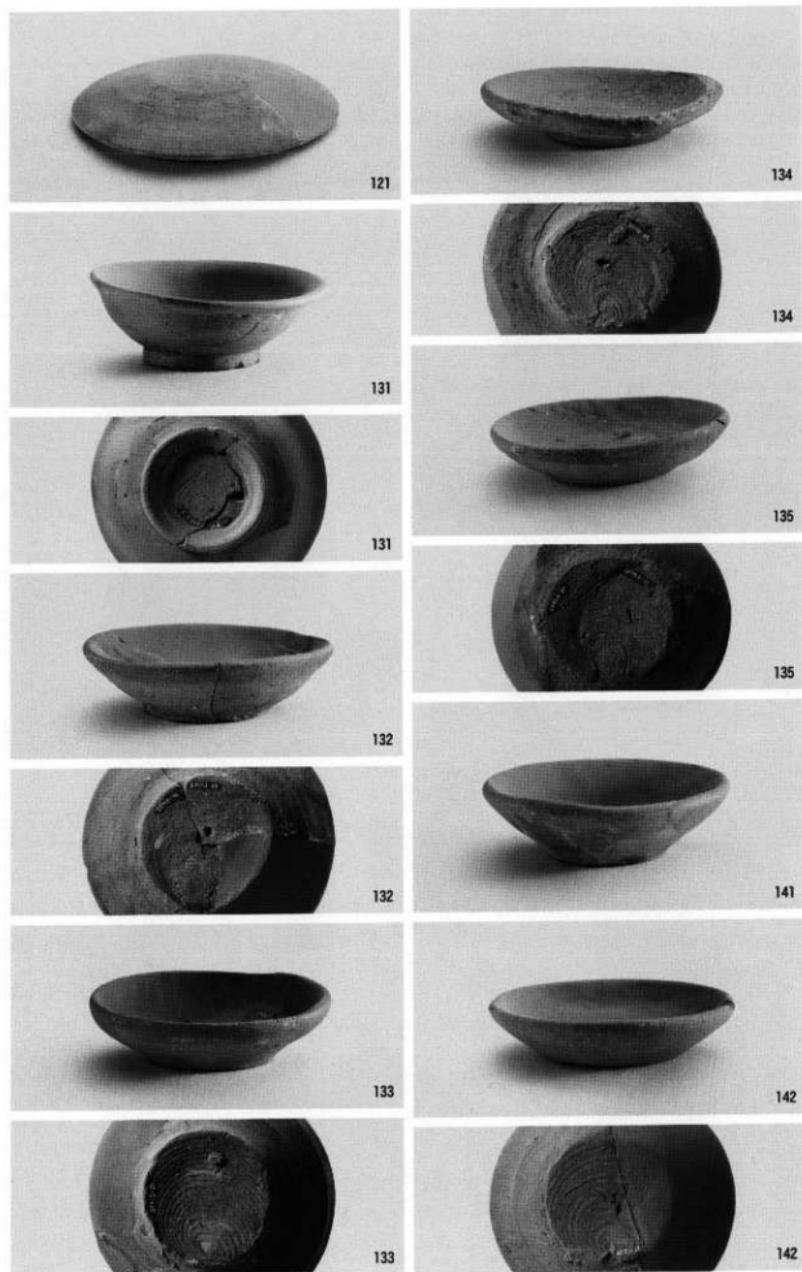


出土遺物（3）

図版18

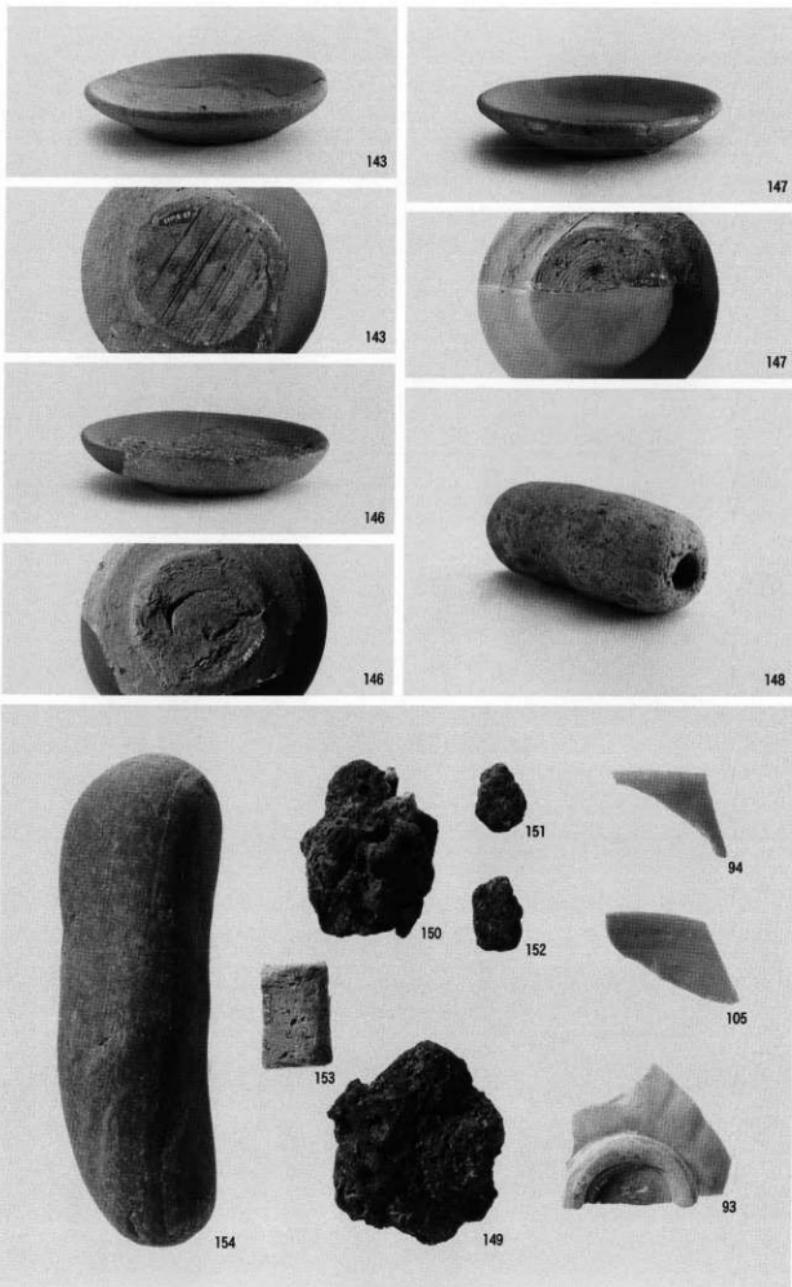


出土遺物（4）

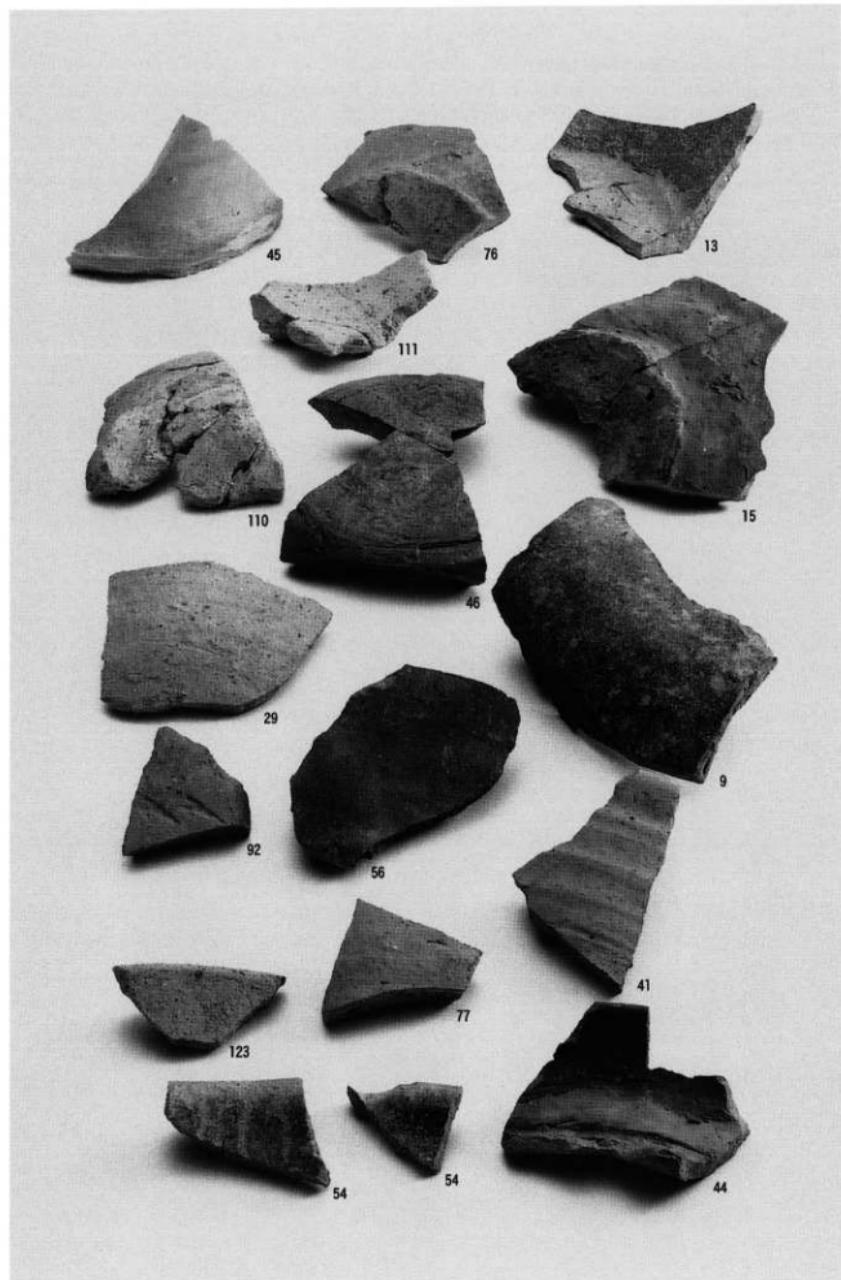


出土遺物（5）

図版20



出土遺物（6）



出土遺物（7）

本遺跡の調査を実施するにあたって、大井川町教育委員会と藤守地区自治会から御協力を賜り、その他、多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。(順不同 敬称略)

大場悦郎 河野義行 田中祥郎 山下次郎

平野吾郎 栗原雅也 中川律子 塚本和弘 森原明廣 柏木善治 高崎直成 柴田稔 河合修 佐野元
瀬川裕市郎 望月精史 藤崎高志 大崎康文 志村博 中野晴久 増山禎之 池谷信之 池谷初恵

鈴木良孝

報告書抄録

ふりがな	ふじもりいせき						
書名	藤守遺跡II						
副書名	平成14年度（主）焼津棟原線緊急地方道道路改築（A）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第139集						
編著者名	柴田 瞳、パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261						
発行年月日	2003年3月14日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 (世界地図系)	東経 (世界地図系)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじもり 藤守	しづおかけん し だ ぐん 静岡県志太郡 大井川町			34度 48分 15秒	138度 18分 49秒 (B 6杭)	20021025 ～ 20021213	650m ²	(主)焼津棟原線 緊急地方道道路 改築(A)工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
		古墳時代末期	土器集積1	須恵器 土師器	
藤守	集落	平安時代末期～ 鎌倉時代中期	土坑5 掘立柱建物 跡21 溝(区画溝 含む)12 井戸跡3	山茶碗(墨書5点含む) 土師器 陶磁器(青磁3点含む) 鉄滓4 砥石1 叩石1 陶錘1	屋敷地を囲む区画 溝
		中世以降?	脈状砂		地震痕跡

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第139集

藤守遺跡 II

平成14年度 (主) 焼津棟原線緊急地方道道路改築
(A) 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年3月14日発行

編集発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23番20号
TEL (054) 262-4261㈹
FAX (054) 262-4266

印刷所 松本印刷株式会社
〒420-0054 静岡県静岡市南安倍1丁目1番18号
TEL (054) 255-4862㈹
FAX (054) 253-2309